

639

139



\* 0054713000 \*

0054713-000

639-139

飛驒の伝説と民謡

高山西小学校研究部・編

高山西小学校研究部

昭和8

AID

31.2.29



新編の傳説と民謡





國貞版畫  
白真弓肥太右工門



白眞

國貞版畫  
白眞弓太在王門

## 卷頭の辞

飛驒の口碑、傳説は随分豊富にある。しかし詳細に調べると筋の同じものが可なり数多い。例へば、椀貸せの傳説、岩魚の化けた傳説、大蛇の主の傳説等それである。又狐にばかされた話や、天狗にさらはれた話も到る處にあつて、而も其の筋は同一で、且簡單である。従つてこれ等のものに付ては代表的のものみに止め、他は割愛した。此の外大野郡丹生川村淨願寺の鐘と、益田郡小坂町淨福寺の鐘についても面白い傳説があるが、材料が間に合はなかつた爲に載せることが出来なかつたのは残念である。

飛驒三郡に亘つて集録したが、此の外に尙面白いものが幾多あるであらう。これ等は他日機會を得て補足したい考へである。

從來語り傳へられた筋をもご、して、多少趣味的に、讀物式に作り替へたが日時が少く充分の推敲も出來ず、語句の難解なものや、假名遣等についても不備な点が多々あること、思はれる。

本冊に載せた材料は飛州志、益田郡誌、飛驒史壇、飛驒風物記、斐太後風土記等より集め、代情通藏氏の助力を忝ふした事を茲に謹んで感謝する次第である。

昭和八年七月一日

高木清太夫

目次

一	寶刀小鳥丸	(國寶 國分寺藏)	一
二	南裔和尚	(東山宗猷寺の僧)	五
三	駿馬山櫻	(山櫻塚は小糸坂にあり。本町山櫻神社)	六
四	串柿仙人	(高山町川原町の人)	七
五	時の鐘	(丹生川村千光寺藏)	九
六	松田亮長	(高山町の生みし彫刻家)	一〇
七	小糸坂	春の夕方(高山町上岡本)	一六
八	加藤光正	(墓所は法華寺裏山)	一九
九	高山御坊	(白川村鳩谷)	二三

善俊上人

築城日記  
狂人

逸話 一  
逸話 一  
逸話 三

中野御坊  
明了

(莊川村中野)

。(高山照蓮寺の開基)

二 御坊住

。(高山別院に居た寺侍)

二 松倉の落城

。(高山町上岡本)

縫之助の功名  
光石

。(長野縣南安曇郡大野川)

三 飯山の観音

。(大名田町千島)

三 彫刻師面平

。(高山本町裏に住みし面師)

逸話 一

逸話 二

四 陣屋稻荷

。(高山町一本杉神社境内)

五 鍛冶橋

。(高山町)

六 名作秘話

。(亮長の高弟亮直)

七 神猿

。(縣社日枝神社)

八 盗人神

。(高山町松本)

九 椀貸せ岩

。(大名田町江名子)

三 大銀杏

。(大名田町國分寺)

二五

三六

三六

四〇

四〇

四四

四七

五〇

五三

二 名僧

。(高山町眞蓮寺にぬた僧)

三 三福寺峠の狐

。(大八賀村三福寺)

三 鐵漿蛇

。(大八賀村漆垣内鍋山城址)

四 甘酒祭

。(大名田町江名子荒神社)

五 神馬物語

。(宮村水無神社)

六 金雞城址

。(丹生川村町方)

七 玄興寺の狐

。(高山町上岡本)

六 兩面宿儺

。(丹生川村日面)

元 圓空法師

。(丹生川村千光寺)

三 夜泣の墓

。(宮村)

三 二ツ葉の栗

。(清見村三日町牧口)

三 月出宗監

。(丹生村根方)

三 狼退治

。(宮村)

四 怪力小太郎

。(益田郡小坂町)

五 鹿の湯

。(大八賀村上野)

六 神明の貫ひ水

。(大八賀村上野)

五七

五八

六二

六六

七〇

七四

七八

八二

八六

九〇

九四

九八

一〇二

一〇六

一〇九

一一三



三 水 無 磧

(宮村)

九

二 天 靈 鐘

(丹生川村千光寺)

一〇〇

一 亮 琴 淵

(丹生川村根方)

一〇三

四 名 村 山 天 神

(吉城郡國府村)

一〇五

三 王 塚

(上枝村中切)

一〇七

王 塚  
おいの木

三 飛 驒 の 工

(清見村牧ヶ洞)

一一〇

三 殿 地 屋 敷

(山之口村)

一一三

四 岩 魚 の 怪

(清見村)

一一五

三 姥 池

(莊川村猿丸)

一一六

三 山 人

(白川村木谷)

一一九

三 猿 丸

(益田郡中原村)

一二一

三 白 真 弓

(吉城郡國府村養輪)

一二七

三 孝 池 水 城

(吉城郡國府村養輪)

一二三

三 太 子 櫻

(吉城郡阿曾府村吉田)

一三三

三 歌 之 助 塚

(益田郡下呂町)

一三四

三 が た 橋

(益田郡小坂町)

一三六

三 蛤 石

(吉城郡小鷹利村高野)

一三八

三 嫁 淵

(吉城郡坂下村岸奥)

一四〇

三 白 鷺 の 湯

(益田郡下呂町)

一四三

三 お 禮 の 轡

(益田郡竹原村)

一四四

三 月 ヶ 瀬

(吉城郡河合村)

一四八

三 高 坂 猫

(益田郡萩原町)

一五一

三 比 丘 尼 屋 敷

(益田郡萩原町)

一五三

三 河 童 の 片 腕

(吉城郡坂下村)

一五七

三 人 柱

(吉城郡國府村鶴巢)

一六〇

三 杣 が 池

(益田郡高根村日和田)

一六四

三 里 自 慢

一六八

## 飛驒の傳説と民謡

### 一 寶刀小烏丸

「和尚様、今日は」 「お、武坊か、此の頃はあまり顔を見せないな」 「え、學校では試験が始まつてのますので、每晚ねち鉢巻きと云ふわけです」 「さうか、それはえらいな、しかし今夜は土曜日だし、少しは暇があるだろう」 「え、少しはあります。何か用事でもあるのですか」 「いや別に用事はない。武坊も毎日試験で苦しめられてゐるそうだから、少しは武坊の大好きな軍記物語でもしてやれば、頭の疲れもなほらうつてわけだ」 「そうですね、そりや有りがたい。では和尚様、いつかお願いした寺寶小烏丸についてお話し下さいませんか」 「うむ、小烏丸か、い、な。當寺重寶小烏丸……よかろう、話してやろう」 「有りがたうございます」 「まづ此の寺へ傳はつたわけを話さうかな」 「え、願ひます」 「頃は天正十年壬午の十月、高原郷殿村の城主江馬常陸介平輝盛は甲州武田信玄と謀し合せ、其の援兵を數多たのみ手勢諸共三千餘騎、高原を出發し大阪ヶ原を打ち越え松倉城をはじめ飛驒國中を討ち從へんものと、勇みに勇んで荒城郷へ出馬することにな

つた」「荒城郷つて、今の國府村でしたな」「そうだ、昔は荒城郷と云つたのだ。こちらは松倉城主三木自綱ヨリツナ入道休庵、小鷹利城の牛丸親正、小島城の小島時光等の加勢を頼んで、これも荒城郷まで兵をすゝめ江馬の大軍と對することになつた」「三木方は、どの位の兵力でしたか」「そうく、三木方は軍兵二千五百餘騎、さしもの物々しく出かけた。今村あたりまで来てみると、梨子打城附近には旛旗十數旒をなびかせ、軍を魚鱗に列ね鯨波を作つて鎧先を揃へ、殊の外物々しい有様であつた。三木勢は早速今村峠の各所に陣を構へると、江馬勢は三木の軍を一舉に突崩さんと三方へ一度に攻めかゝつて來た。三木勢も待ち設けたことであるから峠の上から矢玉を雨あられの様に射かけ、此所をせんごと戰つたので勝負は何時つくものとも思へなかつた。所が輝盛は氣早の大將であるから、まだるく思つたものか、八寸ばかりなる黒鹿毛の馬に金覆輪の鞍置いて、龍頭の兜を猪首にきなし、錦の直垂に、黄金札コガネザの鎧を着、江馬家重代の寶刀小鳥丸を佩び、又重代の一文字の薙刀を軽々と引提げ、件の馬に打ちまたがり八日町の橋上に突つ立ち上り」「和尚様、中々勇ましいですな」「おい、だまつてきいておれよ……うむと……信玄公より賜はりたる金の采配をふり立てく、大音聲にて「味方は多勢、敵は小勢なるぞ一足も引くな。者共、今日の戦に勝たずんばいつか又勝つことあらん、かゝれく」と呼んだので、何條たまらう、三木勢はしどろに崩れたつて我先きにと逃出したので、江馬勢は勝に乗じて「何

逃すものか」と陣を乱して追ひかけた。さて三木休庵に味方したる小島時光、牛丸親正は元來思慮深き武士であつたから、八日町近くに二十騎ばかり隠しおいたが、江馬の總軍勢諸方へ追ひかけ行きて今は旗本の手薄に乗じ、後ろの方よりまつしくらに本陣目がけて切りこんだのだ」「流星の輝盛も驚いたでせうな」「そうだ、輝盛も一度は、はつと思つたが、すかさず薙刀おつとり風車の様に打ちふりく戦つたので、今は親正、時光も危く見られたが輝盛の運のつきであつたか、時光方の打ち出す鐵砲に急所をうたれ、ひるむ所へ牛丸親正生年十七才、只一騎で切つてかゝつた。輝盛もはや運命はこれまでと思はれたか持つたる薙刀打ちすて、親正に向ひ「汝は何者なるぞ。大將の首さる法を心得るか」と云ひざま、首さしのべて遂に親正に討たれてしまつた。親正は早速一文字の薙刀を拾ひ取つて引きあげる様は如何にも勇ましかつた。家來の一人は寶刀小鳥丸を持つて高原へ逃げ歸つた。後輝盛の妻は之を兄である越中の梅尾兵衛祐邦に與へてしまつたので、江馬氏の族人川上小七郎忠尋は「江馬家重代の寶刀小鳥丸を、平家に何の縁もない祐邦に渡すとは殘念至極」とひそかに越中に至り、祐邦を殺害し小鳥丸を取りかへして歸つたのだ」「痛快だな、再び江馬氏の手歸つた名刀がどうして此の寺へ傳はつたんです」「それかそれは金森氏がやがて秀吉公の命によつて飛驒へ討ち入り遂に平定されたので、忠尋は小鳥丸を飛驒の大守金森可重公に奉ることになつた。可重公は、江馬家に傳はる平家重代の寶

刀小鳥丸を得たから、將軍家へ献上しやうと、時の老中に相談されると、老中の申されるには「刀は平家の重寶であり、將軍は源家である。献上してもお受納なさるまい」とあつたので、どうく當寺へ納められたのだと傳へられてゐるんだよ」「あ、面白かつた寺へ納まつてからは何か變つた事は起らなかつたんですか」「それはあまり傳つてゐないな。しかし明治維新の頃高山縣知事梅村速水氏が小鳥丸を所望されること甚だしかつたので、時の住持は斷るのに困つたと云ふことだ」「和尚様、そんなら平家の重寶がどうして江馬家に傳つたのです。平家と江馬家とはどんな關係があるのですか」「あ、それを話してないな。では少しおそくなつたが手短かに話してあげよう。その昔平家の一族が畏くも安徳天皇を奉じて一之谷にたてこもつてゐたが、源義經、範賴兄弟に攻めたてられ、城も陥り一族の者は我先きと兵船に打ち乗つて、屋島をさして落ちのびてしまつた。源氏の兵が、内裏のあとをくまなく探すと、一人の女がしくしく泣きくすれてゐたんだ。北條時政がつかく進み寄つて何者かと尋ねると、清盛の弟經盛の妻とて幼兒を懷に抱いてゐる。そこで時政が母子を引きとつて世話することになつた。その懷に抱いて居た幼兒は成長の後江馬小四郎輝經と名乗つてゐた。時政は頼朝公の執權であるから、小四郎も養父に隨ひ武州河越城の城主に封せられ威勢並ぶものなき有様であつたが、時政の歿後陸奥守義時が執權になるや、兼ねて小四郎と不和だつたので將軍實朝公の御意であると偽つて、

飛驒國へ流すことになつたのだ。それで輝經は平家の重寶小鳥丸の太刀、一文字薙刀等を携へて高原に來住することになつたわけだ」「和尚様よくわかりました。今夜はおかげ様で寶刀小鳥丸の由來を聞かせていただいたて、試験につかれた頭の洗濯が出来ました。有り難うございました」。

## 二 南 齋 和 尚

昔宗猷寺に南齋といふ、大層學問が深く徳も高く、その上字も上手な和尚さんがあつた。それで世の中の人々は、皆あがめ尊んで歸依してゐた。この和尚さんはふるい支那の字(篆書)を書くことが得意であつた。或日一人の男が來て「和尚さま、私は近いうちに西國三十三番の巡禮に出かけたいと思ひます。誠に厄介ですが、どうかこの笠に字を書いて下さいませんか」と言つて頼んだ。和尚さまは「よし」と言つて、書いてやられた。この巡禮は西國三十三番の巡禮を無事にすまして歸つて來て、色々と旅の話と和尚さんに話した。その時巡禮は「時に和尚さん、不思議なことがありました。私と道づれになつた老人の巡禮が私の笠を見て、これは上手に書いてある。坊さんの書いた字だらうと申しますので、さうだと申しますと、その坊さんは怨の深い人に違ひないと言ひました。おかしいことを云ひますので、そんなことはない、いたつて無怨で世の中のためになることなら、

自分の財産なんか投げ出して、もかまはないと云ふ立派な心の方で、それがために多くの歸依者もありますと申しますと、いやいや學徳はあつて歸依する人は多くても、慾のある坊さんにちがいないと申しました」とありのまゝに話した。和尚さんは膝をたゝいて「それに違ひない。恐ろしいものだ。字を書くときお前に餞別をやろうと思つたが、お金がなかつたから借りて来てやろうか、後にやろうか、止めやうか、などと考へながら、書いたのだつた」と言はれたさうである。

### 三 駿馬山櫻

今の本町筋（中向町）は金森時代には厩のあつた所だと云ふ。金森頼直公は澤山の愛馬の中で、駿馬山櫻を特に可愛がつておいでになつた。丈五尺、赤黒の毛色で、稀に見る逸物であつた。江戸櫻田の金森邸に養はれてゐた時、たま／＼江戸に大火があつたので、消火の爲頼直公は自ら山櫻に打ちまたがり、家來を引きつれて赴かれた。ところが火勢が強くだん／＼延焼して、頼直公を火が包んでしまつた時、幅何間もある江戸城の堀を、此の馬が難なく飛び越して主人を救つた。その時家來共が二人は鞍に、一人は尾にしつかりととりついて、主人とともに命を救はれたと云ふことである。後金森公は山櫻號を飛驒に返した。そして向町の厩につないでおいだが遂に死んだ。そこで其の死体は小絲坂に埋め塚を

作つて葬り、頭骨だけは厩あとに祭り、鎮火に靈驗があると云ふので崇拜された。

ところが明治五年二月本町火災の時類焼したので、明治六年十一月新殿を建築した。これが現在の山櫻神社で、町の人々は俗に馬頭様と云つてゐる。

### 四 串柿仙人

昔高山町川原町に作助といふ一人者が住んでゐた。貧乏な彼は何とかして樂な暮しの出来るやうにと、毎日／＼考へてゐた。けれども一向によい考へもつかばず、いらたゞしく日を送つてゐた。ところが或日のこと集會の席で四方山話の中に仙人の話が出た。それは桑の仙人や墓の仙人や其他色々の仙人が、不思議な術をつかふといふ事であつた。作助はこの話を聞いて自分もどうかして仙人になりたい。そうすればわけなくお金持ちになれるが一体どうすれば仙人になれるだろう「よしこれは物知りの和尚さんに聞くに限る」と、早速お寺に行つて和尚さんに會ひ其のわけを話すと、和尚さんは「私も委しいことは知らないが人の話しや書物で見ると、何でも火にかけないものを食べ山の奥に入つて深く深く考へて修業をすると仙人になれるといふことである。仙人になれば木の葉を綴つて着物にし木の實をたべて暮すことが出来る様になり、何の苦しみもなく長生が出来るさうである」と言はれた。作助は「これはほんとうによいことを聞いた。少しも早く仙人になるに限

る」とすぐ家に歸り家財を賣り拂ひ、食料を持つてお山へ入ることに決心した。火にかけないものを食べなければならぬので、色々考へた末串柿を澤山買ひこみ、之を背負つて松倉の山奥深く入つた。さて山の人となつた作助は其の日から串柿をたべて命をつなぎながら一心に修業してゐる中に食料もだん／＼残り少なくなり、やがて山をわけては木の實をさがして食べなければならなくなつた。しかしその木の實すらも彼の思ふほどはなく、作助は日増にやせ衰へていつた。毎日／＼岩の上に坐つて、何とかして空中飛行の術を覺えたいと考へつゞけて居た。或日一面に山へ霧がかゝつて海のやうになつた。

作助は「あの綿のやうな霧の上を歩いて見たいなあ」と思つた。長らくの修行で身も心も疲れきつた作助は、夢うつゝの間に霧の上を歩いた夢を見た。次の朝も同じ様に霧がかゝつた。岩の上に登つて之を眺めてゐた作助は「あゝ昨日はあの上を歩いたのだ。おれもいよく一人前の仙人になつたなあ」と岩の上から霧の上へ一步ふみ出そうとしたはづみに体の平均を失つてころ／＼と下の道までころがりおちて、氣絶してしまつた。おひる頃山へ木を伐りに來たお百姓が、松倉の山中を通ると、道端に一人のぼろ／＼の着物をき瘠せ衰へた男が顔や手足を血だらけにして、氣を失つて倒れてゐるのを見出した。お百姓はびつくりして早速村の人々を呼んで、親切に看病し身元をしらべると、それは川原町の作助だと云ふことが判つたので、川原町へ送りとゞけた。組の人たちは家も道具も賣つてしま

つた無一文の作助を、今更見殺しにする事も出來ず、相談の結果お金を出し合つて傷をなほしてやることになつた。それから町の人々は作助とは呼ばないで、串柿仙人／＼と呼ぶ様になつた。

### 五 時 の 鐘

血生臭い風がサット巷を掠めて、あけに染つた生々しい人の首が街にころがつてゐるのを見たこと云ふ噂が、毎日の様に話題に上つてゐた慶長十九年の師走も押しつまつた雪の朝まだきに、突如として高山城から響き渡つた鐘の音を聞いた町民たちの顔色はサツと變つた。「そら戦が始つたのぢや」と町民は驚きと戦慄とで極度に興奮したのであつたが、やがて中橋詰に立てられた高札によつて城主金森出雲守可重公が「時」の觀念を強調するため撞き出した。「時の鐘」であることがわかつて、漸く安堵の胸をなで下ろしたのであつた。可重公がかうして、「時を活かす」運動を始められたについては、涙ぐましい物語が二つもある。養父長近公の遺領を賜つた高山城主可重公は、江戸參覲を命せられ、芝櫻田金森の邸から登城に僅かの刻限を誤つたために、將軍秀忠にお目通りが出來ずその上不興を被つたのと、今一つは可重父子が大阪冬の陣に出陣の際刻限に遅れたため、遂に戦功を立てられなかつたといふ二つの苦しい体験から、歸城した可重公の面は暗かつたが、近侍

になだめられて「時」の宣傳を思ひ立ち、城下からは時刻を過るものを絶体に出さない様にこの御布令を廻し、自らも固く之を守つた。そうして千光寺にあつた靈鐘を所望して、之を撞くことにしたのであつたが、後町民の刺戟が薄らいだのを早くも見た可重公は、今度ばかりは照蓮寺へ寄進した大太鼓を取りよせ櫓の上で打ち鳴らした。かうして六代頼曾公ヨリトキまで此の運動はつゞけられたが、元祿五年金森氏が出羽へ移封され、高山城は加賀藩に預け城代を置くことになつたので、城下の人々が久しく聞きなれた時の太鼓も其の年限り再び聞えぬ様になつた。

元祿八年には加賀藩が幕命によつて高山城取り毀しをすることになつたので、千光寺では早速取り戻しを願つて今も同寺に保存されてゐる。

## 六 松田亮長スミナガ

### 逸話 (-)

松田亮長は高山町の生んだ彫刻家として、天下にその名を知られた人である。

高山の彫刻、殊に一位細工の彫刻は、多くこの人の流れをくんだものである。亮長はよい彫刻があると聞くとごんな遠い所へでも出かけて行つて、之を見て自分の勉強にすることをおぼろげに思つた。或日一人の若者が亮長の家へ遊びに来て「伯父さん困つたことがありま

す」 「何が困つたのじや」 「父が此頃田の水を見に行つてこい、見に行つてこいと言ひます。水が少しでもへると大叱られです。何かよい工夫はないでせうか」 「うん、ある。それはなあ魚屋へ行つてあらめを買つて来て、田の水口へ入れて置けばいつまでたつても水のはせる心配はない。さうしなさい」 若者は早速その通りにした。「やれ〜嬉しや、これで田の水を見に行く必要はない」と安心してゐると、あらめは田の水口で水を吸つてだん〜ふくれて口をせき止めて、水は田の中へ一しづくも入らない。田はから〜にはせてしまつた。若者は目から火の出る程父から叱られた。若者はへうきんな亮長にうまくだまされたのであつた。半年程たつてからのことである。或日若者が亮長の家へ来て「伯父さん、熱田から珍らしいものが出たそうじやなあ」 「何がよ」 「なんでも大昔の船が港の近くから掘出されたそうで、色々の彫物で飾られてゐて、その中でも船首の龍などはとてもよく出来てゐると云つて大層な評判です。なんでも彫物をする位の人は一度は是非見ておかねばならぬものださうですよ」 「さうか、それは見たいものだ。誰に聞いた」 「名古屋から来た商人から聞きました。その人は私の家に泊つてゐますから、詳しい事はその人からお聞きなさい」 亮長はほんどうに信じこんでしまつた。彫物には熱心な彼であるから、どうかして一度見たいと云ふ氣になつた。次の日早速旅支度を初め近所隣りへも留守を頼み、次の日は弟子達や知人に送られて、草鞋脚絆もかひ〜しく喜

の色を顔に現して出發した。彼の若者は見送人の去つた後も、一人残つて千島まで送つて行つた。別れの挨拶をしてから、亮長は一人色々な事を胸に書きながら五六町行くと、後から「おーい〜」と彼の若者が追かけてくる。「何んじやい」「それ〜わすれたかいな」「何も忘れん」「あらめのかたきを忘れたか」「やられたなあ」と云つて、亮長は家に歸つた。

逸話 (二)

松田亮長は性來非常な旅行好きであつたので、暇さへあれば旅に出てゐた。一年の中家にゐて一刀彫の道に精進するのは、近々四五ヶ月しかなかつた。その上天性器用な彼は、狂歌、狂句などをやり晝も少しはかくと云つた風であつたので、旅行は三度の御飯よりも好きであつた。何を彫つてもあざやかさを見せたが、中でも蛇と蛙は彼の最も得意とする所だつたと云ふ。それだけこの二動物に就ては平素意を傾け、頻りに實物について寫生しそれにより研究をつゞけてゐた。ある時一匹の蛇を得て例により寫刻を始め、幾日かの後漸く一匹の大蛇は出來上つた。見れば其の姿はあだかも生けるが如く、將に人を呑まんとするの風があるので、獨り會心の笑をもらしつゝ座右をはなたす愛玩含味し、且つは喜び且つは楽しみ人の來る毎に之を示して、云ひ知れぬ誇りと愉悅さを感じてゐた。たま〜例の性癖が出て平湯へ入湯に出かけることになつたが、此の傑作は勿論携へ行くことになつ

た。毎日〜湯に浸つて、非凡の出來榮に見とれ、獨り悦に入つてゐると、浴客の一人が見つけ、之を乙に話し、乙は丙に語り、狭い平湯中の評判になつたので、見物人がぞろぞろやつて來る様になつた。亮長はいよ〜得意になつてゐると、一日見物人のうちに混つて來てゐた一人の子供が、つく〜其の作を見てゐたが、やがて「おぢさん、此の蛇は死蛇だね」と云ひ出した。意外な暴言に自負心をふみにじられた亮長は、いたく憤慨したが、しかし相手が子供なので怒りを静めて「お前は之を死蛇と云ふが、一体何處が死蛇だ」子供は平氣なもので「おぢさん、生きた蛇にこんな鱗はないよ。死ねばみんな鱗が浮いて了ふ。この蛇をござん、みんな浮いてゐるぢやないかな。それで死蛇だと思ふんだ」と云ひ放つた。流石の亮長も二の口が出ない。その高い鼻はもろくも折れてしまつた。實際死蛇を手本に一生懸命寫刻したのであつた彼は、この一言にいたく感奮して直ちに歸宅し今度は生きた蛇を手本として専心寫刻の刀を揮ひ、日ならずして一匹の蛇を彫り上げた。なる程前のはちがつて眞に躍動してゐる。彼は一層満足し、直ちに之を携へて批判を乞ふため友人の家を訪れた。來客の聲に出て來た友人の妻は、亮長の手にした大蛇を一目見るなり、きやつと叫んで轉ぶ様に奥へにげこんでしまつたと云ふことである。

逸話 (三)

今しも高原郷本覺寺に來錫中の、出雲國康國禪寺の無一大觀法師が、附近托鉢の歸り道岩



井戸村の山道にさしかゝると、川向ふの草叢の中に怪し氣な金色の光明を認めた。

これは不思議な光を放つ、何物だと考へられた法師は、手頃の石を取つてはつしと抛つてみられたが、動きもしなければ音さへも立てぬ。はていよく不思議だと、對岸に涉つて草叢を分けて探すと、その金色の光明を放つたのは、赤地金襴の袋が日光に反射してゐたのであつた。「これは不思議な落しものだ。中味は何だらう」とひとりごとを云ひながら開いて見ると、紫絹で九重にも包んである一本の笛であつた。何れこれは高貴の品に相違ないと本覺寺へ持ちかへり、和尚に一部始終を語られると、和尚は「これはたしかに高山の亮長先生御秘藏の名笛であります。過日先生が當地へ參られた時、脊負ひより落されたものに相違なく、今に高山の御役所から觸狀が參りませう。それまで當寺にお預りいたしておきませう」と云ふと、法師も「それはよいものを拙僧が拾つてよかつた。亮長先生とかもさぞかし喜び下さることであらう」と、自分のことの様に喜んで居られた。

和尚は言葉をついで「何しろ此の笛には江戸金公老の銘があり、日本三笛の一本。價千金のもので、他人に持たせて送り届けることも出来ません。拙僧も近日中高山町へ私用で出かけたいと存じますから、貴僧も御同道下つて一しよに訪問しやうではございませんか」かくて、數日たつと觸狀が廻つて來た。和尚は早速書面で應答しておき、翌日法師と共に高山町に出で亮長先生を訪ねられた。亮長の喜びは非常なもので「再び手に入れ難い天下

の名笛を失ひまして、御役所にも願ひして搜索いたしてゐた所です。貴僧のおかげによつて再び此の名笛を手に入れました、亮長天にもほる喜びでございます。此の御禮に當地名産の一位木の柱杖に降龍を彫刻して差上げませう」と約束した。

亮長は位山に登山して、格好の一位木を求めたが思はしいものがない。再び登山して探したが見あたらない。止むなく三たび登山したところ、不圖好箇の木を見つけたので、歡喜踊躍して持ち歸り直ちに彫刻三昧に入つた。躍動せる降龍の柱杖が出来上つたのは、それから十日あまり後であつた。亮長はすぐ本覺寺滞在中の無一法師に、謝恩の紀念として獻じた。法師は其の後一ヶ月あまり滞在して、此の柱杖を無二の土産として、康國禪寺へ歸ることになつた。あくる年京都東山東福寺では開山聖一國師の五百五十回忌の大遠忌が執行されたので、かの降龍の柱杖を携へて上京した。本覺寺の和尚も上京してゐて共に參詣した。參詣中柱杖の置所がないので、東福寺の祖前に置いて居た所、江戸小日向龍興寺雄禪大和尚が之を認め「これは珍らしい生木の柱杖かな」と、法師には無斷で持ち出し、京都三條の大通りを通りかゝると、朝から青空の珍らしい快晴だつたが俄かに曇り出し、冬であるのに不思議にも雷鳴さへ加はり大降雨となつてしまつた。そして降るは三日三晩降りつづいて、鴨川はおそろしく増水し大騒ぎになつた。雄禪大和尚から仔細をきいた法師はいよ／＼奇異なことに思ひ、早速歸國し長く寺寶としてゐた。それから早魃の年

には此の柱杖を持ち出し雨乞ひをすると、必ず三日三晩降雨があり、ために亮長の名は天下にひゞく様になつた。

七 小糸坂

春の夕方

道端には莖や蒲公英が綺麗に咲き亂れ、蝶はひらくと花から花へ飛んでゐる。ぼか／＼とする暖い春日を受けて、丘の草原では優しい一人の娘が若菜を摘んでゐた。年の頃十二三才であろう。手拭を頭にかぶり、優しい聲でたのしそくに歌をうたひながら、餘念もなく摘んでゐる。日も漸く西に傾きかけた時、ふと通りかゝつた一人の武士が「あーその娘さん、澤山摘めましたのう。お前の年はいくつかい」と尋ねた。娘は「十二です」「名は」「小糸と言ひます」「小糸さん、澤山つめましたなあ。私にその菜を賣つては下さらないか」「はい、それでは半分だけお分け致しませう。お持ち下さい」「私の家は此處から二三町向ふだから、私と一所に持つて来てくれないか」「はいかしこまりました」と武士の云ふ通り娘はすなほについて行つた。そうして山蔭にさしかゝると、先程の武士は可愛そうにも不意に娘を取つておさへ、猿轡をはめ、娘をかついで何れかへ姿をかくしてしまつた。

築城の日

上役の侍「やあ、よい子が見つかつたなあ見せろ」士「ひゞい目にあつて探しました。三日もかゝりました。丁度この下の村で草摘をしてゐる優しそなよい子がゐたので、見つけて今連れて來た所です。どうかごらん下さい」上役の士「これはよい。望み通りだ。いよ／＼明日は天守の地固めが出来るわい」その夜は暮れた。小糸は一夜中泣いて泣いて泣き明した。けれども可弱い娘の身でどうして逃げ出せよう。東の空がほの／＼と明ける頃小糸は牢の中から引き出されて、白絹の着物に目かくしの姿で駕籠に乗せられ、大勢の武士に護られかねて用意した穴へと送られた。そうして松倉城の守り神として、天守臺の地中深く埋められてしまつた。

狂人

「小糸よう／＼、やあ／＼來た／＼、小糸來た／＼、おうい、どこへ行くのじや、待つておくれ」髪をふり亂し夢でも追ふ様に、村の道をさまよひ歩く女がある。身なりこそざり亂してをれ、顔は小糸そつくりの上品さを持つてゐる。云ふまでもなく小糸の母である。さまよひまわる小糸の母を見ては、誰一人涙を流さぬ者はなかつた。

かうした間にもお城の天守の工事は着々と進んで、やがて大空高く天守を仰ぐ日が來た。此の頃小糸の母も大分氣が落ちついて、畑に出て働いてゐた。その時村人はこんな話をし

つゝ通りかゝつた。甲「此頃はあの氣違ひにも、大分落ちつきが出来てきたやうに見える」乙「さうさ、何といつても氣の毒な事だつたなあ」などと話しながらやつて来て、小糸の母に出會ふと、甲「やあ今日は。あなたは先頃から病氣だつたそうでお氣の毒さま。大分よくなつたやうで結構です」母「はい有難う御座います。お蔭で大分よくなりました。併しまだ小糸は何處へ行つたか分りませんので、そればかり心配で、夜もろくに眠りもせず困つてをります」乙「あなたはまだ知らんのですか。小糸さんがあのお天守の人柱になつたのを」母「何、人柱に」小糸の母は道端にばつたりと倒れ、聲をふるはせて泣き悲しんだ。甲「お前いらんことを云ふから又氣違ひになるぞ」乙「云はねばよかつたなあ」村人は後悔の念を抱きつゝ、逃げる様にして去つた。泣き伏してゐた母はしばらくすると急にはね起きた。見れば目をつり上げて凄い顔になつてゐる。村人の思つた通り又狂ひ出したのであつた。

「小糸よう／＼、小糸を返せ。泥棒／＼おれの娘を盗んだやつは泥棒じや。殿様は泥棒じや／＼。小糸を返せ」狂ひに狂つた小糸の母は、松倉のお城をさして走り出した。そうしてお城の門に走り寄つてわめき立てた。哀れ、次の日から小糸の母の姿は、もう見る事が出来なかつた。村人は小糸の薄命と、その母の末路をあはれんで、小糸の家の向ふの坂を小糸坂と呼ぶやうになつた。

## 八 加藤 光 正

加藤清正公がなくなつてから、忠廣と云ふお方があとを相續されたが、其の子光正公は大變元氣のいゝお方であつた。徳川家光公の御前で元服し、家光公の光の字を頂いて光正と名乗り、豊後守に任せられた。光正公は江戸に住はれ、お父さんの忠廣公は肥後熊本にお出でになつた。江戸表で光正公につかへてゐる武士の中に、廣瀬庄兵衛と云つて近習役、生れつき卑怯で臆病な男があつた。元氣にみち／＼た光正公は、庄兵衛の臆病がおかしくて／＼たまらない。何時か折があつたらおどろかして見たいものだと思つてゐた。ある日のこと光正公は、近習の武士や其の他のものをあつめて「近頃は天下泰平にて無事平穩、光正の腕が鳴つてかなはぬ。あまりつれ／＼なれば今夕庄兵衛を召し出し、彼の狼狽する様を見るも又一興かと思ふ。さればその手筈はしか／＼……」と云はれると、皆「それは必ず面白いこととございませう」と賛成したので、皆に武器馬具を取り出させ各自支度に及んだ。やがて光正公からの急使を受けた庄兵衛は、何事についての急のお召しであるうかとお邸へやつて参ると、玄關にまちかまへた士の一人が「庄兵衛殿、光正公には貴殿の出仕を待ちかねでござるぞ。早く書院へお通りなさい」と申したので、これはたゞ事ではないとびく／＼しつゝ書院まで参れば、是は如何に、あまたの燭臺には火が点せられて、

書院は晝の様に明るく、主君光正公は甲冑に身をかため采配を持ち、上座の床几に泰然と  
かゝつておいでになり、近習小姓などの面々數十人も、皆甲冑のいでたちで光正公の左右  
に居並び、其の威勢の堂々たる様は益々庄兵衛の度膽を抜いてしまった。庭を見れば馬に  
鞍おき旗さしものが立列ねてあり、弓矢鐵砲長刀などすつかり合戦の準備が致してあるの  
で、もう腰を抜かさん許りである。光正公はおかしさをこらへて「庄兵衛かよく参つた。  
ちどそちにも頼みたきことあれば近う参れ」と申されると、いよ／＼あはて出し、もうぶ  
る／＼ふるひ出してしまった。光正公は聲高に「今宵急に思ひ立ち敵を攻めんとす。つい  
ては一方の大將は汝に、一方の大將には鈴木平十郎をたのむ。いそぎ出陣の用意を致して  
くれよ」と申されると、一方の大將と聞いて顔色は青ざめ手足はふる／＼ふるひ、返事一  
つようせず目ばかりばち／＼させて居る。光正公はかさねて「敵城は程近し、不意を討つ  
てこそ勝利は得られるぞ。早々用意に及べ」と申されたので、庄兵衛も漸くに覺悟を定め  
「庄兵衛一方の大將を命せられまして冥加至極に存じます。一應立歸りまして出陣の用意  
を致します程に、暫時の御猶豫を願ひます」と、我家をさして一散にかけ出した。  
庄兵衛の出かけたあとで一同の者はどつと大笑ひをなし、庄兵衛のあはてざまをまねたり  
して興に入り、やがて光正公の命で酒肴が運ばれて酒宴がはじまつた。けれどもいくら待  
つても庄兵衛は來ないので、一同は益々喜び「今頃は妻女と水盃して別れを惜しんで居る

ことであらう」と大さはぎを致して居た。

其の時門前にあたつて人馬の物音が聞え出したので、何事であらうかと思ふ間もなく、將  
軍家光公の使者が玄關から案内もなく書院へ通り、あたりの様子を逐一見とゞけになつた  
ので、光正公はじめ一同は大變びつくりして、甲冑をつけたまゝ平伏してしまつた。使者  
は「將軍家よりお尋ねの旨あり急ぎ登城を致される様に」と云ひすて、歸つてしまつた。  
これは庄兵衛が驚きのあまり光正公の邸を飛び出すと、直ちに御老中土井様の門をたゞい  
て光正公謀叛のことを訴へ出たので、家光公の耳にも入り只今のお召しとなつたのである  
光正公も止むを得ず供人を用意して登城されると、直ぐ帶刀を取り上げられ、老中の前に  
呼び出されて事の仔細を調べられた。  
つゞいて家光公からもお小言があり、直ちに光正公はさる大名にお預けの身となつた。江  
戸表から急の知らせを受けて忠廣公も出府され、色々お詫びになつたけれども御許しなく、  
忠廣公は所領七十三万石を召し上げられ、出羽の庄内へ光正公は高山の金森家へお預けの  
身となつた。光正公は高山へ來て東山の天性寺に住んでおられたが、二年目に二十歳で  
おかくれになつた。光正公のお墓は法華寺のうしろの山にある。

九 高山御坊

善俊上人

高山別院は照蓮寺と云ふ寺號である。一に御坊とも云つてゐる。

開基は嘉念坊善俊である。善俊は後鳥羽天皇の第十二皇子で、承久三年に御年八才で三井寺に入り、坊さんとなつて名を道伊と申して居た。後箱根山で親鸞上人にあひ、其の弟子となつて名を嘉念坊善俊と改めなされたのである。常に上人と共に法を弘めておいでになつたが弘長二年上人が入寂されると善俊は赤子が母を失つた様に悲しみ、都を去つて美濃國に來り郡上郡の白鳥村と云ふ所にしばらく杖を止めて、上人の遺教をひろめておいでになつた。ところが或る日漸く雨風をしのぐだけの善俊の草庵の椽へ、見たこともない賤しい見なりの男が、そつとしのびよつて壁のすき間から中を覗いたので、善俊が外に立ち出で、「お前はどこのものか。見たこともない異なるいでたちをなすが」とお聞きになると「私はこゝからもつとく北の方にある飛驒の白川と申す處のもので御座いますが、今日このあたりを通りますと、人が申しますのに此の草庵に大變尊いお方がおいでになると申しますので、尊いお方と云ふものはどんなものだらうかついのぞき見を致したのです。何卒お赦し下さい」と申すので、大變可愛そうに思はれた善俊は、更に「お前は佛の尊い教

を知つてゐるか」とお聞きなされた。その男は「そんな尊いものは見たことも、聞いたこともありません」と答へたので、いよく可愛そうなことだ。生れがたい人間に生まれ出で今成佛しなかつたら又何時成佛するときにあらうか。そうした民草を濟度するのがみ佛の大御心であり、上人の御心であると白鳥村の人々のとめるのも聞かず、白川村の鳩谷へ出かけて行つて、一字の草庵を立て、土民に布教をなさつた處、風に草木のなびく様に土民がよく歸依したので、此の地に永くお住ひになり、弘安五年に六十九才で遷化なされた。

中野の御坊

今からもう七百年も前のこと、嘉念坊善俊と云ふそれはくえらいお坊さんが白川の鳩谷村へおいでになつた。そして善男善女を濟度する爲に寺を建て、鳩谷道場と云つた。こゝに住んでゐて佛教を弘めておいでになつたが、とうとうこゝで成佛なされた。此の方が高山御坊の開山である。後にお寺を飯島村に移し飯島道場と云つてゐた。善俊と云ふお方から九代目の明教と云ふお坊さんのとき、白川の牧戸城のお殿様内ヶ島將監と云ふお方と争が起つてとうとう道場は焼き拂はれてしまつた。

其の後内ヶ島將監と仲直りが出來たので、お寺を建てやうと云ふ相談が始まつたが、困つたことには鳩谷村では「始め鳩谷村にあつたのが中頃飯島村に建てられてゐたのであるか

ら、今度建立するならば鳩ヶ谷村にしなければならぬ」と云ひ、飯島村では「飯島村に建てるのが當然だ」と云つて、互に地争ひをはじめたので、寺は何時建つものとも見えなかつた。ところが或る男が兩村の仲裁に入つて、「かうして敷地のことから兩方の村が争ひ合つて居ては、お寺を建てやうとした精神に反すると云ふものだ。どうです私におまかせ下さることは出来ませんか」と云ひ出した。「まかせろと云つたつて、一たい貴殿はどうなさろうと云ふのです」「それです。私もまかせてほしいと云ふからには考あつての事。此の村にゐるたつた一頭の赤牛に、照蓮寺建立の大材を負せて走らせて見て、其の牛のどまつた所に建立する様にしたいと思ふのですが如何です。おまかせ下さいませんか」「いやそれなら面白い。おまかせしやう」「こちらとしてもそれには異存はない」と相談がまとまつた。そこで、約束の様に牛に大材を負せて走らせた所が、走り走つて今の莊川村中野まで来て牛はどう／＼死んでしまつた。兩村とも前の約束で仲よく中野の地にお寺を建てることになつた。其のお寺は牛につけて走らせた大杉材一本で建てたものであると傳へられ、其の大牛の角だと云ふものが中野御坊に残つてゐる。

明<sup>ミヤウ</sup>了<sup>リョウ</sup>

天正年間、金森長近公が飛驒征伐のため越前から飛驒へ討ち入られたとき、向ふから旅僧の來るのに出合ひ、兵士共は大變縁起が悪いと云ふので怒り出し「折角の討入に法師に出

合ふとは忌はしいことだ。切りすて様」と大騒ぎをはじめると、旅僧は笑つて「何だ、お前らは法師の己れに合つて縁起が悪いと云ふが、お前たちの主君も法体ではないか。何故拙僧の法体のみをせめるか」と云つたのを、馬上で聞かれた長近公は家來共を制しつゝ、旅僧に向つて「士卒共の云ふことも尤もであるが、汝の云ふことも面白い。何か拙者の討入りを祝ふ歌の一首もつくつて出せば許して通そう」と云はれた。すると長近公の姿をつく／＼見てゐた旅僧は、矢立と懷紙を取り出しすらく／＼と一首書いて差出したので、長近公が受取つて御覽になると、

大將の召した袴は白革(白川)やさても見事にとりしひだ(飛驒)哉

とあつたので「見事／＼」と大層御満足で、長近公はお金を與へて旅僧をお通しになり、士卒も大いに勇み立ち進軍をつゞけた。このお坊さんは善俊から十三代目の明了と云ふ方だつたのである。長近公が三木氏を亡し天神山に築城してから、高山町繁榮の一策として明了をに招いたので高山町に移り、今の地域を金森公よりいたゞき、高山城に正面を向けて建立したと云はれてゐる。

一〇 御坊 住

今より七八十年前高山御坊に住某といふ寺役人があつた。町の人達は其の名前を呼ばず

「ごばすみ」「ごばすみ」といつてゐた。体格が非常に逞しい上に、腕力が人にすぐれて、劍術柔術相撲の手まで心得て居た。一日ある信徒が御佛供米であると云つて、米一俵を背負つて来て、受納方を頼んだ。そこで御坊住は跪いて之を兩手に受け、謝辞を述べながら五六回これを載いたと云ふことである。或年のことであつた。大相撲が来て素人の飛び入りを許した。そのとき御坊住も腕がうなつて仕方がない。自分から好いた相手を選び、大關戸田川と取組むことになつた。二回までしきり直し、三回目立ち上るや否や、すばやく敵を突放つて勝を占めた。戸田川は口をしくて口をしくて仕方がなく、刀を抜いて荒れ狂ひ、人々は一度に騒ぎ立つた。御坊住はいつの間にか姿をかくして唯御坊住最良の見物人が罵りさわぐのみであつた。戸田川はどうする事も出来ず、無念の涙をのんで宿に歸り、其の夜ひそかに逃げ去つたと云ふことである。又或年郡上藩より梅村騒動鎮定のため軍兵がたくさん高山へ来たことがあつた。そのとき高山御坊に宿をとつた。郡上藩の軍兵は大砲を持つて来たが、その大砲を別院の門前においた。御坊住は立寄つてその大砲を眺めてゐたが「どれ、ひとつ持つて見よう。どの位の目方があるか」とぐつと提げて見せたので、郡上の藩兵は之を見て大いに驚嘆したと云ふことである。

### 一一 松倉の落城

#### 鍵之助の功名

天正十三年閏八月松倉勢と金森勢との合戦たけなはなる頃、松倉の方から金森可重公の陣地を目ざして、身の丈七尺以上もあらうかと思はれる大兵肥満の武士が、黒革おごしの鎧を着、五枚甲の緒をしめ五尺にもあまる太刀を佩び、月毛の馬に銀覆輪の鞍をおいて打ちまたがり現れ出でたる武者振は、昔の坂上田村麿公もこんな風であらうかと、敵も味方もなりを静めてうらながめてゐた。その武士は可重公の陣地を見渡しながら大音聲に、「吾れこそは建武中興の頃ほひ、左中將新田義貞公の家臣に其の人ありと知られし畑六郎左工門時能の子孫、畑六郎左工門休高ヨシタカなり。生れしより今日に到るまで手ごわい敵に一人も出合ひ申さぬ。されば今日までさのみ手柄も立て申さぬ。今度三木右兵衛少納言秀綱公に、一騎當千と頼まれ味方となりし者。高堂の城は已に陥つたとは申せ、松倉城に吾等の居る限り左様に易々と落城は致さぬ、金森公は千軍萬馬の武將其の陣中には定めし力自慢の方もござろう、吾れと思はん者は出で、勝負に及ばれよ」と呼ばはつた。けれども可重公の陣地から彼の武士に戦をいごみかゝるものは一人もなかつた。可重公も自分の家來が澤山居りながら、誰一人として畑に打ちかゝる者のないのは家門の恥だどばかりに大音聲「やよ、我が陣中には男はおらぬか。彼とて鬼神にはあらず、吾と思はんものは臆せず攻めかゝれ。彼の首を打ちとつたものには高祿心のまゝに取らすであらう。」と呼ばはつた。

其の聲の終るか終らぬに可重公の陣中から向星の甲を猪首にきなし、紫糸おごしの鎧に黄金作りの太刀を佩き、黒鹿毛の太く逞ましい馬にいつかけ地の鞍おいて打ち乗つた一人の武士が現れ、「吾れこそは金森可重公の家臣山藏縫殿助サンゾウヌスケと申す者、お相手に不足なる小兵なれども人もなげなる貴殿の申條聞くに堪へかね罷り出でたり。いざ勝負せん」と馬の手綱を引きしめつゝ進み出でた。敵もさるものおごろく色もなく「お相手下さるとは辱なし、いざ休高の太刀を受けられよ」と、馬をかへし山藏に打ち向つた。二人は太刀を抜き無二無三に切り結んだが、腕前が互角と見えて少しも勝負がつかない。はては二人とも太刀を打ちすて、馬上のまゝくみついてもみ合ひを初めたが、やがてしかと組んだまゝ馬からごつと落ちた。敵も味方も勝負や如何とかたづをのんで打ちまもつてゐると、やがて山藏は休高を組み伏せたかと思ふと、すばやく首打ちおとし、休高の太刀に首をつきさし「山藏縫殿助、畑六郎左工門の首を打ち取つたり」と大聲によばはり、月毛の馬に乗りかへて可重公の本陣へ引き上げ様とすると、松倉方は「それ逃すな、休高殿の仇を打て」とばかり一度に攻めかゝつた。

金森勢も「山藏を打たすな」と、又一しきり合戦がつゞいた。其の中に日も暮ればて兩軍はそれ／＼陣所に引きあげた。やがて山藏縫殿助は可重公の前に呼ばれ、「其の方今日の武者振りは、あつばれ功名は拔群である。當座の褒美としてこれをさらすであらう」と、

可重公着用の陣羽織を賜り、大變面目をほごこした。松倉方では休高の討死をはじめ兵士は澤山戦死をし、段々負色があらはれて來た。こゝに松倉方の武士に藤瀬新藏と云ふものがあつて、代々三木氏に仕へ秀綱公の近習をつとめて居た。昨日からの合戦に三木方に勝利の見込みなしと考へた新藏は、可重公に返り忠をする決心をなし、こつそり手紙を認めてこれを矢に結びつけ、可重公の陣地めがけて射こんだ。可重公は家來からの差出した其の手紙をさらんになると「今夜丑の刻城のうしろの方に火を放つからそれを合圖に攻められたい」と書いてあつたので、長近公ともよく打合せ、いつでも出陣出来る様に用意して待つてゐた。夜は星のかげさへまばらに靜に更けて行つた。果して丑の刻ころ城の一方から火事が起つて、物すごい炎はえん／＼と天をこがした。三木勢は不意の出火なのであはてふためいて消火につとめて居る處へ、時分はよしと金森勢がときの聲を上げて攻めかゝつて來たので、一たまりもなく落城してしまつた。秀綱公も今はこれまでとあきらめ、城の後ろの谷間の深い笹を分けて、奥方と一緒に鍋山さして落ち行かれる。岩角に足をさられて奥方はばつたり倒れられたのを、秀綱公は自ら助け起し燃えさかる城を仰ぎ見られた二方の眼は涙に光つた。

光 石

堅城松倉と誇つたのも七年足らず、三木氏の強盛も誠に儂い一朝の夢であつた。



城主秀綱公は父祖以來蓄へられた軍用金を身につけ、落ちて行かれた鍋山城も已に敵手に。今は早や國內に身を置く處とは無くなつた。昨日に變る今日の身の上、峯を渡る風の音にさへ膽を消しつゝ、安房峠を越えて信州に落ちられた。住みなれた故郷を後にし、妻子の安否をも見届けず、變れば變る百姓姿、秀綱公の姿は哀れと云ふもなかくである。初秋の空は快く晴れ渡り、くつきりと聳えた山々のたゞすまい、千仞の谷、里に見受けぬ林の有様、誠によい眺めであるが、公の眼は涙に曇りて此の景さへ見え分かず。道中差を一本腰に打ち込んで、笠を首にかけ草鞋脚絆に身を固め、再舉を胸に描きつゝ、足を早めて信州大根川の在所までたどり着かれた公は、大分腹もすいたので晝食の支度をと、とある茶店へ「あゝ許せよ」と腰を下し「婆さん、お晝の支度を致したい」「はい、豆腐のにしめと川魚のたいただけですが、どうぞお上り下さい」「あゝそれで結構、早速膳部の用意を」やがて食事を終へた公は、「之はいかい厄介をかけた。些少だがお茶代に」と老婆の今迄受けた事のない程の、茶代をおいて出で去つた。この茶店の奥座敷に先程から酒を呑みながら、店の客に目をつけてゐた此のあたりで「鬼」と言はれる悪漢の權八と六藏の兩人 權「おい六、今の奴は只者ではないぞ」 六「うんあの顔立ちから、言葉遣ひ落人に違ひないわ」 權「金もたんまり持つてゐる様だ、こりや何とか」 六「死そこなひの落人だ。落人取締の命も出てゐるのだ。かまふものか一つやつつけやう」 權「手前

先へ廻れ。仲間の奴等にあやしい奴が通るからつて言つてよ。ぬかるな。おれは橋の手前の松の木のかげにかくれて、弓で後からやつつけやう」 權「合点だ。手前の弓なら大丈夫だ」二人は茶店の裏から、こつそり走り去つた。腹は満ち足つたものゝ心の淋しく、うつむき勝ちに村を通り越して村端れの橋近くにさしかゝつた公は、草鞋の紐の解けたのを物うげに結んで、ひよいと伸び上がられる拍子に、「びゅーつ、ぶすりつ」「卑怯者奴」運の盡くる所かその矢は公の後より横腹深く喰ひ入つたのである。「おーい」と、六藏の合圖に橋の向より兼ねてしめし合せた仲間の者ども十余人ばかり、手に手に猪槍、竹槍山刀等を持つて秀綱公にせまつた。 權「おい飛驒の山賊。金だけ出してあやまれ。命だけは助けてやらう」多數を頼んで權八は深手の公を見てのゝしつた。怒に燃えた秀綱公は、痛手を堪へて一刀抜き放ち、真先に進んだ權八を物の見事に忽ち切り捨て、續く二人もなきたふされた。然し深手を負ひ最早や之迄と覺悟された公の頭に「松倉で討死する處であつた」と、後悔の念が電の様にはらめいた。敵のひるんでゐるすきに懷の包を取り出し、「飛驒國主三木秀綱武運盡きて討たるゝとも、我が一念を以て汝等が如き悪黨ばらに此の金子は、斷じて渡さじ」と、言ふや否や、川中めがけてはつしと投げ込んだ。金銀が雨の如くにばら／＼と流れの中に飛び散つた。此の時後よりつめよつた者共の爲めに、公は無慘にも切りつけられ、無念の齒がみをなして最期をとげられた。

慾に目のない者共は、皆一齊に川に飛び込み、夢中になつて光りを目當につかみ上げた。「何だ之は石ころか」「何だ、之は石ころか」「何だ、之も石ころだ」「又しても石ころだ」「おーい、あつたかい」「駄目だ、皆石ころだ」六「皆上れ。かいしよなし奴波をしづめて見なけりや分らんわ」一同橋の上に来て覗いて見ると、さらく無数の金銀が流れの底に輝いてゐる。

六「おい、奴等川へ入つたら承知しねいぞ。おれ一人で拾うんだ」「貴様ばかりでせしめるとは、ひどい」六「馬鹿こけ。今日の仕事はおれ様のお蔭で出来たんだ。分け前に預りたければ頭を下けて来やがれ」にらみすえて六藏は一人川へおりて拾つて見たが、拾ふのも拾ふのも、みんな石ころだつた。今度は竹竿を持つて来た一人が、上からある所を示し、一人が下で拾ふことにした。今度はたしかにと拾ひ上げたが、之も亦立派な石ころ。皆の者は夕方迄こんな事をして骨折つたが、びた一文さへ手に入らなかつた。

濡れ鼠になり、へとく疲れた一同は、ぶつ／＼小言を言ひながら歸つて行つた。それでも抜け目のない六藏は、皆の目をぬすんで川端に落ちてゐた、金襴の金袋だけは拾つて歸つた。冷たくなつてもくわつと眼を開き、無念の形相すさまじき秀綱公の死骸は、哀れにも路傍にうち捨てられ、秋の清い月の光とこほろぎの音だけが、悲しい武將の末路を弔ふばかりであつた。六藏は「之だけでも、それだけかになるわい」と、家の箱の中へ金襴

の袋をしまひ込んでおいた。数日の後六藏のたゞ一人の子六太郎が、之を見つけて棒ぎれにつけて旗とし、餓鬼大將になつて戦争遊びをしてゐた。村はづれの橋にさしかゝつた時此の餓鬼大將の六太郎は橋詰の石垣から真逆様に落ち、岩に頭を打ちつけて死んだ。手に持つてゐた旗が、氣味悪く血で彩られてゐた。急を聞いて駆けつけた悪黨の六藏も、たつた一人子の六太郎の哀れな姿を見ては、顔の色青ざめてはつたり氣絶してしまつた。それから全く狂人となつてしまつた。そうして、時々六太郎を抱きかゝる風をし「秀綱が来た／＼、三木々々」と口ばしるのであつた。村人達も六藏一家にふりかゝる此の崇りの恐ろしさに慄へて、今までとち捨て、あつた秀綱公の死骸を山麓に埋めた。

次の年、村には疫病が流行して次から次と多くの人が死んだ。病者は何れもうは言に「この怨思ひ知れ」「報を受けろ」など、叫んで死んだとうはさし、その死人の目は皆くわつと開いてゐた。眞夏に雹が降つて作物は殆んど駄目になつてしまつた。こんな事のある度に狂へる六藏は手を打つて喜んだ。秀綱の崇りにおびへてしまつた村人達は、庄屋の家に集つて相談した結果、秀綱を神に祀りその靈を慰める事となつた。橋向ふの山麓秀綱公を葬つた地に小祠を造り、秀綱大明神と記した旗が何百本となく立て列らねられた。

村人は七日の間祭禮を行つたが、七日目の晩には大暴風雨で、地もさけんばかりに雷が鳴り渡つた。その六藏の家は雷が落ちて、狂へる六藏は妻もろとも、雷にうたれて死んだの

であつた。此の大雷雨以來橋下の流れの底の光りは著しく減つたといふ。併し全く絶えたのではなく、常に點々と二三の金光が認められ、今でも村人は之を「光石」と言つて、時々見受けるそうである。秀綱大明神の祭は年々續けられ、其の後凶事は絶えて、村人はこの祠を村の守護神として仕へる様になつた。

## 一二 飯山の觀音

義家、義朝、爲朝などの勇者を出した源氏も、保元平治兩度の戦ひにもろくも敗れ、今は見るかげもない有様となつた。朝に榮へ夕には衰へる武士の常とは云ひながら、一時は源氏の一族として勢を振つた三郎兵衛保重も、平家が源氏の殘黨を詮議する事の嚴しくなつたにつれ、散り落つる木の葉の音にも、風にそよぐすゝきにも心おかねばならぬ身となつて、草深き飛驒の國へ流浪して來た。そして石浦の飯山の奥に極めてさゝやかな庵を作つて、もと爲朝爲義等の生存中の事など思ひかへしつゝ、憂ひにみちた月日を送つてゐた。ところが一夜三郎兵衛は不思議な夢を見た。「三郎兵衛、三郎兵衛」と呼ぶ聲に夢を破られた三郎兵衛は、眼をあけてあたりを見廻すと、枕邊には赫々たる光明を放つて見るからに尊い觀音様が立つておいでなされるではないか。一目觀音様のお姿を拜するや、三郎兵衛は形を正して伏し拜むと、觀音様は靜かに口をお開きになつて「此の庵の西の山中に古松

の森々とした林がある。其の林の中に取りわけ年を経た老松が三株あるが、其の中に根幹龍の蟠つてゐる様に四方へ伸びひろがつてゐるのがあり、其の鼎の三足の下には赫々たる光明を放てる救世觀音尊像がおはす。それが即ちこの私である。私は西方の教主阿彌陀如來の命を受けて、普く天下の衆生を濟度せんと考へて居るが、たゞ頼みとするは汝一人あるのみである。希くは吾が軀を得て安置せよ、彌陀の尊容を本尊として朝夕佛名を修念せば現世を安樂ならしめ子孫は必ず繁昌するならん」と、云ひ終るかと思ふと、其の姿はかき消す様に見えなくなつた。ハツと氣がつけば今のは夢であつたか、是は不思議な夢の告であつたよと、夜の明けるのを待つて西の方の山へ分け上り森林を探したところが、果して夢のつげと附合する三株の松があつて、其の根の下には歴然たる救世觀音の靈像があつた。保重は夢かと喜び、其の尊体を收め歸り、やがて森林の中に一字の堂をつくり、其の靈像を安置し靈松院と名づけた。それから家紋を改めて三株の老松を用ひる様になつた。そして住所を飯山に定めてゐたが、尊像の夢の告通り追々と運が開け、やがて附近一帯の土地をも領する様になつた。かうして家は次第に榮え富んで來たが、後三郎兵衛保重の子孫保貞の時代になつて、三木休庵が松倉城に據り威勢が漸次強大になるにつれ、遂に飯山の所領をも併せんと、急に軍勢をつかはして之を攻めた。不意のことではあり、遂に靈松院始め其の屋敷共に焼き拂はれてしまつた。そして保貞は力戦又力戦、三木勢を防いたが

衆寡敵せず遂に戦敗れて自殺してしまつた。戦國時代のならひとは云ひながら、あまりにも悲しい物語りである。

一三 彫刻師面平

逸話 (一)

今村面平は船津の人で、高山へ来て今の本町邊に住み、彫刻を仕事にしてゐた人である。面平と云ふ名は父母からもらつた名ではなかつた。大變に彫刻が上手であつたが、殊に面を刻むことが巧みだつたので、誰云ふともなく面平と云ふあだ名がつけられたのであつたところが別に怒りもせず人のつけたあだ名を、自分の本名の様に何時も「面平、面平」と自分から云つてゐたので、本名は知る人もなく、今村面平と云へばあゝあの彫刻師かといふ様になつた。面平さんは極めて無慾な人で、いろ／＼奇行のあつた人だどつたへられてゐる。或時ふと「人は魚を喜んで釣るが、おれは人を釣つて見よう」と考へた。

「これはなか／＼奇抜な思ひつきだぞ。あゝ面白い／＼」と早速釣の用意をして松本まで出かけて行つた。そして松本橋の上からよく人の目につく場所に位置を占めて人を釣り始めた。釣針をなげこんだと思ふと、大きなごみを釣り上げた。此の時丁度一人のお百姓さんが橋の上を通りかけて、面平さんのごみを釣り上げて、腰の籠の中へあはて、おしこむ

のを見つけた。そして「おや／＼あの男は面白いぞ。ごみを釣つて籠に入れたぞ」と見られてゐると、又ごみを釣り上げて籠に入れてしまつた。「いよ／＼あの男はどうかしてゐるな」と見とれてゐると、又通りかゝつたお百姓さんが「十兵衛さん何を見てゐますか」と云ふ鹽梅で立ちどまる。二人のお百姓さんが見とれてゐるのに引かれて、通りかゝつた旅人も足を止めると云ふ始末で、やがて橋の上は大へんな人だかりになつた。面平さんは相變らずごみを一生懸命釣つてゐる。橋の上の人々は色々と噂して、或者は「氣ちがひだ」と云ひ、或る者は「狐に化されてゐるのだらう」と云つた。どう／＼物好きな二人の男が皆の代表者となつて面平のそばまでやつて来て、「もし／＼、見て居れば貴殿は先程からごみ許り釣上げて居なさる様じやが、どうかしてゐなさるんじやありませんか」と云ふと面平さんはすました顔で「人は魚をよく釣りますから、私は人間を釣つて見やうと思つて今貴殿方を釣つてゐた所です」と云つたまゝ、さつさと歸つてしまつた。

逸話 (二)

「おい子供、すまんがお前一寸と行つて豆腐を買つて来ておくれ」細工部屋へあそびに来てゐる二三人の鼻つたれ小僧を見、かう云つたのは面平ぢいさんであつた。「あゝ行つて来てあげやう、お錢は」「お錢か」面平は腰を伸ばしながら立ち上つて、戸棚から幾何かのお錢を子供に渡した。子供は角の豆腐屋へ走つて、やがて一丁の豆腐を買つて来た。

「あゝありがたう。これで今夜はうまい飯にありつけると云ふもんじや」と、また先程からの面の製作にとりかゝつた。「をぢさん、鍋は棚ですか」「あゝ」子供はいつもの事なので、戸棚から鍋を出して来て、お湯をかけお汁の準備をしてやつた。間もなくあたりが薄暗くなると、子供はそれ／＼我が家へ引きあげて行つたが、面平さんは日の暮れかゝつたことも、鍋の湯がたぎつてゐることも、知らぬ顔にせつせと鑿の手を動かしてゐた。「どうも今日は馬鹿に暗いな。おい子供その障子を明けておくれ」と仕事しながら呼んだが、子供の返事のないのに氣がついた面平さんは、顔をあげて始めて日の暮れたのに氣づいて、「もう日が暮れたのか。秋の日は暮れ易いな。……あゝ鍋のお湯もわいてゐる。どれ夕飯のお汁でも作ろうか」と、子供の買つて来た豆腐を引きよせ、一丁の豆腐を握つたかと思ふと、ぐつと、握りしめた。豆腐は一たまりもなくつぶれてばら／＼になり指の間から鍋の中へおちた。面平さんはつぶやく様に、「豆腐はこれだからおれが大好きなんだ。それ庖丁だ、それ切り板だと云はなくつてもよいからな……」と、戸棚から溜の甕を出して来た。

#### 一四 陣屋 稻荷

毎年私共は初午のとき支應前の大廣場で、勇ましい團子まきや、吠たくりを見る。支應の

うしろの陣屋根子石のある近所に、つひ此頃まで稻荷様の祠があつて俗に陣屋稻荷と云はれてゐた。こゝにお稻荷さんをまつたのは何時の頃かはつきりわからないが、元陣屋には郡代と云ふえらい役人がゐた。或る郡代にかわいらしい一人の娘の子があつた。郡代の奥方は生れつき猫が大變すきで猫を大事に育て、ゐたところが、この猫は不思議にも奥方より娘の方によくなれついて、娘の行くところへはどこまでもついて行くと云ふ始末であつた。何か用事が出来て外出する時でも必ずこの猫がついて来る。猫に知らさない様にこつそり出かけても、すぐ追つかけて来るので、娘もうるさいことに思つて、聲を荒げて追ひ返へそうとしても、たゞ前脚をちぢめそこにしやがんでしまひ、打つてもけつても動かうとしない。こんなにしつこくつきまどふので、娘もあまりのことに人目も恥かしいと、物見遊山にも出ず邸内の廣い庭などを散歩するのみであつた。或日娘は散歩のとき泉水の傍なる太い松の根方に腰をおろして、浮いたり沈んだりして遊ぶ鯉の群を餘念なく見入つてゐると、今までおとなしく傍にうづくまつてゐた猫が、急に狂氣の様に身もだへしつゝ娘の着物の裾を喰へてひつぱり出した。娘はおどろいて足をあげてけ飛ばしたが又も一層はげしく飛びついて、ぐん／＼裾を引つぱるので、とう／＼娘は聲をあげて助を求めた。娘のたゞならぬ叫び聲に書院で書見をしてゐた郡代は大刀をおつ取りかけつけ、娘にとびかゝつてゐる猫を見るやかつとなり「汝、畜生とは云へ永年飼

ひ養はれたる恩儀を忘れ、我が娘に危害を加へんとは不届、今は用捨ならぬ」と、抜く手も見せず猫の首を打ち落してしまつた。首はころりと落ちるかと思ひの外、すうつと空を飛んで松の幹に巻きついて、下にゐる娘をねらつてゐた大蛇の首にかみついたので、大蛇は急所をやられ、一たまりもなく地ひゞきたてゝどつと落ちた。これは以前から娘が大蛇にねらはれてゐたのを知つて、懸命に護衛してゐたのである。今日しも松の上から一呑みとする／＼身体をのばし、大蛇が娘に近づくのを見て狂氣の様に裾をくはへて娘に急を知らせたのであつた。郡代も之を悟り大いに後悔し、猫に向つて「汝の義心あるを心づかず之を殺せしは余の失策であつた。汝の義心に報ゆるため社を立て、稻荷大明神として祀るべし」と慰めたところ、今までくわつと見開いてゐた兩眼を閉ぢてしまつた。郡代は約束によつて此の義猫を祀つたのが稻荷さんの始めで、それから代々の郡代は邸内の氏神とし、年貢米の御倉の守護神として尊信したと云はれてゐる。

### 一五 鍛冶橋

づつと昔高山一之町五丁目に、大坂屋といふ富豪があつた。或夜大坂屋では、泥棒に小判凡そ百五十兩を盗まれてしまつた。翌朝になつてから主人は、その小判のないのに氣がつき、喫驚して此の事を領主へ訴へ出た。役人は大坂屋へ来て色々取調べの上、盗人は餘り

遠い處の者ではないとの見當をつけた。それで一之町の組中の男女へは、嚴重に他出してはならぬと足留の命令を下した。そうして家毎に役人が立ち寄り嚴重に水も漏らさぬ吟味をしたが、どうしても知れなかつた。かうする中に日は三日四日と流れて行つた。組の者は一同足留されてゐるので家より一步も外へ出ることが出来ず、非常に難儀をしてゐた。それで組の者は皆大坂屋で厄介なことを訴へ出たものだ。訴へて出さへしなければ、こんなに永く足留なんかくわなくともよいのにと、大變不足をならべて大坂屋を恨み出した。大坂屋でもこんな事になるとは露しらす、近所隣りへ迷惑をかけて申し譯がない。どうしたらよいかと思案した揚句、領主に御吟味御免の儀を願ひ出た。ところが領主は、考があるから暫く相待ち居るやうにとの事で吟味御免御聞濟なく、町内の者は相變らず非常に難儀をしてゐた。大坂屋では組の方々に此の上もない迷惑をかけて愈々申譯がなく、泣くにも泣けない有様となり、どうか御免の儀御聞濟相成度と再三御願に及んだ。漸くの事で領主は御聞濟なされ、最初の訴願書をお戻しになつたが、町内の者の足留は更にお許しなく一層吟味が厳しくなるばかり、遂には家毎に板敷まで取拂はせ、土を穿ち壁をこぼちなどして詮議をしたけれども、どうしても罪人は判らなかつた。ところが大坂屋の南隣りに住んでゐた次右工門と云ふ男が、突然大雄寺山で縊死した。どうも次右工門があやしいと云ふことになり、諸役人がその家へ押懸けて探索したところ、雪隠のふみ板の下にその金子

がかくしてあつたので、大坂屋を呼んで渡された。大坂屋は「私方では先に御吟味御免を願ひ出てゐますし、又此の事件のために大變人々に迷惑をかけてゐる事ですから、何か公共の事にお用ひ願ひ度い」と申し出たので、領主はその金を以て新規鍛冶橋を作らせたといふことである。

一六 名作秘話

「今日は、叔父さんいらつしやいますか」と、圭助叔父を訪ねると、「おう」と、座敷の方から返事があつた。直ぐに座敷へ通ると、樂隠居で話好きの叔父は「おう、幸作か、よく寄つて呉れた。二三日梅雨の様な降り方で閉口してるよ。今日はゆつくり話せ」と、ニコニコ顔で迎へられた。「叔父さん、お庭の白躑躅がとてもよく咲いてゐますなあ」と、ほめると、叔父は「うん白躑躅もよいが、今日は一つ之を見てくれ」と、床の置物を指された。見れば、罽毘の置物だ。而もどぐろを卷いた蛇が、罽毘の眼のくぼみからぐつと首を出してゐる。「叔父さん、随分變つた置物ですなあ」罽毘に蛇、奇抜な構想だ。其の又手法がとてもたまらぬ。焼の匂がすてきた。じつと見てゐると全く鬼氣人に迫るの思がある。暫く感に入つてゐると、叔父の得意は絶頂に達した。

「ほ、大分幸作の御意にかなつた様だな」と、言はれた。「全く、之はすばらしい。一

体どこの出来です」と、尋ねると、「之が澁草で生まれたのだから嬉しいではないか」

「随分名工があたのですな」「たしかに名工だが、之が生まれる迄には、其の陰に一條の秘話がある。今日は一つ其れを話そう」と、番茶にぐつと口を潤して物語られた。

「高山に生まれ彫刻家の譽の高い松田亮長といふ方がある。その亮長の秘造弟子に廣野亮直と言ふ方があつた。亮長の秘造の弟子だけあつて、さすがに亮直もたしか腕だつた。そうだと、亮直の死んだのはたしか明治十七八年頃だつたから、此の出来事は十五年頃の事だつたらう。其の頃高山の醫師に藤村と云ふ方があつて、此の方は大へん亮直の作を愛玩しなかつた。ところが或時のこと「亮直。うんとお前の腕をふるつて、一つ罽毘を刻んで呉れ」と、一風變つたものを頼みなさつた。亮直は何時も心易くしていただく藤村さんの頼みでもあるし、罽毘とは面白いと思つたから、「一つやつて見ませう」と、引受けた。それからと云ふものは、暇さへあれば何時もどんな風に作らうかなあ……と、心の中に幾度か描いては見たが、どうも満足な形が浮ばない。ところがある晩の事今夜はうんと眠つて心を新らたにして一工夫せやうと、早く床をとつて入つたものゝどうしてもちつとも眠れない。眼は冴へるばかりで、又考は何時の間にか罽毘の彫刻に集つてしまつた。じいつと、くすばつた天井の節の穴を見つめて思ひなやんでゐると、ふと節の穴が罽毘の眼に見え出した。あつと思つて起き直る拍子に眼の前に蛇が。之はつと、よう見るとそれ

は黒の細ひもであつた。亮直は「しめたつ」と叫んで、鬮體に蛇を配する事にきめてしまつた。斯うなると亮直はもうやりかけの仕事も何もほつたらかし、寢食を忘れて鬮體に鑿を振つた。數日立つと仕上つたので、床にかざつてじつと眺めたがどうも物足らん。こゝかあそこかと手を加へたが、どうしても駄目だ。亮直は首を垂れて深く考へ込んでゐたが不意に立ち上ると折角の鬮體を鉈でかち割つてしまつたさうだ。「中々亮直は、偉い男ですな」「うん、ほんとうに偉い。それから亮直は、之はどうしても實物を見て今一段研究するより外はないと思つた。然し品物が鬮體と來てゐるので手に入り様がない」「そりや亮直も困つたでせうな」「うん、亮直は大膽にも遂に土葬の鬮體を掘り出す決心をしたのだ。其の頃はなあ、高山の焼場は御坊山と八幡山との谷あひにある北ヶ洞であつた。あそこは今では大分きり開かれて家もぼつ／＼出來てゐるが、其の時分の北ヶ洞は大きな杉の木が立ち並んで、時折狐火がともつたりして全く不氣味な洞だつたよ。然しもう藝術心に燃えきつてゐる亮直には、土葬を掘る事の罪も、氣味の悪さも何もなかつた。そして人に知られない様に闇の晩こつそりと北ヶ洞へ行つた亮直は、外へ光のもしないやうに籠燈をともして、土葬のありさうな所を掘つて見るとうまく頃合の奴を掘り當てた。氣味の悪い鬮體を掘り出して、亮直はそれこそ鬼の首でも取つた様な氣になつて家へ歸つたんだよ。それから何でもこつそり江名子川の底に埋めて一月ばかりたつて掘り出

すと、とてもよい鬮體の手本が出來たので亮直は天へも昇る様に喜んだ。もうこうなると夜を日についで腕を振つたが、今度の出來のすばらしい事、鬮體と云ひ蛇の凄さと云ひとても快心の作だつた。今でも此の傑作が藤村さんにあるそうだが一度見たいもんだなあ」「叔父さん。それはそうと其の焼物との關係はどういふのですか」「うん之か、之はあんまり其の彫刻が評判になつて澁草の焼物師がそれを手本にして作つたのが之なんだよ」「叔父さん。どうも有難う御座いました。大へん面白う御座いました」と、お禮を言つて、「取かへる」と言はれるのを、かまはずさめたお茶をすゝつて暇を告げたのであつた。

一七 神 猿

初夏の一日、高山の南郊片野の地に鎮座まします、日枝神社に參詣した。一步社地にふみ入れば、夏の日射しはしら／＼と掃き清められた石疊を照らし、自ら襟を正さしむるものがある。薫風や三千年の杉木立、ほんとうに其の樹齡の程も計られぬ大杉が、古雅な趣きの社殿に一層のゆかし味を添へてゐる。神前にぬかづきて三拜の後、強い夏の日射をもさへぎつて、涼氣掬すべき此の大杉の下に腰を下ろし、傳説にくはしい友人から此の御社の縁起を聞いたのであつた。時は永治元年の事とか、恰も平氏全盛の時とて、當時三佛寺城



に飛驒守平時輔と言ふ平氏の一族が居を構へ、片野の奥坂口にも石光山の城砦を備へてあたり威を振つてゐた。時輔はもとより武將の事とて獵を好み、一日家來數名と共に江名子より坂口へ山越にて獵を試みた。たま／＼坂口に近き山にてふと眞白な猿を見出した時輔は「こはよき獲物」と、家來と共に弓に矢をつがへて追ひかけたのであつた。

白猿は其のすばやき事神の如く、立並ぶ木々の間を巧みに縫つて、やがて木のまばらな彼方の丘に現はれた。時輔は「こゝぞ」と、得意の弓を引きしぼつてひようと射放つた所、「ぶすり」とたしかに手答があつたので、家來と共に勇み立つて近よつて見れば白猿の姿は更に見當らず、今まで氣づかなかつた大杉に「ぶすり」と、矢はつき立つてゐた。時輔は「之は不思議、白猿は大山咋神のお使であるとかねて聞いてゐる。之は神様が白猿をおかばひ下さつたものに違ひない」と神威を深く感じ、早速城砦を備へてゐた石光山に日吉大神を勧請して、城砦の鎮護神としてゐた。ところが四代目平判官景家の時、源義仲が木曾に起り追々勢を四圍にふるふや、平家の領地であつた飛驒を征服すべく、其の部將手塚太郎光盛をして益田より討入らしめた。折悪しく景家父子は都に上つて不在のため、景家の奥方や留守の士等は大いに驚き、一族をかり集めて防戦に力めたが、勇將手塚の軍兵には敵し難く忽ち打ち破られ、其の折に兵燹のために社頭並に松樹院（社僧）は焼失したのであつた。後、里民は此の社を背後の山に再建して、産土神として尊信してゐた。

天正の末金森長近公飛驒の領主に封せらるゝや、高山城を築くにあたり今の地に奉遷して城の鎮守とし、城下町の産土神と定め、社殿の建立及び社僧を置き、石光山松樹院と號したそうだ。それだから今でも、時輔の始めに建てた石光山の社地を「元山王」と呼ぶのであると友は語つた。仰げば大杉の頂きを初夏の風が爽かに渡る。白猿をかくしたと云ふ大杉も「こんな大杉だつたらうか」などと思ひ浮べながら歸路についた。

一八 盜 人 神

「泥棒／＼／＼」けたたましい呼び聲にはたと夢を破られた庄屋の幸兵衛はがばどはね起き、床の間の脇差おつ取つて外へ飛び出した。丁度そこへ「泥棒／＼／＼」と連呼しながら隣家の彌藏が飛び出して來た。「おい彌藏さん、どうしたと云ふんだい」「おれの家へ今泥棒が入つて、おれが大聲あげてよぼつたら逃げ出したんぢや……あれあそこへ逃げて行きよる」と又も「泥棒／＼」と叫びながら追ひかけ初めた。それにつりこまれて幸兵衛も「何つ、泥棒だつて。ようし」と走り出した。甚助も家からとび出して「おい幸兵衛さんどうしたつて云ふんだい」「泥棒だよ、おいお前さんも力を貸してくれ。ひつ捕へてやるんだから」と云ひすて、どん／＼走つてゆく。甚助も「ようし泥棒だつて、甚助の腕前を知らんか」と、これまた走り出した。彌藏の呼ぶ聲に家から飛び出した小八郎も

「何に、泥棒か。よし、おれが捕へてやろう」と云ふわけで、ごんく走り出した。おぼろ月夜の道を走りゆく四人の足音とつく息づかひとがあたりの静けさを破る。はるか前方を泥棒の走るのがかすかに見えるが中々追いつけない。

泥棒は逃げながらも「何處かよいかくれ場所がないか」と目をあたりに配つて走つたが、村を出はなれるともうかくれる場所はない。「はて困つた、今度は捕まるのか、残念だ」と考へつゝ、尙も走りつゞけてゐると、道ばたに杉の五六本茂つた加茂神社の小さな祠がある。「よし、此の森へかくれやう」と森の中へ飛びこんだ泥棒は祠前に立つて「どうぞ神様久七をお助け下さい」と思はず心に念じた。追手の足音は次第に近づいて来る。

「やあ、加茂の森へ逃げこんだらしいぞ」「たしかに逃げこんだ。こうなりや袋の鼠と云ふものだ」走りながら彌藏と幸兵衛の交す話聲が聞えて来る。泥棒は今はこれ迄と観念のほぞを固め、ふと眼をあげると、不思議く、今まで小さかつた祠が見るく大きくなり、しかも前方の扉まで開いたではないか。「やれ有りがたい、神様のお助けだ」とばかり我を忘れて神殿の中へ飛びこんだ。すると祠は又見るく小さくなつてもこの祠になつてしまつた。泥棒は片隅の方に小さくなつて心の底で「どうぞ神様、見つからぬ様におかばひ下さい。今まで私の見てゐた夢が今醒めました。私は決して好き好んで泥棒し様としたわけではありません。働きの出来ない両親と、長らく病みわづらつてゐる妻と、そして

三人の子供とを養ふために毎日く、随分苦勞して働いてゐるんですが、かう不作つゞきぢや日に／＼暮しが難しく、今日ではもう明日の御飯にも差支へる様になつて、つひ悪い事とは知りながら今夜の始末に及んだのでございます。私が捕まりましたら両親と妻子がどんなに難儀するかわかりません。私は明日からは眞人間にかへります。何卒今夜の所は命の助かります様おかばひ下さいませ」と一生懸命に念じてゐる。追手は遂に迫つた。

「たしかに此所へ逃げこんだ」「幸兵衛の家に代々傳はる脇差の切れ味を試してみるんだな」と元氣のいゝ幸兵衛は手に握つてゐた脇差を抜き放つた。脇差はにぶい光でびかりと光つた。そこへ甚助も大兵肥満の小八郎も駈けつけて来た。

「泥棒はどうしました」「どうく、此の森へ追ひつめたんです。神社の縁の下へでももぐりこんでゐるんでせう」「すばりおやりになる氣かな」「さあ、早く搜索ませう、鼠でも猫をかむつて云ひますから御油断なされるなよ」と四人は祠の縁の下から、扉の中から、屋根から、あたり一面さがした。泥棒の姿の見えないのに驚いた四人は更に附近の藪から草の茂みまでもくまなく搜したが、遂に見當らなかつた。杉の太木によち登つたか、地にもぐつたか、急に姿を見失つた四人は残念でたまらない。「たしかに此所へ逃げこんだのに、どうしたつて云ふのだらう」「不思議な事もあるもんだな」「これは多分加茂の神様があの泥棒をおかくしになつたに違ない。残念至極だ」「庄屋さん、どうしたもん

でせうな」「これだけ搜して居らないんですから、まあ引き上げるより仕方ないでせう。傳來の名刀が使へなくつて残念ですが」幸兵衛は痛快そうにから／＼と笑つた。四人は間もなく引き上げて行つた。此の噂は四方にひろがり加茂の神様が盗人をおかくしになつたといふので大評判。やがて誰云ふとなく「盗人神／＼」と呼ぶ様になつた。今でも加茂神社と云つても知る人はないが「盗人神」と云へば、誰でも「あの松本の路ばたの森か」とうなづく名高い神社になつてゐる。

V 一九 梶 貸 せ 岩

「お父さん、僕は 今日先生から僕等の村に、梶貸せ岩と云ふ不思議な岩があると聞ききました。お父さんは御存じでせう」と正夫は父にきいた。「知つてゐる、どんな事を習つて来たか、話してごらん」「郷土地理の時先生が江名子に梶貸せ岩があつて、昔梶を借りに行くものがあれば貸してくれたとお話しになりました」「さうだ。幸ひ今日はお父さんも暇があるから梶貸岩の話をしてあげやう。正夫……幸雄も壽子も好子も皆呼んでおいで」「はい」正夫は表であそんでゐる妹と弟を呼んで来た。兄弟四人を前に据へて父は語り出した。「昔、いつ頃かな、まあ大昔だ。此の村に一人の大變貧しい男が住んでゐた。毎日せつせと働くんだが不幸つゞきでどうも豊にならない。其の中に力とたのむお父さん

が病氣で死んだので、悲しみの中に野邊の送りをする事になつた。村の人々が手傳に來て呉れたけれども、おふるまひする膳椀がない。買ふお金はなく、借りる家もない。父を失つた悲みと膳椀がなくておふるまひの出来ない悲しみとにくれて、一人ぼんやり表に立つてゐると、向ふから白い鬚を胸の邊までたらし、白衣をまとつた見るからに神々しい老翁がやつて來た。そしてその男に「大へん悲し相な顔をしごるぢやないか何が悲しいのか云つてみなさい。私で出来ることなら何でも聞いてあげやう」「ありがたうございます。どなたにもお話し出来ない様な恥しいことなんです」「どんな事だつてい／＼ぢやないか云つてごらん」「でも」「さあ早くお云ひなさい。きいてあげやう」親切に尋ねられたので男はどう／＼有りのまゝを老翁に語つた。翁は男の顔を見ながら「それ位のことなら易い御用ぢや。荏名の森の近くに大石があるから、あの大石の前に行つてごれだけでもお前のほしだけの數を云つて、頼めばすぐ貸して呉れる。試に頼んで見なさい」と云ふかと思ふと、吹き消す様に姿が見えなくなつた。はつと夢から醒めた様に男は「これは變なことがあつた。とにかく行つて見やう」と荏名神社の近くの田圃へ來ると、なる程今まで見たことのない大石がある。その男は大石の前にたつて「膳椀二十人前をかしていただきたい」と老翁にきいた通り頼んでみると「今夜、日が暮れたら取りに參れ」と何處からか聲がした。男はひそり喜びながら家に歸つた。そして日の暮れるのを待つて大石の前へ

行つて見ると自分の頼んだ通り膳椀が二十人前正しく揃へてあつたのだ」「お父さん、不思議ですな」「神様がかして下さつたのでせう」「そりやわからん、しかし不思議なことだね。それからその男はおふるまひがすむと、直に持つて行つて、お禮を述べて石の前に据へて歸つた。翌日行つて見るともう膳椀はなかつたさうだ。その話がだん／＼ひろまつて貧しい人はよく大石の前に行つて膳椀を借りたが、前の男の様に必ず貸して呉れた。所が一人の慾ばり男が居て借りた切りもう返へさなかつたので、其の後誰が借りに行つても貸さなくなつたと傳へられてゐる」「お父さん惜しいことをしましたな。今もその事があつたら痛快だが……」「その正直でない男はどうなりましたか」と、兄弟は残念そうである。「それは知らん、椀を貸せた話は國府村に椀貸せ塚、益田郡に椀貸せ淵等があつてそれ／＼面白い話が残つてゐる。美濃の方にも之によく似てゐるが少し變つた話がある。それは或る村に一軒の長者があつて何不自由なく暮してゐた。或る年のお盆に一人の武士が長者の家を訪れて、「拙者は此の山奥の城に住む武士だが今晚一夜膳椀を廿人前貸してもらひたい」と頼んだ。主人は外ならぬ武士の頼みとあつて、云ふがまゝに貸し與へた。その武士は年々お盆が來ると長者の家へ膳椀をかりに來るので、長者は不思議に思ひ、そつと人をやつてあとをつけさせた」「又お化けですか」と正夫は笑つた。「だまつてお聞き。あとをつけて行くと、どうだらう、山の奥にある大池の中へ入つてしまつたので、つ

いて來た男は腰を抜かさん許りに驚き、走り歸つて主人につげた。主人も氣味悪く思つて翌年はお膳に針をさして貸すと、借りて行つたさきり翌年からはもう借りに來ない様になつたと云ふ話がある」「面白かつたな。お父さん有りがたう」「お父さん有りがたう。面白かつた／＼」「お父さんは中々お話が上手になりなかつたな」お父さんのお話のすんだ頃は、西の空は夕焼で火事の様に眞赤になつてゐた。

附記

椀貸せの傳説をもつた所は飛騨には多い。益田郡の三原に椀貸せ淵、吉城郡坂下村に椀貸せ淵、全郡國府村に椀貸せ塚、大野郡高山町冬頭の椀貸せ塚等數多いが何れも江名子の椀貸せ岩と話の筋は同じである。

二〇 大 銀 杏

「國分寺の大銀杏が眞黄になつた。今年も愈々何時雪が來るかも知れない」と、老人達の間には毎年此の言葉がくり返されるのである。此の大銀杏は全く不思議な位に一時にはつと黄ばんで、一朝に殆んど落葉するのである。お藥師堂の前に黄金の葉が一面に散りつくした時、此の大銀杏の下に立つと、佛教の華の咲き匂つた奈良時代の昔が頭の中に蘇らすにはおかない。言ひ傳へによれば、その上聖武帝の思召に依つて創建された國分寺は本堂に、庫裡に、鐘樓、經藏、雲を凌ぐ七重の塔に、全く結構の大、輪奐の美を極めたもの、

様である。さて此の七重の塔の建築にからまる一條の哀れな物語りが傳へられてゐる。當時腕扱の大工が殆んど此の寺院の建立に集つて、各々腕の限りを盡したのであつた。その數多い大工の中から特に選ばれて七重の塔を承つた棟梁があつた。其の喜びは飛び立つばかり、棟梁としての面目此の上なし、選ばれたからには精の限り根の限りを盡して立派に仕上げんものと決心し、澤山の弟子と共に仕事に取かゝつたのであつた。

ところが茲に思ひがけぬ大事が出来してしまつた。大事とは何か。それは弟子の大工が柱の寸法を誤つてみんな短く切つてしまつたことであつた。それに氣づいた棟梁の顔色は全く土の様にさつと變つた。「何んだつて、こんな間違を起したんだ。よりぬきの此の材料なさない事をしてしまつた」聲をふるはせて弟子を叱つたものゝもう取りかへしはつかない。弟子達も生きた心地はしない。丁々との大工小屋から勢のよい音が聞えて来る。みんな一言もしやべらないで涙を浮べてゐた。棟梁は漸くに胸を靜めて、出来た事は今更仕方がない。弟子の誤は棟梁の失策だ。無理な事だが何とか工夫がつかないか、皆も一つ工夫して見てくれ」と、その日は他の仕事をすゝめて、日の暮れるのを待ちかねて家へ歸つた。棟梁は家へ入つて「今歸つたよ」と言つたが其の聲はいつもの様に張がなかつた。そうとは夢にも知らず、妻と娘の八重菊とは「お歸りなさい」と元氣よく出迎へたのであつた。而し一目父の顔を見て喫驚した。「あなた、おかげんが悪いのですか」「お父さん、お顔

の色が」と二人は直ぐに尋ねた。圍爐裏のはたにごつかと腰をおろした棟梁は「いや別にからだは悪くないが、心配な事が起つたよ」「心配な事とは、一体どんな事が起つたのですか」「仕事の事だからお前達に聞かせても仕方があるまい」「いくらお仕事の事でも、どうぞ聞かせて下さい」と妻がたつて言ふので、棟梁は語り出した。「實は弟子の奴、どう勘違ひしたか塔の柱をみんな寸法より短く切つてしまつたんだ」と投げ出す様に言つた。打ち明けられた妻の顔色も變つた。「それは飛んだ事をしでかしましたな。一世一代の仕事とあんなに打込んでゐなかつたのに、こんな行違が起るとはほんどうにどうした因果な事で御座いませう」と妻もうちしほれてしまつた。じつと、先程から父の心配を聞いてゐた八重菊は、何かよい工夫が出来たと見えて、「お父さん、それではこうしたらよう御座いませんか。柱の上に榭組を造つて短いのを補へば裝飾にもなつてよう御座いませんか」と何の苦もなく云つた。父ははたと膝を打つて、「八重菊、それはよい所へ氣がついてくれた。それでお父さんは助かつたよ」と八重菊の手をとつて、いたゞき上げんばかりに喜んだ。心配の雲のはれた棟梁は、翌日になると早朝に起き出て勇ましく作事小舎へと乗込んだ。弟子達は昨日に引きかへ元氣さうな棟梁の顔を見て不思議に思つてゐると、棟梁は皆を集めて「どうだ、皆はよい工夫があつたか」と尋ねた。「どうもよい工夫がないので困りました」と一同が言ふのを、棟梁は聞いてにつこり笑ひ、「そうだらう。お前達には中々よ

い考は浮ぶまい。おれも色々考へたが、昨夜ねてゐてふとこんなにしたらどうかと考へつた。皆も一つ聞いてくれ。その考といふのはこうだ。柵組だ。それを造つて短かく切つたのを補ふといふわけさ。そうすれば裝飾にもなるし、どうだらう」弟子どもは「成程」と一同うなづいた。「さすがに棟梁だ。違つたものだ。たゞでは棟梁にはなれない」と一同感心してしまつた。斯くして塔の仕事は一日／＼と涉つて、七重の塔は見事に出来上つた。雲をよぶかと思はれる塔を仰いで、人々は口々に其の立派な出来ばえを稱へた。完成の日國造が受つぎの爲めに出張された。そうして見事に出来上つた塔を仰いで、暫し感に打たれてゐられたが、「實に見事な出来だ。それにしてもあの柵組は特に面白い工夫だ。一体誰の考案か」と尋ねなかつた。棟梁は今更娘の工夫とも言へないので「はい、大層御ほめに預つて恐縮で御座います。あれは私のつまらぬ趣向で御座います」と言つてしまつた。國造は「さすがに評判の棟梁だけある」と重ねておほめになり、「追つて天子様からは御褒美の數々をおさげになるであらふが、之は當座の褒美に遣はそう」と言つて、あの可愛い目に入つても痛くない程に大事であつた八重菊の顔を見るのが何だか氣がどがめた。「おい聞いたか」「何をだ」「七重の塔の事よ」「七重の塔がどうしたつて言ふのだ」「まだ知らないのか。毎朝塔に紫の雲がなびくんだつてよ。ほんとうにすばらし

い出来だな。ほんとうにあの棟梁はよくやつた」「國造様も大へんなおほめだつたそうだが、あの柵組の工夫なんか全く大したものさ」こんな風に棟梁の評判は鳴りひゞいたのであつた。棟梁は此の評判を聞いたらどんなにか喜ぶべき筈なのに、「柵組く」と聞く毎に、胸に針をさゝれる思がして、ひとり心の中にもだへ苦しんだ。棟梁は此の事が評判になるにつれて、若し八重菊の口から「あの柵組はわたし考へてやつたの」などとうっかり一口でも言つたならば、それこそ今迄の評判に引かへて「あの棟梁は腕に似合すさもしい心の男だ」と笑はれる事だらう。こう思ひかけた棟梁は、寝ても起きても悩み續けたのであつた。遂に棟梁は恐ろしい決心をして、可愛くてたまらぬ八重菊をつれ出して殺害してしまつたのである。そうしてその死骸をそつと國分寺の屋敷の隅に埋め、それを隠す爲に一本の銀杏を植えたのであつた。あの藥師堂の前の天をも磨する大銀杏こそは、八重菊の墓標なのである。此の哀れな物語を古老から聞いて大銀杏の前に立つた私には、八重菊のやさしい手毬歌がほのかに聞えて來るやうな氣がした。

二一 名 僧

昔眞蓮寺に學徳の高い名僧が生れなかつた事がある。惜しい事には片目で、びつこであつた。或年東山の某寺へ他國から大智識が來錫せられ、本堂に於て大問答の會が行はれて、

澤山の坊さんや俗人が參詣してゐた。この名僧もその問答を聞きたいものだ、墨染の衣に輪袈裟をかけ、杖にすがつて本堂に上られると、すぐ大智識は其の姿を見つけ「汝不具足にて佛僧とは如何に」と一喝せられると、名僧は笑ひながら靜かに

「満月も西に入る、半月も西に入る」と答へられたので、大智識は感嘆して早速その席を開かれたと云ふ。

### 二二 三福寺峠の狐

「茂作さんが又昨夜ばかされて、何でも土師洞の木一株にらみつこをして居たげな。」

「あの狐のいたづらには困つたものだなあ。何とかしなければなるまい」 「あんなお人よしの茂作ぢいさんをばかすなんて、あまりひどいなあ」 「茂作さんが狐にいたづらをしたんじやないかしらん」三福寺村には又新しい話題が生れた。あの人のよい殺生一つしない様な茂作ぢいさんが、昨日の朝町へ賣物に行つたきり夕方になつても歸らなかつた。いつも夕方になると孫共へ土産の菓子包をぶらさげで、一杯の居酒に鼻唄まじりの千鳥足で歸つて來るのが常である。夜中になつても茂作爺さんが歸らないので家でも心配し出し隣り近所の若い男衆をたのんで、心あたりを探してもらつたが、おぢいさんの行方は判らなかつた。最後に人々の頭に浮んだのは、例の狐にやられたのじやなからうかと云ふ疑ひ

だつた。そして元氣な若い衆が四五人三福寺峠のあちらこちらを探した末、畑の中につゝ立つたまゝ木の切り株とにらみつこしてゐた茂作さんをつれて來た。道々茂作ぢいさんは「あのにくい狐めが、おれが菓子包をさげとるもんじやで菓子でもとるつもりぢやつたのであらう」かういひ／＼菓子包を見せたが、やつぱり包の中には菓子のかげも形もなかつた。ところが三福寺村に傳吉といふ強情な男があつて「茂作さんが狐にばかされたが、大體茂作さんが氣がよいからやられたのじや。いかに峠の狐もおれをばかすことは出來まい。よし今夜峠へ行つて見てやらう。狐めどんな事をしるか」と、夜の更けるのを待つて峠の方へ出かけて行つた。だら／＼坂を登つて、さみしい頂上に着いたけれども、狐一匹出て來ない。「それ見ろ、おれには狐だつてかなふまい」と一人にこ／＼しながら峠を下つて、道の片側は杉木立の中に墓石が立ちならび、片側は竹やぶのしげみで、晝でももの淋しい所まで來かかつた時、下の方から供五六人從へてお殿様が駕籠でやつてお出でになるのに出會つた。傳吉は心の中で時と云ひ場所と云ひ、これはてつきり狐の仕業に相違ないと、先頭に進んで來たお供の一人をいやと云ふ程はり飛ばし「よくもお侍の行列なんぞに化けて來やがつたな。傳吉は其の手は食はぬぞ」と、次のお供もなぐり飛ばしてしまつた。怒つたのは駕籠のお侍だ。駕籠から出て來たお侍さんを見れば之はどうしたと云ふか、天領飛驒一圓をあづかる郡代様の手代遠山源八郎様ではないか、三福寺村へも公用で三、

四回巡視しなされたことがあるので、傳吉にも見覚えのある顔であつた。

「其の方は何所の土民かは知らぬが、拙者の供先を邪魔だて致すとはけしからん、如何なる仔細あつて亂暴致した。拙者を何者と思ふか、郡代様より夜中なれども急の御用を承つて三福寺村まで出張致す遠山源八郎なるぞ。さ、仔細を云へ、聞かう」怒りにもえた源八郎の顔を見てから傳吉はもうぶる／＼ふるへてゐる。これはしまつた、こんなお侍さんとは露しらす狐の仕業とのみ考へたのは一生の誤り、困つた事になつたぞと、たゞふるへてゐるばかりである。大地にひざまづいて源八郎の怒の聲を聞いてゐた傳吉、漸くのことで青い顔を上げて、「まことに恐れ入りました。實は毎夜／＼此の峠に狐が現はれまして善良なる百姓どもを迷はしまするにつき、私が……」  
「云ひ譯は無用じや。狐が出て良民に禍をなすかは知らぬが、先頭の供の持ちたる郡代様定紋入りの提灯が目に入らぬとは疎忽至極な奴じや。無禮の詫一言もせず、云ひ譯がましい言葉をぬかすとは、益々以上を侮辱するもの、用捨はならぬ。一刀の許に切り捨て、呉れ様」  
「でもございませうが、私儀決して……命ばかりは……」  
「くどい／＼。武士が一旦云ひ出した事何で許されよう、觀念致せ」とゆふと源八郎は羽織をぬぎすて、刀のさげ緒を以て禪十字にかけ、腰なる細身の太刀をすらりとばかりに抜きはなつた。  
傳吉はもう仰ぎ見る勇氣もなく、たゞふる／＼ふるへて今は是までと覺悟をきめてゐた。

ところが墓地の間の細道からあはて、駈けつけて來たのは雲龍寺の和尚である。うちしほれた傳吉を一目見て、「あ、お侍様すこしお待ち下さいませ。お、そちは三福寺村の傳吉じやないか。して又如何なる仔細じや。あまり墓地の方が騒しいので何事かと見に參つた所が此の始末、な傳吉如何致したのじや」地獄で佛に遭ふと云ふのは此の事であらうと傳吉は思つた。そして一部始終を和尚に物語ると和尚はうなづきつ、「聞けば成程そちが悪い。しかし此の頃の狐の惡戯と來ては全くひどいなあ」  
「こんどは遠山源八郎に向ひ」  
「遠山様のお怒りはもつとも存じます。しかしながら此の者は三福寺村でも親切者、律義者よと評判のまことによい傳吉と申す百姓にございます。此の頃此の峠に巢くう古狐奴が度々現はれまして、三福寺村の良民たちに禍するため、傳吉も貴殿の行列を見て場所柄でつきり古狐奴の仕業と考へて此の始末に及んだもの、無禮の段は幾重にも拙僧からもお詫び申し上げます。何卒命ばかりはお助けにあづかりたく存じます」と、理をつくしてお詫び致すと、源八郎もいやと云ひ兼ねたものか、刀を鞘におさめ、「土民の身分としてはあまりの亂暴狼籍一刀兩斷に致すべき筈の者なれども、外ならぬ貴僧の御仲裁、許し遣しませう。然し只一つ拙者の望がござるが聞き届け下さいませうか」  
「してお望みとは」  
「さればこの土民をこのまゝ許しつかはしては、なぐり倒されし供の者共の顔も立ち申さぬ。傳吉に以後心得さす爲め髪をそつて貴僧の弟子入りをさせられたいと存じます」  
「いや、



外ならぬ貴殿の仰せ傳吉もこゝろよく承るでございませう」「なあ傳吉、そちが今日限り髪をそつて拙僧の弟子入りをすれば、拙僧に免じてそちの命をお助け下さるそうじやが如何いたす」髪さへそりおとし弟子入りすれば命が助かるこのことに傳吉は天へものぼる心持で承知致したので、源八郎の面前ですつかりちよんまげを切り落して、雲龍寺の和尚さんのもとに弟子入りをすることになった。これを見とどけた源八郎は、「供の者。御用の途中思はぬ道草致した。急げ」と三福寺村さして行つてしまつた。

こちらは三福寺村の人々は、翌朝になつても傳吉が歸らぬので三福寺峠附近を探すと、土手にごつかりすはりこんで何やら大聲にしやべりつづけてゐる。「おい傳吉さん、何にしとるんじやい」「今和尚さんからお經をおそはつて居るのじや」と、相かはらず大聲にしやべりつづけてゐる。「やあ傳吉さんは髪をどうした」と一同がさげんで顔を見合せた。

二三 鐵 漿 蛇

鍋山の殿様豊後守顯綱は、兄三木自綱が松倉山にお城を築き、益田郡と大野郡の一部を領有し勢の盛なのを見て、大變ねたましい事に思つてゐた。たま／＼自綱は京都に上つて天子様から中將の位までいたゞいて來たので、居ても立つてもゐられん様になり、いつか自綱をなきものにして兄の領地全部を取つてやろうと、悪いことをたくらむ様になつた。

壁に耳あり、悪事は千里をはしるのたとへ、顯綱の計略がすつかり自綱のところへ知れてしまつた。自綱はすぐ弟の顯綱を亡そうと決心をして、家臣長瀬甚平土川新三郎の兩名を召して、すつかり顯綱を亡す計畧を授けて鍋山に遣すことになつた。兩名は充分の準備をととのへ、行列もいかめしく鍋山城におもむいて「松倉城主三木自綱公より密書持参した旨」を披露に及んだ。顯綱は悪人ではあつたが兩人に自分を殺す恐ろしい計略ありとは知る由もなく、密書と聞いて早速對面致した。甚平は「恐れながら密書の儀にござれば、人拂ひが願はしう存じます」と申せば、顯綱もうなづいて侍臣共に向ひ、「所用ある時には手を打つて呼ぶ程に、そち達は次の間まで控へ居れ」とうまく人拂ひをしてしまつた。

やがて甚平の差出す密書を受け取り早速開封に及び、読みかけたが中々文字が讀みにくい顯綱は文字を讀みかけて兩手を組み思案にふけつてゐる所を見すまして、甚平は不意におどりかゝり顯綱を組み伏せてしまつた。土川新三郎は大刀を抜き放ち、「自綱公よりの密書とは眞赤な偽り、汝に近づかんが爲めの手段に外ならぬ。汝自綱公の榮達をねたみひそかに之を殺さんことを企つ。悪事は千里を走る、自綱公には早くも之を感じ給ひ、吾等をして汝を殺害せしめ給ふ。覺悟あれ」只事ならぬ物音に、顯綱近侍は駈けつけ「そら浪籍者逃すな」と二人目がけて切りかゝつたが腕達者な兩人は近侍の者二三名を切り捨てたのである。この者はかなはじと逃げ出してしまつた。

門の附近に兩名の首尾や如何にと待ちかまへてゐた供の者は、夫顯綱の最後を聞き城の一角より逃げ出でし、奥方の姿をはるかに認め、之を追ひかけた。だん／＼追ひつめられた奥方は、帯を解き之を谷に投げこみ、「汝靈あらば、大蛇となれ」とさげんだ。そして間もなく追ひつめた數名の雜兵共のためにあへない最後をとげてしまつた。それから後奥方の帯が化けて生れたと云ふ鐵漿蛇、齒の黒い蛇——が鍋山の主として棲み時に之を見る人があると思はれて居る。それからすつとたつてからのことである。顯綱の一族の子孫にあたる平野清心と云ふ人が、松之木村に百姓となつて住んでゐた。或夜夢に一人の女が清心の枕元に現れ、清心をよびおこし「妾はもと鍋山城主の妻女なれど、妾の白骨久しく七夕岩のあたりに埋れはて、誰一人として供養し呉れる者もなければ成佛もなし兼ねます。何卒速にとむらひて成佛を得させ給へ」と云ふかと思ふと、姿は消え失せてしまつた。清心も始めの程は信じなかつたが、三夜も同じ夢を見たので大いに怪みながら、夢の告げにあつた七夕岩のあたりの地を掘つたところ、驚くべし、夢の告の如く白骨數片が現れた。清心も「顯綱の室が此のあたりで害せられたとは傳へ聞いてゐたが、其の亡靈が久しく成佛し得ず夢に現れて告げ知らせたものであらう」と、早速高山雲龍寺の脱山和尚を請じて顯綱夫婦の冥福を祈り、新らしく石塔を立て、供養したのである。

ところが其後雲龍寺二十七世胸海祖膽和尚は又不思議な夢を見た。それは自分たちの石塔

を日々讀經の聞ゆる地に移しくれよとの事を連夜に及んで頼んだので、和尚は奇怪なことゝは思ひ乍らも、村人と相談し境内に移して懇ろに法會を營んだ。斯くして數十年を経てから有志らが稻荷堂を修築せんと思ひ立ち、路傍にあるこの石塔を他の方に移さんと手を掛けると、從事する人夫を始め同寺の首座等は卒倒し、其夜より大熱を發し指揮した長老は遂に死亡したので、どの人もどの人も皆恐れ驚き、石塔の上に地藏尊を安置し石塔は覆を作りて、之に觸れることの出来ない様にした。近頃又々これを他に移轉することを計畫した某富豪があつたが、此の家にも不祥なことが打續いて今日では一家が離散してしまつた。

二四 甘酒祭

大名田町大字江名子の奥に、三寶荒神様が鎮座まします。境内には杉の太木が立ち込んで晝尚ほ小暗く、神威いや高き神社である。此の神社では閏年の舊十一月十八日に執行する大祭がある。之を甘酒祭と世間では言つてゐる。なせ此の大祭を甘酒祭と言ふか、それは此の大祭の日には多數の一般參詣者に、甘酒と餅とを接待する事になつてゐる所から此の名が起きたのである。何しろ多數の參詣者への接待であるから、其の準備はなかく大がかりである。祭例の前日になると、江名子の區長の家を宿として、甘酒を製する。當日は

区内五人組等區長の宅に參集し、その居宅から程遠からぬ田若しくは畑中の適當の地を選んで、四隅に竹を樹て其處に注連繩を張り廻らし幣を立て、社司及區長の指揮監督の下に豫め奉加しおきたる米、秬を用ひて製するので、製法は普通の甘酒製法と異なる處はないが四斗から製するのだから大した手數なのだ。斯くして製し終つた甘酒は飯を炊いた後の炭火を取り除き、その暖味のある所に低き台を設け、其の上に桶をおき、新らしい筵を以て蓋とするのである。翌朝この甘酒の一面に亀裂を生じ居れば其の年は必ず旱魃で、若し水が溜つてゐれば其の年は降雨が多いと言ひ傳へてゐる。餅は之も豫め奉加しおきたる米、大豆、小豆を混じて搗き上げるので、塩分などは少しも加へず、甘酒と同時に同一場所で搗く事になつてゐる。祭例の當日になると、諸役員が神社に至り、社司と共に神前に於ける祭典の諸準備をする。それから區長及び近くの區民等は、甘酒並に餅を桶に入れたるまゝ、神前に荷つて行き、それから甘酒は社の後の社地に焚火をなし大鍋にてこれを煮沸し、餅は七十五と三十五とに分して、之を百十膳の供物と稱し神前に棚を設けて供へるのである。斯くして祭典が終れば区内の青年等は、注連繩を帶とし、新らしき手桶に件の甘酒を汲みとり、餅と共に參詣の諸人に接待するのである。所が此の荒神様は古來女人の社地に入る事を甚だしく忌まれ、若し婦女子の社地に一步にてもふみ入れんか、忽ち神の力に依つて遙かの向ふに投げ飛ばされると傳へてゐる。従つて此の大した祭典の準備にも一切

婦女子の手をかりる事を許さぬ。勿論大祭の參詣者にも一人の婦女子さへまじらないのである。まじらぬ所か其の當日甘酒の接待を受くる爲めに、參詣者各自甘酒をうくる器物を用意して行く事となつてゐるが、其の器物さへ女人の手のかゝらぬ様に、女人の目にふれぬやうに持ち出す事となつてゐる。又此の器物を持ち歸つて後も一週間は屋外の人目にふれざる處に置き、後人知れず舊の場所に仕舞ひ置く作法にて、若し之を犯す時には其の器物はたちどころにこはれ、恐るべき神罰を蒙ると稱してゐる。斯くも神威の赫々たるものなれば、或時野良犬が甘酒を製する地域に迷ひ込み、勿体なくも此の甘酒の桶に放尿したるに、即座に苦悶して斃死した事があると傳へてゐる。

此の祭例當日希望者には神符を分つ事になつてゐる。此の御神符は養蠶時に蠶室に置けば不思議に鼠の害を受けぬとの事で、此の神符を受くる人も多數である。平時でも神社の境内の小石一箇を借りて蠶室内に置けば、鼠がよりつかぬと言つて、養蠶家はその時期に皆小石を借りに行き、養蠶が終れば別に小石一箇を添へて二箇となし、元の神地に返納する事となつてゐる。甘酒祭の由來は今詳かでないが、里人の口碑によれば、同村に昔加藤源十郎と言ふ人があつて、農民に適當なる雨具が無いので常に遺憾に思つた。そうして何か良い物を考案して一般の農民を益したいと苦心してゐた。處が何時か源十郎が宮村方面へ所用で出かけたことがある。その時位山の麓までやつて來ると、何處からともなく神々し

い白髪の一老翁が現はれ、源十郎に向ひ「お前は平生農民の雨具に心を砕いて居るが誠に殊勝な事である。おれが一つ其の雨具の製法を教へて進せやう」と、懇ろに田箆の製法を授けられた。之は有難いと思つてふと老翁の顔を見るが早い、忽ちかき消す如く姿は失せてしまつたので、源十郎は一時驚いたがよい事を授かつたので大いに喜んで、直ぐ様村に歸つて来て、江名子の里人に此の「バンドリ」の製法を傳授したのであつた。それから此の「バンドリ」が一般に重寶がられて用ひられる様になり、江名子は其の産地となつた。そこで其の恩澤に酬ひんと、源十郎が荒神社の境内に彼の老翁の靈を合祀し、田箆の製法を授けられた當日、即ち霜月十八日を以て毎年例祭を行ひ、甘酒を供ふるを例としたるに始つたのだらうだ。丁度其の年が閏年であつたので、閏年の舊霜月十八日を以て大祭を執り行ふこの事で、今から二十餘年前この大祭を新曆十二月十八日に行つた處が、其年は甘酒が全部腐つて了つたので、之れは神意に背ける罰であると云つて、以後復舊曆に改めたこの事である。

### 二五 神馬物語

今しも境内を見廻つた神官衛守は倒れんばかりに驚き、早速雜色を呼んで「今拙者が境内を見廻つたけれ共別に變つた所とてはなかつた。唯、怪しいと思ふのは神馬の姿の見あた

らぬことだ。夜盗でも參つて盗み去つたものでないかとも思ふが、そなたはも一度見廻りしてたしかめてもらひたい」 「それについてでございます。昨夜も私が見廻りました時神馬庫の戸が開いてゐるのに氣がついて、これは變だと中を見ましたが、別に異状はありませんでした」 「さては馬盗人の仕業にそういあるまい。とにかく見届けて来てもらひたい」雜色共は手にく提灯をふりかざしつゝ神馬庫にかけつけた。しかしふだんど何等變りはなかつた。「どうも變だな」 「衛守殿は夢でも見られたんじゃないかな」 「平生の衛守殿にも似ぬ狼狽振りだつたから、夢でもあるまい」 「はて怪体なことになつたぞ」と境内くまなく搜したけれ共、何處を見ても何等の變りはなかつた。報告をきいた衛守は「どうしても合點がゆかぬ。たしかに神馬庫の空つぽになつてゐるのを見届けてのことだのに」と、其の夜はまんじりともせず其の夜の出來事を考へつゞけたが、遂に謎は解けなかつた。話題に乏しい山狭の村里、此の出來事は誰語るとなく次から次へと傳つて、神馬の話でもちきつてゐた。その中に山々の若葉は段々と深緑に變つて行つた。そしてやがて野山を渡る風も肌には快よき秋を迎へた。宮盆地には、黄金の波がゆらりくくと打ち寄せ、日にやけた百姓の顔には笑が見え、今年の豊作が話題の中心になつてゐた。或る朝背戸に出た彌藏の妻おきくが、あはたゞしく夫を呼びたてたので、彌藏も何事ならんと飛び出して見た。彌藏は只無言で妻の指さす方を見て、「これは、怪しい」とうなる

様に云ひはなつた。それはその筈、背戸の田一面、重く頭を下げ、黄金の色に豊かな秋のみのりを見せてゐた稻穂が、無惨に食ひ荒らされてゐる。そしてあたりには馬の蹄のあとが入り亂れてゐる。此の事が隣近所の噂になつた。そして隣家佐吉の妻が「昨夜真夜中に馬のいななきらしい聲をきいた」と云ふ話ともつれ合つて「如何にも不思議なことだ。蹄のあとと馬のいななき、これはてつきり一之宮の神馬の仕業にちがひない」と、きまつてしまつた。其の夜も更けて二時頃便所へ起きた八兵衛の妻はすぐ近くで馬の嘶くのをきいた。「さては」と、考へた妻は足音をしのばせて裏口から忍び出すと、前の稻田の中に眞黒なものが動いてゐるのを認めた。じつと眸をこらすと、たしかに一頭のたくましい馬である。「昨夜彌藏の稻田を荒したのは此の馬に違ひないと、前後の考へもなく「わつ」と、大聲をあげた。今まで餘念なく稻の穂をあさり食べてゐた馬は、一聲の嘶とともに一散にかけ出し何所ともなく姿をかくしてしまつた。あくる朝、此の噂をきいて集つた百姓は、次から次へと怪しの馬の取汰沙をした。「あれだけ嚴重な警戒の中で此の亂暴を働くとは、いよくもつて神馬に相違ない。何とか急々處置をとらなければ、我々今までの苦心は水の泡となつてしまふ」 「春あの神馬の話を書いた時は、そんな事があるものかと考へてゐた私も、かうなつては神馬とより外に思へなくなつた」 「全くです。左甚五郎の作つたものは時々不思議の力を現はすと云ふから、此所の神馬もわからない」 「とにかく

く神主さんの所へ行つて相談して見やう」と、神官衛守の所へおしかけて行つた。やがて村の重だつた百姓は、衛守からの手紙によつて一之宮に集合した。一同を見わたした衛守は「春の出來事と云ひ、今の出來事と云ひ、たしかに神馬の仕業に相違ないと存じます。しかしながら數百年來、左甚五郎の作と稱せられてきた此の神馬を、打ちくだくわけにも參らず、春以來あれ程嚴重に致しておきました格子戸を開いて出入するものを。如何いたしたらよろしいでせうか。よき智慧をおかし願ひたい」と申した。評議はつゞいた。そして最後に決したのは神馬の眼を抜きとればよからうと云ふことであつた。とう／＼町から呼ばれた名工某によつて、神馬の兩眼が抜きとられたのは間もなくであつた。それから再び稻田の荒されることなく毎年平和なみのみりをつゞけた。

二六 金雞城址

地理の時間に先生に連れられて、六年生は金雞城址へ見學に行つた。一方の小高い土手の上に立つた山木先生は、「此所には誰の城があつたのですか」と、尋ねられると生徒は異口同音に「鹽屋筑前守秋貞」と答へた。先生は「秋貞は何時頃の人ですか」と問はれたが誰も手を舉げる者が無い。漸く勇君が手をあげた。そして「上杉謙信公の頃です」と答へた。先生は大喜び「さうだ、勇君の云ふ通りです。いゝかなしつかり覚えとくんです

よ」口々に生徒がしやべり出した。此の時芳夫君が立ち上つて「先生、なせ金雞城址と云ふ名が起つたのですか」と尋ねると、先生は待つてゐたと云はんばかりに「城の名の起つたわけを話そう。こゝは暑くていけない向ふの木かげへ行かう」と、云ひながら松林の中へ入つて行かれた。新緑の梢を渡るすがくしい風は、こゝろよく皆の顔をなで、通りすぎる。皆は青草の上にごつかと腰を下ろして、熱心に先生の口の開くのを待つた。しばらくすると先生は「今から三百餘年前此の城にゐて此の地方を治めてゐたのが鹽屋筑前守秋貞で、上杉謙信公の家來なのだ。今も町方のことを一名八賀町と言つてゐるのは、城下町だつたからなのだ。秋貞は古川に高野城を築き、小鳥に鹽屋城を築いて、段々北の方へ勢をのばし遂に越中に出兵して、今の飛越線笹津附近の地一帯を取つて猿倉城を築いた。そして此の金雞城には自分の妻娘を残し置き、自分は諸將と共に猿倉城にゐて尙ほ附近を攻略する機會をねらつてゐた。所が越中の秋貞に攻められた連中が、謙信公卒去の報を聞くや直に聯合して、不意に猿倉城へ攻め寄せたので、さしもの秋貞も大敗北で逃げ出してしまつた。そして僅かの家來と共に古川の高野城に向つたが、打保村まで来て一息ついてゐると、追ひかけて來た村田修理亮等が見つけた。敵は手薄、此の機を外さず討ち取れ」と、下知の聲も勇ましく數十人一度に攻めかゝつて來た。秋貞もさるもの大刀を抜き放つて數人を相手にして切り結んだが、修理亮の打ち出す鐵砲に中り、無念や再びたつ力もなく自

ら首をかき切つて死んだのだ。其の時年が六十二才だつたと云ふ。父に従つてゐた嫡子監物二男三平等も力の限り奮戦したが、頽勢を挽回することが出來ず、何處ともなく落ちのびてしまつたのだ。「先生、其れから此の城はどうなつたんですか」と一人の生徒がきいた。「そうせかなくてもよい。これからその話に移るところなんだ。此の城にゐた奥方と娘たちは越中の方に戦争が起つたとの風評を耳にして、父子の戦捷を神かけて祈つてゐた。ところで打保で漸く敵陣を逃れた一人の家來が悲報を告げに此の城へかけつけた。武士の妻女、殊に朝に起り夕に亡ぶ戦國争亂の時代のならひ、かねての覺悟とは云ひながら、あまりの事に茫然たる有様であつた。そこへ又注進があつて、かねて飛驒平定を企てゝゐた三木休庵が附近の大將と聯合して攻め寄せるとの報知があつた。かさねくの驚きと失望とに殆ど自失の体ではあつたが、流石は武士の妻、やがて決然として娘千代香を呼んで事の次第を語り「父上亡きあと吾等母子の者が生き残り、敵に捕へられ恥を千載に残さんよりは、潔く自決して父上の御あとを追ひ奉らうと思ふ。そちも今は覺悟せよ」と、云ひきかせ、遂に千代香を一刀のもとに刺し殺した。つゞいて妻は夫秋貞の特に愛玩した金雞の床飾りを始め貴重な品々、並に軍用金を二之丸の一角に深く埋め、佛間に入り見事に我と我が胸を突いて自殺してしまつた。時世とは云へまだ十六才の花の蕾で散つた千代香の一生は一しほ哀れである。其の後月日の流れるに従つて此の悲しい物語も忘れられたと金

雞城址の二の丸白つゝちの藪の下深く、おびたゝしい軍用金と金雞とが埋められてゐて、正月元旦の朝まだき此の金雞が東天紅と告げる。そうしてその東天紅の聲を聞いた者は、此の上もない幸を得るとの事だけが傳へられた。

その昔町方の太郎助が雞聲を聞いてから幸運になつて、土藏二棟建てたとか、長吉のさんく拍子に出世したのも、全くその聲を聞いてからだとか色々な話が傳へられてゐる。最近かうした話は少しも聞かないが、こんなわけで誰言ふとなくこの城址を「金雞城址く」と呼ぶやうになつたのです。長い先生のお話が終つた。誰もく「おれこそはその白つゝちの藪を見つて、うまく寶にありつきたいものだ」と手に汗してじつと聞いてゐた。

二七 玄興寺の狐

盆もすんで秋風が吹き始め心持よく晴れた日、玄興寺の和尚さんは火葬場へ御經を讀みに行かれた。小絲坂を上つて道から三四十間入つた所に松が四五本生えてゐる。こゝが玄興寺焼場である。小僧をつれた和尚さんは萬靈塔と刻まれた墓石に香華を捧げ懇な供養をせられた。和尚「南無阿彌陀佛くくくくく」小僧「お師匠様これは誰の墓です」和尚「これはこの焼場で煙になつた人達みんなの墓だ。盆には忙しくて來られなかつたので今日お勤をしたのだ。お前もよく回向してやれ」小僧「南無阿彌陀佛くくくくく」

和尚「ああいゝ天氣だなあ。花でも折りながら松倉の麓の方を廻つて歸らう」二人は秋の



草花の咲き亂れた山道をゆるく歩いて行つた。大分疲れたので道端の石に腰をおろして休んでゐると向ふの藪がざわ／＼と動く。「あれ可愛いゝ小犬が」と小僧は走つて行つて捕へて來た。和尚さんは「こりやどうも尾が長い。子狐だぞ。家へつれ歸つて飼つて置かう。中々可愛いゝ顔をしてゐるわい」寺に歸つた和尚さんは早速古箱に竹をうちつけて中に藁を入れ子狐を飼ふことにした。家の者も近所の人も珍らしがつて食物を與へるのでだん／＼太つていつた。次第に狎れて一月もたつと首に細繩をつけて日當りのよい所につないで置けるやうになつた。秋の收穫のすんだ頃、別院の法被を着た男が寺を訪れた。和尚さんが出て來意を聞くと。「今夜この下の六兵衛方へ御輪番様がお出になります。御承知の通り六兵衛は別院の直壇家ですから特に頼まれて夜中ながら御自身御勤めをなさいます。付ては御寺で先頃から可愛いゝ子狐を飼つて居られるといふことを聞かれ、是非見せてもらひたいとの事です。御聞届下されば勤めのすんでから一寸御邪魔したいと申されますが」「はいく承知致しました。お待ち申して居ります」と寺では急に座敷を取りかたづけ色々な御馳走をして輪番の來られるのを待つてゐた。夜が大分更けた頃輪番一行は別院の提灯を先頭に寺へ入られた。色々な料理が並べられ四方山話のあつた後、和尚が子狐をお目にかけると輪番は子狐を箱から出して膝にのせ、行燈を引きよせつく／＼と眺

め「これはく。可愛い、子狐ですなあ、よく太つて」と頭をなで頬すりなどして居られる。子狐は目を細くしておどなく抱かれてゐる。

和尚「御輪番様はとても子狐が御氣に入つたときみへますなあ」輪番「私は狐ばかりではありません。生あるものは皆可愛いのです。殊にこの子狐が目を細くして私に抱かれてゐる所などは全く可愛い、ではありませんか。母親から離れたこの子狐も私の膝の上で安心したやうにはや眠りかけましたよ」と言ひながら傍の御馳走を取つて子狐の口へ入れてやられた。輪番「時に和尚さん。今夜参つたのは他にも少し御願したい事があるからです。これは内密の事です。だから人を遠ざけて下さいませんか」和尚「皆の者私が呼ぶまで台所へ行つて来てくれ」輪番「どうも此頃門末の寺の中で困つた事が出来ましてなあ。それに付いて御相談を願ひたいのです。一寸書類を供の者に持たせて来ましたから、御面倒ですが文箱を取つて来て下さいませんか」和尚が入口へ行つて見ると供の者は居らない。外へ出て呼んでみたが返事がない。變だと思つて「御輪番様。御供の方が居られませんか」と障子をあけて入ると輪番様も居られない。便所かと呼んでみたがさうでもない。ふと氣がつくと庭に向つた障子に大きな穴があいてゐる。よくよく見ると毛らしいものが穴のまはりについてゐる。白い座布団に足跡がある。「やられたつ。どうく親狐めに取られてしまつた。次の日西一色の定助さんが寺へ来てその話を聞いて「實は昨日隣の市藏さんと

大雄寺へ詣つた歸りにこゝを通ると、一匹の狐が門の中へ入りました。それが市藏さんには法被を着た男に見えたと言ひましたよ。私はその時大雄寺へ来ていらつしやる尊いお上人様に卒塔婆を書いてもらつて持つてゐたので、その爲私の目には化狐の正体が見えたのだらうと思ひます」と言つた。

## 二八 兩面宿儺

千光寺へ參詣する人はきつと土藏の中に立つてゐる、六尺あまりの兩面宿儺を見る事を忘れない。宿儺は今から千五六百年前飛驒の國に住んでゐた怪盜である。何しろ身の丈が六尺あまり、顔が二つあり、手が四本、足が四本と云ふ、まるで化物の様な人間で、力も非常に強く四十人五十人を相手にする事が出来た。手下のものを澤山従へて晝は出羽ヶ平の岩窟の中に住み、夜になるとそろく岩窟から人里の方へ出てくる。四本の手にはそれく弓矢刀をひつさげて、お金や財産のありそうな家へ押入り財寶を奪ひ取つては、家來に岩窟へ運ばせるのであつた。宿儺の暴威はあたりを壓して、宿儺と云へば皆恐れ慄き、ごこの家でも子供が泣き出すと「宿儺が来るぞ」とか「そんなに泣くと、宿儺にやるぞ」と云へば子供が泣きやんだといふことである。四本の足で走ると、まるで馬の走る様に早かつたので、しまひには今の高山町のへんまであらしに出かけて来るやうになつた。國造といつて



飛驒國を天子様からああづかりしてゐる役人の所へ「宿儺を早く退治して下さい」「宿儺の亂暴はだん／＼ひどくなつて参りました。今の中に何とかして下さい」と云ふ様な願出が毎日つゞいた。國造が退治やうと思つても中々かなひそうにもないので、手がつけられなかつた。しまひには國造を見くびつて、思ひ切つた暴れ方をする様になつたので、國造もどう／＼我慢が出来なくなつて、天子様のところへ早く退治して下さいとお願ひ申しました。時の帝仁徳天皇も非常に御心配になつて、討手の大將を誰にきめ様かとお考へになつた末神功皇后様に従つて三韓まで征伐に行つた、難波根子武振熊ならよからうと早速武振熊を征伐におさし向けになつた。この知らせを聞いた宿儺は「都の兵士どもは恐るゝに足らん如何に武振熊は勇將でもこの宿儺にはかなふまい。飛驒まで攻めに來てもらふはお氣の毒一つ美濃の國まで出張つてお相手しやう」と家來をたくさん引きつれて、美濃の高澤山と云ふ所まで出かけて、武振熊の攻めて來るのを待つてゐた。高澤山の近くまで到着した武振熊が、宿儺の軍備をしらべて見ると官軍を見くびつてゐる爲か、油斷してすぎだらけの陣である。早速武振熊は「宿儺の陣にはすぎが多い。勝を制するのは今だ。進め／＼」と自ら陣頭に立つてはげしく攻めかゝり、宿儺の軍兵を蹴散らしてしまつた。押入強盜には得意な家來共も、戦にはから元氣だけで到底相手になれず、散々にけちらされてしまつた。宿儺も家來共の意氣地のないのを大變立腹して見たものゝ、自分一人では戦争

も出來ず、出羽ヶ平の岩窟へ逃げ歸つた。それから武振熊は中山七里の中津原に、應神天皇をお祀りした八幡宮を立て、武運長久を祈つた。ところがお宮の中から白い鳩が飛び出して、北の方へ北の方へと飛んで行つた。これを見た武振熊は「これは早く北方へ進んで宿儺を平げよと八幡様のお告げであらう。者共元氣を出して進め」と、飛んで行く白い鳩のあとを見失はない様に／＼進軍し、萩原町の邊まで來た。その時鳩の姿が見えなくなつた。武振熊は鳩の姿を見失つた附近に、又應神天皇をお祀りし長久を祈願しつゝ更に前進をつゞけてどう／＼出羽ヶ平の岩窟に迫つた。高澤山で散々な目にあつた家來どもは武振熊の軍が攻め寄せたと聞いて宿儺の命令に従はず、思ひ／＼に逃げ出してしまつた。岩窟にたゞ一人たてこもつた宿儺は、大岩で入口を閉ざし防ぎ戦つたが、多勢に無勢どう／＼追ひつめられてしまつた。武振熊は宿儺をしばらくあげ「お前は力もつよく身体もすぐれて大きい。天子様に背いた爲めかうして攻めては來たものゝ、ごうじや都に上つて天子様の家來となつて忠義をたて、見ては。その心があれば都へ召し連れてやろうが」とささしたが、さしも兇暴な宿儺も、かく捕へらるゝに至つたのは天罰と觀念したものか、「貴殿の情深いお言葉は身にしみる様にうれしい。しかしながら長い間良民を苦しめ、上天子様に重ね／＼の御心配をおかけ申した其の罪は決して軽くはない。やはり生れた土地で殺して頂きませう。それが何よりの罪亡しにもなるから」と答へて降参しないで、どう／＼

首を切られてしまった。

二九 圓空法師

ある年千光寺の和尚俊乗を、美濃の竹鼻町からはるく訪ねて来た僧があつた。その名は圓空と云つて大變面白い僧であつた。或時俊乗が「私がまだ若かつた頃、村のものが貴殿は毎日く八丁坂を上り下りするのは中々苦しいだろう、坂を登る時は牛や馬の様にはつて上ると苦しくないかと教へたので、私もそのとほりにして登りましたが、村の者の云ふ様には樂でなく、坂を登るにはどんなにして登つても苦しいものだと思ひました」と語つた。すると圓空は「私も美濃の山寺にゐましたとき、寺へ上る山道につちの花が澤山咲いてゐましてな、村の者が私にあのつちの背中をむけてあぶると大變暖いものだから一度試みよと教へましたので、その通りやつて見ましたところ、ほんとうに暖でしたからこれはよいことを習つたと、次に試みましたら今度も暖でした。すつかり喜んである男に話しますと、それはつちの爲に暖いのではなくて、木の間から春日を背中にうけるから暖いのだと散々に笑はれましたよ」と眞面目に答へた。俊乗が「あなたは知識の高いお坊さんの様ですが、どうしてこんな山又山の千光寺などへおいでになつたのですか」と聞くと、圓空は「私は地上のすべての醜い争ひをさけて世渡りをしたいと考へましてな、富士山にも

加賀の白山に籠つたことがあります。飛驒は都を遠くはなれいよはしい事件もなく、心ゆくまで樂しく暮せると考へてやつて参りましたところ、たま／＼貴殿のうわさを承りどう／＼お訪ねしたのです」と答へた。それからたゞ一挺の鉈と、二間許りの梯子を持つて毎日く山内のあちらこちらを歩き廻つて、立木をそのまゝに器用な手つきで丁々と大膽に佛像を刻んで許りゐた。そして食物も煮たり焼いたりしたものは食べず生のまゝで食べてゐたと云ふ。其の頃大丹生ヶ池といつて乗鞍岳の頂上近くに、それはそれは物すごい大池があつた。青黒い水を漫々と湛へて深さの程も分らず、其上池の真中をこちらの岸から向ふの岸まで黒いものが通つてゐて、そこだけ水の色がちがつてゐるのであつた。大昔から此の池には大蛇の主がゐて、或る者は其の胴体を水の上に出してゐるのを見たこと云ひ、或る者は紫の煙が水中から立つのを見たこと云ふ噂が絶へなかつた。たまに雨乞などに來る人があつて五六人でその池のふちに立つてゐてもぞく／＼と寒くなるやうな恐ろしい池であつた。或る時元氣な若者たちが十二三人登山して、此の池のふちに立つてわい／＼大騒ぎしてゐると、見るまにすん／＼水が増して若者たちの足が水にひたり始めたので一同はおそろしくなつて逃げかへつた。雨乞ひに行く人たちは二升樽、五升樽などに酒をつめて登山し、大丹ヶ池の中へどんぶりど投げこむと、酒の重みで樽は池の中へぶく／＼沈んで行つてしまふ。ひた／＼と黒味をおんだ池水が足元までた／＼えてゐ

るふちに立つて、おののく心をひきしめ、ものゝ三十分もまつてゐると、大ていはさつき  
 の酒樽が空になつてぼつかり浮んで来る。すると雨乞の人たちは「あゝ主が私共の願ひを  
 きゝとゞけて下さつた」と別に用意した空樽に池水を汲み入れて持ち帰り、自分の村の川  
 へ注ぎ入れると、不思議不思議一天俄にかき曇つて大夕立になるのであつた。時とする  
 酒樽が浮き上つて來ぬことがある。雨乞の人たちはそんな時には非常に心配して、又出直  
 して酒樽を投げこむのであつた。或る年の夏大丹生ヶ池の水が涸れて大變少なくなつた事  
 があつたので、麓の村人たちは「今まで何百年もついぞ水の減つたことさへなかつたのに  
 こんなに水が涸れるとは何か不吉なことが起る前兆だ。今の中に何とかしなければならぬ  
 がどうしたものだらうか」と大騒ぎになつた。するとこれを聞いた隣村の男が「此の頃千  
 光寺へ圓空と云ふ不思議なお坊さんが來てゐるそうだが、あのお方に一つ頼んで見たら如  
 何です」と教へてくれた。村の人々は大喜びで早速千光寺へ來て事情を話し圓空に頼むと  
 圓空はすぐ承知をして、村の人々と一緒に麓の村迄出かけた。そして「若し萬一の事があ  
 つてはいけませんから」と人々の注意するのも聞かず、只一人ごん／＼乗鞍の大丹生ヶ池  
 さして登つて行つた。頂上近くまで來た圓空は、佛にお祈りしながら例の鉦で一千体の佛  
 像を刻み上げ、大丹生ヶ池の底深く沈めてしまつた。二日たち三日たち七日たつても圓空  
 は下りて來ない。村の人々は大變心配し「大てい主にやられたのであらう」と噂し合つて

ゐると、十日目に漸く山から下りて來た。そして「千体の佛像を池に沈めたから大丈夫だ  
 ろう」と云つて、ふいと千光寺へ歸つてしまつた。村の人たちはすぐ山へ登つて大丹生ヶ  
 池へ來て見ると、此の間迄水の涸れてゐた池が、もとの様に漫々たる水を湛へてゐるでは  
 ないか。それから千古の謎を秘めた魔の池は何ごとも起らなくなつたので、だん／＼登山  
 者が増して來た。圓空は其の後しばらく千光寺にゐて、鉦で佛像を刻んでゐたが「金森様  
 ももう長くはあるまい。大變城氣がうすい」と云つたのが最後、風の様に行方をくらまし  
 てしまつた。今でも千光寺に仁王の像をはじめ、あまたの鉦ばつりの佛像が残り圓空の奇  
 行を物語つてゐる。

### 三〇 夜泣の墓

安永年代の騒動であるから安永の騒動、又時の郡代大原の名を冠して大原騒動とも言つて  
 ゐるこの一揆は、飛騨としては随分大きな騒動であつた。安永三年十二月五日には此の騒  
 動に對する、徒黨強訴の判決があつて、夫々處刑されたが、其の數は夥しいものであつた。  
 特に此の一揆の中心地が一の宮であり、其の中心の指揮者として活躍したのは、學問、識  
 見人にすぐれ、膽力のすはつた一の宮の神主森伊勢、山下和泉の兩人であつた。

勿論、處刑に當つては此の兩人は最重刑に處せられたのである。一揆を起す時はこんな目

にあはねばならぬとの見せしめとは言ひながら、多くの人達の爲めに身を捨て、働いた二人の上に、聞くだにも痛ましい磔の刑が申渡された。かねて覺悟とは言へ、兩人の胸にはたまらぬ思があつた。せめて目的を達しての上ならばまだしも、ほんとうに死ぬにも死なれぬ切ない思である。遂に磔の當日は來た。悲痛な此の日を天も亦痛むか、三墓嵐は冬枯の山野を渡つて、さながら慟哭するかと思はしめた。桐生川原の刑場には、今しも十字の柱に目かくしされた兩人の哀れな姿、見るに堪へない今日の處刑。而し世の人々の爲めに盡しながら、痛ましい最期をされるお二人の臨終を送らすにはゐられない。三々五々集つた人々は、何時しか刑場の周圍に人垣を造つた。愈々時は迫つた。鎗を持つた役人は柱の下に二人づゝ相ひかつて控へた。上役の相圖に依つて鎗の穂先に水をうつ。見物の人々の胸は一樣に波立つた。遂に脇腹目がけて鎗先の向けらるゝや、如何な者も見るに堪へかねてこぶしを以て涙をおさへ、氣弱き者は打伏して顔を上げ得ぬさへ多かつた。

斯くて其の首は、打首になつた人々と共に刑場にさらされたのである。此の悲しい一日を神前に燈明を點じ、涙ながらに夫の平安な最期を祈願した二人の神主の妻女は、その夜の更くるを待つて桐生川原の刑場に向つたのである。むせぶが如き宮川のせゝらぎ、血なまぐさい風にそよぐ枯すゝきの中の首台を、星明りですかし見れば、こはまさしく我が夫の首。さすが氣丈の妻女達なれど、まざくゝと目の前に色青ざめ、血の黒々とたれた首級を

見ては、今更氣も轉倒せんばかり、首級にとりついてわつと泣き沈んだ。

漸くに胸なでおろし、兼ねて用意の白布に各々首級を包みてしつかと抱き、かひなくしく着物の裾をはし折つて、一の宮さして走つたのであつた。千島・石浦とすぎてやがて松橋のたもとに着いた。之より道を右にとり山下道を越えて大幢寺の門前近くに至れば、急に氣がゆるみ疲の出た二人はそこにどつと腰をおろし、夜もすがら首級を抱いて泣き悲しんだ。恨を呑んでなくなつた夫の靈にせめて讀經の聲の聞ゆる所にと、この寺に近き地を選び、二人の首級と傳家の名刀とを埋め、墓じるしとして二本の松を植えた。其の後も一生二人は墓前に來ては、恨み盡きせぬ夫をなぐさめてやまなかつた。その松は今では亭々とした巨木になつてゐる。近年に至るまで夜なく、松の嵐にまじつて、女の泣き聲がすると村人は云つてゐた。

### 三一 ニツ葉の栗

清見村牧ヶ洞に源次と云ふ大變心掛の悪い男が住んでゐた。人の物も自分のものと心得てゐるので、人の山から薪を取つてくる、人の山の木を切る、そんな事は何の雜作もないことであつた。村の人々は源次を相手にしない。唯一人として相手になつてくれる者もない有様である。かうなればなる程源次の心はねじけてゆく許りであつた。或日のことである。

今日も源次は隣家與平次の持山に入り與平次が冬の間根氣に切つた薪をぬすみ出し之を背負つて山を下りかけた。ところが急に山風がさーつと吹いて来て、源次のかぶつてゐた頭巾を吹き飛ばしてしまつた。これは大變と源次は薪を背負つたまゝ風の爲に吹きとばされてゆく頭巾のあとを追つかけたが、五六間追つかける中にとう／＼見失つてしまつた。

源次は不思議でならないので、附近を一生懸命さがしたけれども、見あたらないのでとう／＼家に歸つて来た。こんなことがあつてから幾日か後のこと、越中の立山に登山してゐた同じ村の男が歸村して源次の家を訪ねた。そうして「時に源次さん私が今度立山に登山して各所の地獄を巡り歩く中、世にも不思議な事に出會つた。丁度焦熱地獄の近くまで來ると、向ふから薪を背負つて來る男がある。よく見るとそれは源次さんに違ひない。おい源次さんじやないかと言葉をかけ様としたとたんに、源次さんは薪を背負つたまゝその焦熱地獄の中へおちかけた。あゝあぶないとかげよつてつかまへやうとしたがとう／＼源次さんは真さかさまにその地獄の中へ落ちてしまつた。其の時手に残つたのは頭巾だけだつたが、源次さんお前はここの頭巾に見覚えはないか」と言つて頭巾を取り出した。先程から腕を組んでだまつて聞いてゐた源次が、ふと顔を上げて男の差出した頭巾を見たとき、其の顔色はさつと變つた。此の間自分が山で風の爲めに見失つた頭巾ではないか。それから毎日／＼氣にしてゐた頭巾ではないか。頭巾が突然消えて見えなくなる……おれが薪を背

負つたまゝ焦熱地獄に落ちる……おれが山で失つた筈の頭巾を立山から持つて來て呉れる今まで善惡正邪については露ほども考へたことのない源次の胸に、あるものがむく／＼と雲の様に湧き起つてくるのを自分から知ることが出來た。誰一人見て居る人もない山の出來事がこうして二十數里離れた立山であり／＼と判るとは、何と云ふ恐ろしい事であらうか。今までに己の犯した數多の罪も皆かうして判つてゐるに違ひない。おれは何と云ふあさましい心で居たろうか。源次の頭の中を過去に犯した色々の罪惡が、走馬燈の様に往來した。あまりの恐ろしさに、しばらくは茫然と自失してゐたが、ふと氣がついた彼は「申すも恥しいことながらこれはたしかに私の頭巾です。今まで事の善惡については何一つ考へたことのない私ですが、只今始めて神様佛様のお裁きの恐ろしいことに氣がつかしました。私の頭巾を失つた顛末はかうです。どうかお聞き下さい」と一部始終を語り前非を深く悔いたのであつた。それから生れ變つた様な正直な人間になつて、神様や佛様を信ずることが深くなつた。自分の家のうしろの山に本願寺遙拜所を作り、毎日／＼雨の日も風の日も此所からはるかに京都の本願寺を遙拜し、佛に對して信仰を怠らなかつた。ところが或る日源次は氣ちがひの様になつて「御本山が火事じや、御本山が火事じや」と叫びながら手桶に水をひつさげて遙拜所へとかけつけ、その水をぶつかけて又汲んで來てはぶつかけてゐた。近所の人達はこれを見て「可愛そうに源次さんは氣がちがつたらしい」と噂し合つ

てゐた。何日かの後村人たちは源次さんが氣ちがひのやうに水をぶつかけてゐたその日、京都の御本山が焼失したと云ふ通知を受けた。御本山から源次さんの所へ「其の方は本山火災の節は遠方にもかゝはらず即刻かけつけ、消火に盡力せし段まことに奇特の事あつくほめてつかわす」といふ意味の書面が到着したのも、それから間もないことであつた。源次は極端から極端への波瀾ある一生を終へて、今しも此の世を去らうとして、自分の前非を心からざんげし「佛の御前に行けるも行けぬもすべては佛様のお定め下さること、若し家の前にある栗の木の西の枝に二つ葉がさいたら、わしが佛様に救はれて極樂に參つた印である」と遺言して此の世を去つた。あくる年の春、家の者も村の人々も大なる興味を以て栗の芽の出るのを待つた。出來た／＼二つ葉が。西に向つた枝には源次の遺言通り二つ葉が出來たのである。源次の住つたといふ跡には今尚ほ二つ葉の栗の大木と、彼の遙拜所のおとこが残つてゐて、源次の物語りに一入の興味を添へてゐる。

三二 月出宗監

丹生川村白井の土豪に、月出宗監なるものがあつた。月出山の下に邸を構へて、爐には金の茶釜をかけ、席には錦繡を列ねて、倨傲尊大の日を送つて居た。ところが邸上に巨岩があつて、落下しそうになつてゐて落下しない。若し落下するならば、宗監の邸は木葉微塵

になるべき状態にあつた。宗監は芋柄を以て之を支へて「おれの居る限りはおれの威力によつて、此の石が落ちるやうなことはない」と豪語してゐた。其の頃根方に大家久次なるものがあつて、一人の美しい娘を持つてゐた。兩親は蝶よ花よと可愛いがつて育てゝゐると、月出宗監からお嫁さんにはいとお申込んで來たので、大家久次がこれを斷ると、宗監は立腹のあまり機を見てとう／＼娘をさらつて行つた。大家家では再三返してもらひたいと交渉しわけれども、宗監は言を左右にして返さないで、久次は大變に立腹し、一日宗監の通るのを待ち受けて首尾よくこれを殺した。これを見て驚いた従者は、急をつけに家へ走り歸へると、これは又どうした事か、憐れにも宗監の邸は巨岩が落下して微塵になつてゐたと云ふ。

三三 狼退治

其の昔、大野郡宮村山下に彦助とて樵を業とするものがあつた。彦助は多く他國に行つて働き、家には妻はち女よねが留守をしてゐた。彦助の母はよると言つて、年は已に七十三であつたが腰もまがらず眼もあかるく、其の丈夫な事は驚くばかりであつた。ある晩の事夜中に孫を抱いて小便に行かうとした。所が山里の事とて、何處からか一匹の狼が眼をらん／＼光らして、飛び來たつて今にもよりと子供を一かみにしやうとした。よりは一時

は喫驚して之はと思つたが、大事のくゝの孫を喰はせてなるものかと傍に積んであつた薪を手に取るが早いか、びゆうくゝと打ちふつて恐ろしい狼の牙を防いでゐた。狼は何この老ぼれがと言はんばかりに、猛りに猛つてうなつた。よりは茲が大事とびゆうくゝ薪を打ちふつた。此のたゞならぬ音に眼をさましたはちは、早速よねを呼び起し、之は大變と、薪のもえさしをひつさげ、よねは鉈を持つて外へ飛び出し、よりに代つて狼に向つた。狼は愈々怒つて遂にすきをねらつてはちを噬まうとした。よねは是は大變と鉈をなげ捨て、狼と引組んで遂に之をねぢ伏せ、両手で其の喉を押へつけた。はちは其のひまに鉈を拾ひ狼の頭に一撃を加へたので、さしもの狼も遂に斃れて、老母と幼兒とを救ふ事が出来たのであつた。女の手で狼を退治て、老母と幼兒との危難を救つたと言ふ話は、村人から村人へ、忽ちの間に近くの町村に傳はり、遂には官廳にまで達し、時の郡代大井帶刀は其の孝と勇とに感じ、事をこまかに取調べて幕府に申し上げた處幕府でも非常に感心されて、養老米二口をよりに、白銀若干をはちとよねとに賜つた。はちは年四十餘よねは年二十、狼を殺したのは天保四年正月十二日の事であつたと傳へてゐる。

### 三四 怪力小太郎

今は昔益田郡萩原町宮田の藤ヶ森観音堂に、雲慶の作と云ひ傳へられて居る見事な仁王様

の像があつた。ところが宮田の或いたすら男が「名高い雲慶の作ならば魂が入つて居るにちがひない一つ試して見よう」と考へ「汝靈あらば川上に流れよ」と云つて、益田川の流に投げこんだ。ところが不思議く仁王の木像は、川の流にさからひ川上に向つて流れ出した。我を忘れてばんやりしてゐるいたすら男を後にして、木像はどんくゝ流れ上つてさうく小坂町観音堂下の淵まで来て、ぼつかり浮んだまゝ動かなくなつてしまつた。ふと不思議な夢を見た小太郎はぼつと目をさました。あまりの不思議さに堪えない彼は床の上につき直つて、今見た不思議な夢の事をそれから考へつゞけた。「そんな馬鹿なことがあるものか」と、ごろり床の中へもぐりこんでしまつた。小太郎は小坂町の百姓である。小太郎が晝の疲れでぐつすり寝こんでゐると、枕もこで、しきりに「小太郎小太郎」と呼ぶ者がある。ふと目をあけて見ると、見るも恐ろしい仁王様が小太郎の枕もとに仁王立ちになつて、「これ小太郎、汝善心あるならば明朝観音堂下の淵に來り吾を救へ大力を授けつかはさう」と云ふかと思ふと、ふき消す様に姿が見えなくなつた。一夜まんじりともせず色々考へた小太郎は、夜が明けけるのを待ちかねて、夢に聞いた小坂観音の下の淵へおそるく下つて行つた。小太郎さんの目に入つたものは見事な仁王様の尊像で、しかも二躰淵にぼつかりと浮かんでゐる。小太郎は大變喜んで早速取りあげて運ばうとした所七尺あまりの大木像が軽々と持つことができた。小太郎さんは二躰とも観音

堂へ運び、近所の人々にもこの事を語り、お坊さんを招いて手あつい供養をした。或る日山畑で仕事をしてゐた小太郎は、畑の中にある大石を邪魔に思ひ、此の頃枕邊に立つた仁王は大力を興へると云つたが果して大力が授かつたかと、試にこれを押して見たところ巨岩が難なく動いたので、腰をぬかささんばかりに驚いた。小太郎は其の巨岩を軽々と持ちあげて、道のところまでほうり出してしまつた。今でも小太郎岩といふ大岩がのこつてゐる。ところがこの頃久々野村に庄助と云ふ怪力の百姓があつた。庄助の大力なことは近所の村々へも語りつたへられて、誰一人知らぬ者はなかつた。庄助は小坂町に小太郎といふ大力の男があらはれたと聞いて、早速力くらべに出かけることにした。さしわたし五寸もあらうと云ふ太い鐵の棒を杖にして、ごしん／＼と小太郎の家へやつて來た。小太郎の母が勝手元でお晝の仕度をしてゐると、表の方でごしん／＼と音がして家がぐらく／＼と動いたので、何事かと表へ飛び出して見ると、大金棒をひつさげていかにも強そうな男がつつ立つてゐる。母は驚きながら「これはごなた様で御座いますか」と尋ねると、「私は久々野村の庄助と云ふ百姓ですが、おうらの小太郎さんが大變大力だと聞いてお手なみ拜見に參上いたしました。小太郎さんは御在宅でせうか」と云つた。母は「それは／＼よくお出かけ下さいました。伴小太郎は只今山へ薪を取りに出て留守にしてゐますが、もう間もなくお晝にもなることですから、おつつけ歸りませう。しばらくお茶でも召上つて待

つて居て下さい」と申しした。庄助は母から進められた手製の番茶を飲んでゐると、山の様に薪を背負つた小太郎が歸つて來た。入口に立て、ある太い／＼鐵の棒を見つけた小太郎は早くも「誰か力くらべに來てゐるな」と考へた。母から評判の力持久々野の庄助が力くらべに來たと聞いて小太郎は喜んだ。「家の中で力を見ていただくことは出来ませんから外で見ていただきませう」と庄助と外へ出た小太郎は「家には手頃なたすきがありませんから、一寸用意して參りませう」と云つて、ごん／＼向ふへ走つて行く。そして竹箴へ飛びこんで、長さ十間もあらうといふ大竹をぼつきり、小枝でも折る様にへし折つて持つて來た。「まことにおはづかしい次第ですが、別にたすきとてありませんので、どうぞこれで我慢して下さい」と一本は庄助の前に出し、一本は自らこれをくる／＼つとねちてすぐたすきにしてしまつた。そして「これはほんの座輿でございます」と云ひながら、庄助の持つて來た鐵棒を軽々とり、二つに折り一緒にねちて繩にしてしまつた。庄助もこれを見てこれはごこまで力を持つてゐるかわからぬと、ほう／＼の体でにげ歸つた。卑怯にも庄助が逃げかへつたので、小太郎はその後こちから力くらべに久々野へ出かけて行つた。あちらでもこちらでも百姓たちは忙しそうに田を耕してゐる。庄助の家を尋ねると田を耕しに出かけて居るとの事に、教へられた田甫へ來て見ると、庄助は汗をながして馬を相手に耕してゐる。小太郎さんは小道から「あゝ庄助さん、此の間はあなたのお力を拜見出來



なかつたから、今日はお手なみを拜見に出かけて参りました」と呼びかけると、庄助は仕事の手をやすめて「其の節はごうも失禮いたしました。あなたの大力にはとてもかなはないと思ひましたので、卑怯にも逃げかへりました。只今は仕事の最中ですから、十分私の力を見ていただくことは出来ませんので残念ですが」と云ひながら、馬の鼻竿を持つて馬もろごもつりあげて、小太郎の目の前へつき出して見せた。これを見た小太郎は「上には上があるもの庄助の大力は底が知れぬとびつくりして、あとをも見ずにげ歸つてしまった。久々野には庄助が持つたといふ二間四方もある庄助岩といふ岩があり、宮の往還寺には庄助が毎日使つてゐたといふ重さ二貫五百匁もある大火箸や、大鳶口が残つてゐて、庄助の大力を今も尙はものがたつてゐる。」

### 三五 鹿の湯

「叔父さん。だれと一しよなの」不意の呼び聲に驚いてふり向いた叔父は、顔一ぱいに笑をたゝへて「おう、登美子か。お前こそ誰と来たのか」「わたし、お母さんと」「そうか。おれは一人ぼつちで退屈してゐた所だ。それは有難い、よいお連が出来た」と、自分の室をかたつけて、私共の座敷へ引越してしまひなされた。「はい、今日は」「叔父さんよくいらつしやいました。全く話合もせずによく一しよになれました。それはそうと、店が

大へんお忙しいと聞いてゐましたのに、叔父さんお湯なんぞへよく出かけられましたな」「いや、實はとても出かけられないのだけれど、此の頃たむしが出来て、色々あせつて見たがどんと駄目なので、どうく此の湯の御厄介と言ふわけさ」「左様で御座いますか。内でも登美子がとてもしつ深う御座いまして、蚊の口に膿を持つてどうにもなほり切りませんので、どうくこゝまでやつて参りました」「こゝまで来れば、もう大丈夫と言ふものだ」「登美子、それでは一つ叔父さんとお湯に入つて来ようか」「はい」と、手拭をさげて出かけた。お湯から上つて暫く話してゐたが、「めつたに出かけられないから、外へ出てちと遊ぼう」「ほんとうにそうですか。それでは丘の上にも登りませうか」三人は宿の直ぐそばにあるつゞじヶ丘へ登つた。丘の上には大きな松が三本と栗の木が二本ばかりそびえて、しきりと青葉のかげに蟬が鳴いてゐる。草むらにはスイーチョツと鳴く虫の音が聞かれる。松森平から谷を越えて渡る風は全くよい心地だ。

「叔父さん、こんな所に大きなお墓がありますな」「うん、之か。之はお墓ではないよ。此の鹿の湯の発見された記念碑だよ」「あら、そうですか。何だか大へん字を刻んであります、何か珍らしいお話でも書いてあるのですか」「うん、さうだ待てよ」と、叔父は石碑の前に立つて暫く見入つてゐられた。「ほゝ、面白い。これから鹿の湯の起りを一席やりませう。登美ちゃんも、お母さんも一つ聞いて下さい」と叔父は得意の話を始め

られた。「あゝと、何時の頃かはつきりしないがその昔だ。此の上野に與三左衛門といふお爺さんがあつた。とても親切ものゝよいお爺さんだつた。與三左衛門は今日も大根島の手入れをせつせとやつてゐたが、仕事も一きりついたので鍬をかついで家へ歸りかけた。すみきつた秋空、丁度今日の様な日であつたらう。汗のにじんだ顔をそよ風に吹かれてよい心持でやつて來ると、ふと行先に當つて何物かづこんど立つてゐるので、あつと思つてよく／＼目をこめて見れば、角の様子から鹿らしい。お爺さんは「何だ、鹿の奴びつくりさせやがつた、よしこちらも驚かしてやらう」と、鍬をふり上げて「どつ／＼」とどなつて見たが、鹿は逃げそうにもない。之は變だな。何こそしてゐるのかと怪しんでよく／＼見ると、がけから出る水たまりの中に、傷をした脚を侵してゐるのであつた。元より氣のやさしい與三左衛門は、「はゝう鹿の奴め何かにやられたと見えるな。ふふん、水に侵してゐると傷口がらくになると見える。うん、よし／＼」と與三左衛門はそのまま、家へ歸つてしまつた。お爺さんは家へ歸つたものの鹿の事が氣にかゝるので、夕方こつそり來てみると、まだ鹿は先の通りにたゞすんでゐる。お爺さんは可愛そうになつて家へ一走りにもどり、御飯やらおかずの残りを持つて來てやると、鹿は人なつっこい様な目をして、まるで長く飼ひ馴らされた牛馬の様に、お爺さんに親しむのであつた。

お爺さんは仕事のひまに又次の日も來て見た。相かはらず鹿はゐる。今日も食物を與へて

やつた次の日も、次の日もやがて十日ばかりの間は親切に世話してゐると、漸く脚の疵が癒えた鹿は、一日お爺さんの前に厚く御禮をでも云ふ様なそぶりして、ふりかへり／＼何處ともなく行つてしまつたそうだ。「叔父さん。獸でも親切がよく分ると見えますな」

「うん、全くだ。馬鹿にはならないよ」

「ところが丁度その頃與三左衛門は、くさを患つてとんど困りぬいてゐた。日本一といふ膏藥を買つて來てつけても駄目、村人のよくきくと云ふ草も色々煎じて洗つても見たが何のきゝ目もない。全く之になやみぬいてゐた。さうすると或夜の事だつた。お爺さんはなやみに疲れ果て、うと／＼と眠つてゐると、枕元で何物か「與三左衛門／＼」と呼ばれる。はつと驚いて目を開くと、鹿にまたがつた白髪のお爺さんが現はれ「汝此の頃皮膚の病に苦しむと聞く。此の病は如何なる薬を用ふるも治癒し難き難症なるぞ。されど汝先頃鹿の爲めに盡くしくれたる善根に報ゆる爲めに、我れその治癒の道を授けん。よく承はれ、かの鹿の浴したる清淨の水を汲みとり、其れを以て一心に患部を清掃すべし。しかすること三日に及べば必ず全癒すべし。ゆめをろそかにせず直ちに之を試みよ」不思議さに驚いた與三左衛門は、感きはまつてばつと眼をさました瞬間、老翁はかき消す様に立ち去つてしまはれた。不思議の靈夢に喜んだ爺さんは、夜の明けを待ちかねて、直ちに冷泉を汲んで來て入浴して見ると、さしも頑固であつた皮膚病も、一日一日と見ちがへんばかりによくなり、果して三日目にはうそかと思ふ様に全癒

してしまつたそうだ」 「叔父さん。そうすると、その鹿は神様のお使だつたのでせうか」 「うん、そうとしか思はれない。村人達も「それは神様のお使に違ひない」と言つたそうだ。それから此の話が評判になつて、皮膚病になやむ者が入浴に来る様になつたが、全くその効驗はすばらしいものだつた。此の碑文によると、明治二十二年に長瀬氏が湯屋業を引つぎ今日に至つたものらしい。此の石碑は長瀬氏の骨折で大正二年に建られたのだ。考へて見るとおれ達も、發見してくれた與三左衛門爺さんのおかげを、今日受けてゐるわけだ」 「叔父さん。それでは一しよに石碑にお禮を申しませう。」 何だかそこらに鹿でも飛んで出そうな心持になつて丘を下つた。

三六 神明の貰ひ水

大八賀村上野は、むかし松樹が鬱蒼として茂つてゐた。したがつて澤山の獸が棲んでゐたので、金森公は此の地を鷹狩の場所とせられた。然るに當時は人家がなかつたから、休息所として一軒の家を家來に造らせて、廣瀬太兵衛と森久左工門の二人の武士にその家守を仰せつけなかつた。しかし上野は一帶の高野で天水の外一滴の水もなく、飲料水に大へん難澁した。それで此の二人は神明宮を祀り、朝夕只管水を頂くやうにと祈願した。すると夢の告げに「汝の求むる水は東南の溪谷に湧出する。それを尋ねて用ひよ」と二人は不思議に思ひつゝ、翌朝未明に起きて東南の溪谷を尋ねたところ、清淨なる靈水が湧き出てる。兩人はそれから一層信仰を厚くした。此の話を聞かれた金森公は大いに満足せられ、來場の時は必ず神明に參拜なし、廣大な神域の地を寄附し、社殿を修築せられた。之が今の松森神社の起りである。

三七 水 無 磧

すつと昔宮の大幢寺の開山が、毎日／＼石の上に座つて、心ゆくまで座禪をくんで修業を試みえた。ところが或日のこと今まであかるかつたのが急に暗くなつて來た。和尚さんは不思議に思つてゐると、非常に尊い嚴かな一人の老翁が座禪中の開山和尚を訪られたのであつた。そうして「吾れは一の宮の神である。法を求めたい爲めに現れた」と申された。そうして和尚は數刻の間問答をして、その中に自分の研究した極意「佛祖單傳の正脈」を一の宮の神にお知らせ申した。すると神靈は大層お喜びになつて「多年の望みが達した。何か望のことを聞き入れて恩に報ひやう」と宣ひなされたので、和尚は「前の川の流れが瀧の如く其の響きが雷の様で、經を讀むとき耳に障り自分が座禪をするのにさまたげとなることが多い。どうか之を止めて下さいませんか」とお願ひしたところ、神靈は「それは非常にやすいことである」と仰せられて、アジメと云ふ魚に命じて地中を潜らせ、水を地

中へおとほしなされた。それ以來川の水が乾いて川原となつたといふ。

三八 鐘

今でこそ山の頂上に近くたつた一つさびしうに建つてゐる千光寺も、昔は澤山の寺がたちならんでゐた。そしてそこには僧兵と云ふ強いお坊さんたちが、それはく澤山住んでゐた。永祿のころ武田信玄は近所のお國をだんく攻め取つて、もう攻め取る所がなくなつたので三木休庵と戦争をして、飛驒の國を取りたいと考へた。けれども千光寺に居る僧兵が休庵に味方をしては困ると云ふので「今度武田家では飛驒征伐を始めたいと思ふが、あなたのお寺には澤山のお坊さんが居なさるそうだから、是非味方をしてもらひたい。そして武田家が戦争に勝つ様に佛様にお祈りをして下さい」と申しこんだ。いくら強い僧兵ごもでも、此の手紙を見てはおごろかすには居られなかつた。川中島で上杉謙信と何度戦つても、勝負のつかなかつた様なえらい大將だつたからである。しかし返事をせないわけにもゆかず、僧兵たちが集つて相談した結果「貴殿からおたのみのお祈りは承知出来ません。三木休庵公は千光寺の大切な旦那であるから、今更三木家へ弓を引いてそむくわけには参りません。どうぞ悪しからず」ときつぱり断つた。此の上は何時武田家から攻めて來

るかも知れないと、戦争の用意を怠らなかつた。やがて武田方では、山縣昌景を討手の大將とし數千の大兵をもつて攻め寄せた。昌景は千光寺の末寺である來迎寺、千藏寺、無量寺、六仙寺、松林寺、などを道々やきはらひ、だんく進んで千光寺を一もみに攻め落そうと、八丁坂迄押し寄せて來た。けれ共千光寺の僧兵たちも待ちかまへて居た所であつたから、矢玉をおしますぞんく打ち出し、又坂の上からは大石だの大木だのがうなりをあげてころがり落ちて來るので、武田勢もやゝたちくのていになつた。時分はよしと千光寺の僧兵たちは門をおし開いて、一どにどつとおどり出た。中には長刀を風車の様にふりまはしながら進むものもあれば、強弓で敵を射倒すものもあり、火花を散らして戦ひ始めた。中でも玄海とか、亮輝とか、尊順阿舍利などと云ふ坊さんは、まるで辨慶の様な人たちで、この人々の射る矢をうけたものは、甲冑も楯も何の役に立たずころりく射殺されてしまつた。敵があんまり強いので、一旦退いて勢をつけ様と、八丁坂の下まで退却した。昌景は將士を集めて軍議をこらした。やがて昌景は精兵數十騎を遠まわりさせて千光寺のうら道から攻め上らせて、千光寺に火を放たせる手筈を定め、又もや八丁坂から勢よく攻めかゝつた。「そら又攻めて來た。け散らせけ散らせ」と僧兵共が五本杉の近くまでおりて來て武田勢を防ぎはじめた。一方うら山から攻め上つた一隊の武田勢が、千光寺へ來て見ると敵一人さへ居らない。これはしめたと許り、武田勢はお寺といふお寺にはみんな火

を放つた。ほせ切つてゐるお寺は、炎々として天をもこがす様に勢よく燃え出した。燃え上る火事におどろいて僧兵どもが駆けつけて見ると、お寺は火の海で消すことも出来ない。もう駄目だと僧兵どもは裏山から峠を越して、おどろきの國へおちのびてしまった。火勢が盛になるにつれとう／＼釣鐘堂も落ちた。すると不思議にも眞赤にやけた大釣鐘は生きてゐるものゝ様にうなりを上げてころがり落ち、どん／＼山を攻め上つて来る武田勢を目がけてぶつかる。あつと云ふ間に三十人四十人はやられた。これは大變事にげ出すと、谷でも山でも上の方でも下の方でも、どん／＼追つかけてくる。それがために何百人かの武田勢は見る間に命をとりたれてしまつた。さんざん山をかけめぐつて武田方を苦しめた大鐘は、遂に八丁坂の下にある深い淵にとびこんで、長く沈んでゐたが、その後再興のとき寺まで引き上げられた。それからはおどろしく両面宿儺と一しよに土藏の中にしまはれて、昔のことをゆめ見てゐる。

### 三九 琴 淵

晝の様に明月の光に照らされた、狭い谷沿ひの盆地を取巻いて聳えてゐる峯から峯へ、こたまする程に聲をあげて唄ひさゞめいてゐるのは、根方ゴンボウの村人たちが今日琴淵の新橋工事が完成した祝ひを、村の鎮守の森でしてゐる所である。根方村の人たちの永年の希望は

「川向へ渡る便利な橋がほしい」と云ふ事であつた。乗鞍岳の神秘を語る大丹生ヶ池に源を發する丹生川は水量多く、それに兩岸一帯が殆んど懸崖絶壁で適當な架橋地がない。たゞ一ヶ所琴淵だけは淵の中僅に三間半許りまことに橋を架けるによい所である。しかしその下は底知れぬ深淵で、昔から此の水底は龍宮につゞいてゐるので此の淵には大蛇の主が住んでゐる。そして時とするに無氣味な淵の底から琴を弾する様な妙な音が聞えることがある。しかしその音は凶事を告げるもので、その琴の音の聞える時は必ず變事が起つたこと傳へられてゐる。丹生川の水は此所まで流れて來ると大渦小渦を巻き起し巻き返し、岸上に立つて見下すと目のくらむ様な物凄さである。そして主は鐵類を忌むから橋を架すると一夜で流失してしまふと云ひ傳へ、幾百年間一度も橋を架け様とした者がなかつた。ところが此の村の彌太郎と云ふ男が、「琴淵に主がゐる鐵類を忌むから橋を架けても一夜で流失するなんと云ふことは迷信も甚だしい」と極力主張した。村の人々は彌太郎に反對して、「彌太郎さんは乱暴なことを云ひなされる。あなたが何と云つたつて昔橋の流失したことがあつたといふから仕方がないぢやないか」「それは偶然に流失したので主の爲めぢやない今はもうそんな迷信を信する時代ぢやない。一時も早く橋を架け川向へ渡る人の便利を計つた方がよい」と熱心に主張して歩いた。初めは反對した村人も段々熱心に説く彌太郎の言葉に一人二人と賛成する様になつて來た。それは橋が出來れば川向の荒地を開拓して田

畑を作れば、村人の収入がおびただしく増加し、皆の富が増すと云ふ慾望があつたからである。そして彌太郎の説が遂に村人に容れられて、數日前から工事に着手してゐた新橋が無事落成したので今村人たちの喜びは其の絶頂に達し、彌太郎を殊勳者の様に正座に坐らせて、我を忘れて飲みつゞけてゐるのであつた。祝宴を終つて村人たちが家へ歸つたのは其の夜も更けた十一時近くであつた。晝の疲れで人々は床に入ると直ぐ熟睡してしまつた。「ごろく／＼ごろく／＼つ、ごろく／＼ごろく／＼つ」と家鳴を伴ふ物すごい雷鳴について篠つく雨の音に目ざめた村人たちは、「さては」とあるものが頭にひらめいた。そして云ひ合せた様に外へ出る者一人とてなく小さくなつてふるへてゐた。ものゝ一時間もたつと又もとの静けさに歸つたので、皆恐る／＼戸外へ出てみると、雨の降つた形跡もなく、鎮守の森で唄ひさゞめいた時と同様すみきつた明月が仲天にかゞやき渡つてゐた。

夜の明けるのを待ちかねた村人は恐る／＼琴淵さして集つた。見よ、昨夜迄嚴然とか、つてゐた板橋はあとかたもなく流失し、橋桁一本すら残つてゐなかつた。そして淵の水を見るときいつものやうに物凄く過巻き流れて何物をも知らぬかの有様であつた。川下の村々へ尋ねたけれども流失した橋の材料の行方は判らず、永久の謎となつた。村人も此の靈驗に怖を抱き再び板橋を架けようとはせず、以來柴橋を架して往來することになつた。不思議にも柴の橋にかへてからは流失することもなく、何の變事も起らないと傳へてゐる。

#### 四〇 村山天神

南朝の御思召によつて旗擧げした、飛驒國司參議姉小路タゲツナ尹纜卿のたて籠つた小島城は、押し寄せた足利勢に圍まれ、今は兵糧も残り少く矢玉も盡きはて、風前の燈となつた。かくなる上は明日の合戦こそは群がる敵兵の眞つたゞ中に切り込んで、潔く城を枕に討死するより他に道なしと、城兵は悲壯な決心を固めた。

其の夜は重くるしい空氣に包まれて更けていつた。ところが寄手の軍勢の中に城の案内を知つた者が居たのか、闇に乗じて城に忍び入り、搦手の櫓に火を放つた。折柄の北風に火はあふられて數町の構も一度に燃えあがり、焰は炎々として天をこがした。「それつ、卑怯なふるまひをせまいぞ」と、一度に城門を押し開いて打つて出た。

尹纜卿は城兵をはげましつゝ、敵中に切り込み、二三人のものを切り捨てたが、さう／＼朝倉左工門佐の家臣井上新兵衛のために討たれてしまつた。城が燃え上ると北の方は代々家に傳はり先祖から尊敬深い薬師如來と、菅公の兩像を家臣に背負はせ乳母を召しつれて竊かに逃亡した。櫻野の邊りまで落ちのびた北の方は、尹纜の討死、落城と重なる悲みのため、今はもう歩く力すらなくなつてしまつた。とある農家を見つけ「夜中氣の毒ながらしばらく休息をさせていたゞきたい」と立ち寄つた。農家の主人は「これは唯人ではあるま

い」と考へたものか、いと可憐に台所に招き入れ何くれとなく世話をした。翌朝従者より身の上を聞かされた主人は、心ある者であつたから深く同情し北の方主従をかばふことになつた。しかし一ヶ月あまりたつと國中足利方の勢力になびき従ひ、北の方主従の長居も危くなつて來たので、三人共髪をそり亡君の菩提を弔ふため、さすらひの旅に出で立つことになつた。此の時兩像を百姓家に殘してゆかれたので、主人は村人たちと相談の上、上の洞山に小社を建て、安置することになつた。村人は靈像を崇拜すること厚く祭事を忘れなかつた。ところが何時の頃か盜賊が來て、この兩像を盗み出し宮川を渡つて逃げて行かうとする、不思議にも菅公の靈像が忽ち重くなり、一步も歩けなくなつてしまつた。盜賊も今は仕方なしと、靈像を附近の藪の中に投げ込み、藥師如來の像ばかりを持ち姿をかくしてしまつた。或夜村山の市藏といふ百姓が夢に菅公が枕元にお立になつて「やよ市藏、吾は元小島城に祀られし菅公なり。然るに小島城の落城と共に故あつて廣瀬町の上の洞山に安置せられしが、今また盜賊のために汝が家より程遠からぬ小松野の藪原に投げ捨てられたり。汝希くは我が像を得て小松原に安置せよ」と云はれたかと思ふと夢ははたと破れた。靈夢を感じた市藏は、未明に起き出て近所の人々に語り小松野に行つて草を分けて探した所、果して菅公の尊像を得たので且つは感じ且つは喜び、早速我が家に運んで來て安置することになつた。然るに其の後市藏は再び靈夢によつて永く此の地に鎮座なさ

るとの御告を拜し、領主に申上げ小松野に宮を建ていつきまつることになつた。すると又驚いたことには宮の建築の出來上つた夜、小松野は一夜にして數千本の松が繁茂したので「これは神様の思召にかなつたに相違ない。厚く尊信しやう」と、誰云ふとなく崇敬する様になつた。

#### 四一 名木の最後

##### 王塚

川上川に沿ふ中切の地に、昔「オイノ木」といふ樺の大樹があつて、その枝が三方へ分れてゐた。そして其根もどには塚があつて、大昔京都から當國に下つた貴族の臨終の地だと傳へられてゐる。ある時三人の村人が相談して、これを切り倒そうとしたことがあつた。その時切つた株のところから眞赤の血がダラ／＼と流れ出た。そして塚は轟々と鳴動する。三人の村人は喫驚仰天して眞青にふる／＼ふるへ上つた。これは何でも貴族の亡靈のため、りだといふので、今迄切り採つた枝を皆この塚の中に收めて丁寧に供養したので、血や鳴動は次第に止んだ。こゝを今も王塚といつて村人が尊敬してゐる。その時から三人のゐた各自の地名を上切、中切、下切と云ふのださうだ。今も上枝村にその地名が残つてゐる。

##### おいの木

「人の噂も七十五日」約四十年前事件の起つた頃は誰一人知らぬ人のなかつた事がらも、今日では段々忘れられて、これから益々おぼろげに傳へられるであらう。「おいの木、おいの木」と俗によばれてゐたが、大い木といふ意味か、王塚の木であるから王の木といふ意味であつたか、誰も知る人はないが、たゞおいの木と呼んでゐた。何しろ稀代の巨木で根廻り七丈余、高さ三間ばかりの所から大きな枝が三方へ殆んど同じ様に三つ又になつてひろがつて居り、木の高さ二十間と云ふすばらしいものであつた。地面から二間位の高さの所から大きい根が周圍にたくましい足を伸してゐたから、其の周圍をはかれば二、三十間もあつたであらう。根元に近い所に松尾神社があつたが、相當大きなものであるにか、はらず、あまりに木の幹や根が大きいので小さな祠に見えた云ふ。

このおいの木は中切といふ村にあつたのだが、此の村に吉助といふ四十五六歳になる白痴の男が居て、性質は温順であつたから御飯さへやれば一人前の仕事は出来なかつたが、せつせと働くので村の人たちは少なからず同情してゐるのであつた。明治二十三年の秋吉助は毎晩／＼こつそり家をぬけ出して、おいの木の根廻りをガンドで根氣に切り初めた。大部分の根を切つた頃村人たちが氣がついて吉助を叱つては見たものゝ、白痴の事だから問題にならなかつた。吉助は叱られてからはもう切ることはやめたが、次の年果して芽を出

すだらうかと云ふことが村人たちの話題であつた。冬もすんで翌年の春を迎へたおいの木はすが／＼しい新芽をふきそれが段々と若葉に成長していつた。「ほんとうに心配だつたおいの木も、この様子なら大丈夫だろう」「いや全く心配しましたなあ」「なにしろ、此の村の神木ですからなあ」かう云つた喜の挨拶が交されたのもほんの束の間、夏近くなるにつれて新緑はだん／＼黄ばみ初め、土用になつた頃はらく／＼と時ならぬ枯葉の雨を降らせてしまつた。村の人たちは寄るときはると其の噂ばかり、「此の村の神木として遠い祖先の昔から崇めたおいの木を枯らした以上、吾々はどんな崇りを受けぬとも限らぬ」「困つたことになりました。不幸なことがつゞかねばよいが」「それが何より心配ですよ。しかしあんな白痴者を生かしておいては今後村の者がどんな迷惑を受けぬとも限りません。何とか今の中にしなくてはなりませんまい」こんな風ですむ分心配した村人たちは、誰云ひ出すとなく可愛そうだが吉助をなきものにしようと言ひ出し、川上川の淵に沈めることになつた。其の日は風が寒く雪さへちら／＼交り飛ぶ日であつた。村の者が大勢川原へ集つて焚火をしながら酒を酌み交してゐると、そこへ二三の若者たちが吉助を引きすへて、

「吉、手前は太い野郎だな。遠い／＼昔からこの村のお守り神様と云ふ位、村一同の者が崇めて来たあのおいの木を伐り枯しやがつて、今にこの村にどんな崇りがあるか知れぬ。今日は村の者一同相談の上此所にある大きな袋に手前を入れて、可愛そうだがあの淵へ沈



め様と云ふのだ。もう手前を生かしておくことは出来ぬ。しかし手前も今日限りの命だから、今生の名残に好きな酒を飲ましてやるから飲みたいだけ飲んで、誰も恨まず神妙に往生しろよ」と宣告してしまつた。これには流石の吉助もびつくりして、大聲をあげて泣きながら「命ばかりはお助け下さい」と両手をあはせてもだへ悲んだ。村の者は吉助のかうした所を取り圍んで罵りわめいてゐる。村中のものは今吉助が淵へ沈められるのだと云ふので、老も若きも男も女も皆川原へ押し寄せた。これを聞いた村の醫者の隠居がかけつけて、村人たちに詫を云ひ「今後決して吉助が村人たちに迷惑をかける様なことのない様取締るから、どうか命だけは助けて頂きたい」と誓つたので、漸く事なきを得た。そして神主を招いておいの木には神酒を供へ、其の他くさくさの品を供へて祝祠を奏し、祭事をねんごろに營んで、後伐り倒したのであつた。その大木の倒れた時音が高山までひびいて來たと云はれてゐる。そして根元の土中から古劍が三振出たと云ふ。此の大木は京都の平安神宮の扉や東本願寺の門に使用されて、その立派な木目は今も尙ありし日のおいの木をしのばせてゐる。

#### 四二 飛驒の工

大昔桓武天皇といふ立派な天子様がおありでした。天子様は今まで大和の國に都のあつたのを、もつと景色のよい山城の國へおうつし下さつたお方である。其の頃飛驒の國からもたくさんの大工さんが行つて、天子様の御殿や御門をつくることになつた。

その大工さんのことを、都の人たちは飛驒工と呼んでゐた。その飛驒工の中にすぐれて腕の立派な大工さんがあり、又其の頃都中に名前の知れ渡つてゐる繪師に百濟川成と云ふ人があつた。或時のこと飛驒工は百濟川成とお互に腕競べをしやうと云ふ約束をした。それから何十日かたつて或日工から川成の所へ手紙がとどいた。「今度私は小さなお堂を建てましたから、其壁に是非繪をかいていたゞきたい」と云ふ意味が書いてあつた。川成は「さては約束の腕くらべだな。これは面白い」と大喜びで、飛驒工の邸へ出かけて行つた。なる程、一間四方の小さなお堂が建つてゐる。そして四方の扉が開けてあつて、飛驒工は真中に座つて川成を待つてゐた。そして川成の姿を見つけて「本日は御無理申して申譯ありませんでした。よくこそお出で下さいました。さあ／＼お入り下さい」と申すので、川成は何の氣もなく椽に上つて南の入口から入らうとした所が、驚いたことには南の扉がピタリと閉ぢてしまつた。「しまつた」と巡りて西の入口から入らうとすると、西の扉がピタリと閉ぢて、南の扉が開いた。北の入口から入らうと川成が北の方にまはると北の扉が急に閉ぢて、西の扉が開く、東の口から東へまはれば、東の扉も同じくはたと、閉ぢて、北の扉がすうと開いた。二回三回川成は根氣に入らうとつとめたが、どう／＼入ることが

出来ず、飛驒工の笑聲をあとしして残念ながら歸つてしまつた。「飛驒工の腕前には恐れ入つた。尋常の腕では勝つことは覺束ない」と一生懸命で、繪に力をそゝいだ。川成の所から飛驒工の所へ「此の頃はお邪魔致しました。非凡の腕並拜見いたして川成などは遠く及び申さん。明日は是非貴殿の御覽に入れ度いものを手に入れたから、見がてらお遊びに來て下さい」と云ふ手紙を出した。飛驒工は多分自分に仕返しをするのであらうと思つて、行くのを見合せてゐると、川成から度々使をよこすので、どうく行くことにした。川成の屋敷へ行つて見ると、川成初め家族のものみんなが大喜びで工を迎へた。「よくお出で下さつた。さあくこちらへ」と川成に案内せられて座敷へ通ろうとすると、驚いたくお座敷の真中には大きな人間の半ば腐つて、うぢがうよくはひまはつて居て、見るも恐しげな姿がうつ伏しにねかしてあるではないか。室は異様な嗅氣で何とも云ひ様のない有様。流石の飛驒工も見かねて聲を立てながら、どんく逃出してしまつた。すると川成はからくく笑つて、逃げる工を呼びとめて「私がこうして平氣でこの室に居るのです。何もこわがるに及びません。是非入つてご覧下さい」と申すので、恐るく近寄つて見ればこれは又どうしたことであらう。今の今まで恐ろしく思つて居た死人は、障にかいた死人の畫であつたのだ。お堂で川成に一本食はした飛驒工も、今度はどうく一本食つてしまつた。「まことに見事な腕前です。どうてい私共の及ぶ所ではありません」と工はすつ

かり感心してしまつた。其の日、工と川成はお互に技術上の面白い話をして別れたが、二人ともこれではまだ十分な腕前ではない。もつとく立派な腕並にならねばならぬと仕事にはげみ、やがて日本一の大工、日本一の繪かきになつたと云ふことである。

#### 四三 殿地屋敷

昔々大昔、牧ヶ洞の奥に、澤山な寶を持ち廣い立派な屋敷を構へて住んで居たお殿様があつた。そこを今でも殿地屋敷と云つて地名が残つて居る。今から百年程前のこと、次郎作と云ふ爺さんが山の端の所を開墾してゐた。ところが次郎作のふりおろした鍬先が、かちりと石に打ち當つた。見れば平たい大石が横たはつてゐる。之は邪魔な石だと取除けると、不思議不思議、中には一つの甕が入つてゐた。爺さんはおそろしい様な感に打たれたが蓋をあけると、金銀が一ぱい入つてゐる。爺さんの喜びは此の上なく、暫くは金銀を眺めたり、壺の形をしらべたりしてゐた。壺には何か書きつけてある。よく目をこめて見ると殿地七甕半の中と書いてあつた。爺さんは人に知られては大變と早速かくしおき、夜になつてからこつそり家に持ち歸り、佛間の下の土中に埋めた。そして家の者の不在の時には、必ず取り出して一人喜んでゐた。後爺さんが病が重くなつた時、二人の子を呼んで寶のことはじめて話した。二人は初めのうちは兄弟仲よく暮してゐたが、互に爺さんの

寶を貰ひ度いと云ふ慾が強くなるにつれ、段々争がはげしくなつて来て果ては兄弟がよつた度毎に大喧嘩を始める様になつた。爺さんは、たつた二人の兄弟であるから、ゆく末永く仲よく互に助け合つて幸福に暮してくれ、ばよいと念じてゐたのに、自分の持つてゐる寶のためにそれが却つて仇となつたと大そう悲み、涙を流しながら幾度も和解をすゝめたが、慾に目のくらんだ兄弟は中々聞き入れず、何時までも二人の争闘はやまなかつた。お爺さんは「此の寶があればこそ、お前達二人は見にくい争闘を續けるのだ。その争闘はやがて家を亡ぼし、身を亡ぼすだらう。私は死んで冥土で殿様にあつて、寶をお返しするつもりである。お前達は仲よく働いてこの家を立派なものにせよ」之を最後の言葉としてお爺さんは間も無く息を引きとつてしまつた。お爺さんの最後の言葉も耳に入らばこそ、その死後も兄弟の淺ましい争闘は尙ほやまず、二人は吾先きに其の寶を探し當てやうとしたが、不思議にも同時に佛間の下に謎の甕のあり場所を探し當てた。けれども甕はお爺さんの言つた通り空であつた。夢からさめた様に二人はお互の心の汚いことを恥ぢた。そうしてお互に一生懸命に働かう、働いて汗と力でその寶を取りかへそうと固く誓つた。その家は段々と繁昌し、人に親切な、よく働く、仲のよい兄弟だと、村中の評判となつた。今でもお屋敷のごとくに、まだ六甕半の金銀を入れた甕が埋まつてゐると、牧ヶ洞の人たちは語り合つてゐる。

#### 四四 岩魚の怪

飛驒の國大野郡山之口村に、團子淵と云ふ淵がある。昔はものすごい水をたゝへた底知れぬ淵であつたが、今は昔の面影もなく、瀧があつて景色のよい處になつてゐる。昔の昔大昔、村の人がこの淵へ「ね」（ねとは山椒の木の皮を焼き灰にて煮たもので頗る毒物にて河流に投ずれば魚類斃死するものであると）を入れて魚を捕らうと、家で圍爐裏に大鍋をかけ盛んに煮てゐた。すると一人の僧が突然その家に来て、主人に向つて「お前はこの奥の淵へ「ね」を入れようとして、今その鍋で煮て御座るが、それは甚だよくない事だから止めた方がよいだらう」と云つた。丁度そのとき團子を作つてゐたので、その僧へ差上げた處が、僧はこれを食べて外へ出た。この主人は妙な事を云ふ坊主だ、變だと思つたのでその僧の跡をつけて行つたところ、主人が丁度「ね」を入れやうと思つてゐる淵のそばで姿が消えてしまつた。それから「ね」が出来たので、僧の云つたことなど構はずに、その淵に「ね」を入れた。すると大きいく、岩魚が浮き上つたので、之れを捕へて肩にかついたら、尾先が自分の踵に迄で届く程の大きさであつた。家でその岩魚の腹を割つたら、團子が腹の中から出た。先に來た僧は全く岩魚が化けて來たのであつた。そしてその僧が團子をたべたと云ふので、團子淵と名付けられた。山之口村ばかりでなく飛驒國一圓に、年

經た岩魚は人に化けると今でも信じられてゐる。

附記

岩魚の化けた傳説も多くある。益田郡の小坂、大野郡の久々野、吉城郡の坂下等に傳へられてゐるが話の筋は山之口の岩魚の化けた話と同一である。

四五 姥ヶ池

昔山奥の或る村に勘平と云ふお百姓があつて、三人綺麗な娘の子をもつてゐて、安樂に暮してゐた。其の年は六月頃から雨が少しも降らぬので、川の水はかれる、井戸は乾せる、用水池も干からびて、それはみじめな有様であつた。あちらの村でもこちらの村でも、雨乞ひが行はれた。或る村では乗鞍岳の大丹生ヶ池の主にも雨乞ひをしたけれども、何の甲斐もなかつた。又或る村では黒淵の主にも雨乞ひをしたが、是も何のきゝめもなかつた。かうした例にもれず勘平の村でも、石楠淵の主にも雨乞ひをしたが、一滴の雨すら降らない。皆不安そうな顔で、焼けつく様な炎天を見上げるばかりであつた。今日も勘平が心配そうな顔をして日にくゞ大きくなる田の干割れを見廻つてゐると、田の水口の所に一匹の小蛇がどぐろを巻いてゐた。勘平はおどげ半分に「もしくゞ蛇殿、何とお前は此の田に水をあてゝは呉れまいか。そしておれが持田全部に水をあてゝくれるなら、お禮に私の娘をお前にやら

う」と云ふと、小蛇は尾をびたゞと動かした。すると見るくゞ田は水で一ぱいになつた。そして勘平の持田全部へ次々と水が流れて、どの田を見ても水がなみくゞとあふれんばかりになつた。しばらくするとその小蛇は水田の中へろくゞ入つて行つたが、忽ち大蛇になつて水の中に姿をかくしてしまつた。其の晩から勘平は娘をあの太蛇にやらねばならぬのを苦にして、病氣になつてしまつた。あくる朝いつも朝起きて評判の勘平が起きて來ないので、娘共は心配して姉がおこしにいつた。「お父さん、お身体の工合でも悪いのでございませうか、いつも早起のお父さんが起きなさらないので、皆心配してゐます」と云へば勘平は頭を上げ「いや別に身体の工合が悪いのではないが、實は筒様な譯だがお前一つ大蛇の所へお嫁に行つては呉れまいか」「いくら何でもあまりひどいぢやありませんか。大蛇の所へ嫁に行けとは」と斷つてしまつた。勘平は中の娘を呼んで話したが、姉の様にきき入れなかつた。勘平は仕方なく妹娘を呼んで前の通りに話すと、「お父さんの云ひつげなら、たとへ火の中水の底でも厭ひません。たゞ一つ私の願ひも聞いていたゞきたいのです」と、孝行者の娘は直ぐに承知した。勘平は「早速承知して呉れて有難い。何でもお前の望を叶へてやるから云つて見るがよい」と云ふと、娘は「では申しますが瓢箪を百箇と、針千本と、懐劍一振どを買つて下さい」と頼んだので、勘平は急に元氣づいて「よしよし、そんなことならお易い御用じや」と、直ぐ人を町へ走らせて之を調へた。

娘は荷物の仕度をして待つてゐると、やがて大蛇は立派なお士さんになつて來た。そして「勘平さん、今日はお約束のものを貰ひ受けに參つた」と申すと、妹はすぐ飛び出して「お父さんがお約束なさつた娘は私でございませう。何所へなりとお連れ下さい」と、勘平や二人の姉さんたちに今生の別れを告げ、用意の荷物をしつかと背負つて大蛇の後について出かけた。大蛇は先に立つて行くともく、野をすぎ山を越えて大深山へと分け入つた。見ればそこには周圍一里もあろうと思はれる大池が、青黒い無氣味な水を漫々と湛へてゐる。大蛇は「こゝがおれの棲家だ、一緒に入ろう」と云ふと、娘は「入りますとも、あなたの方へ參つたからにはどこへでもお供致しますが、私に只一つの願がありますから聞いて下さい。これはお父さんが形見に下さつた大切な品です。肌身はなさず傍に置きたうございませうから、私の入る前に一つも残さず水の底へ沈めて下さい」と百箇の瓢箪を荷物の中から出して、大蛇の士さんに渡した。大蛇はすぐに承知して、バラ／＼と池の中へ百箇の瓢箪を投げこんだが、空瓢箪は何うしても沈まない。大蛇が沈めやうとしてほん／＼とたゞき込めば、先に沈めたのがぼつかりと浮き上つて來る。いくらあせつて見ても全部一時に沈めることが出來ないので、池一ぱいの姿になつて頭や尾で一生懸命沈めやうとしたが駄目であつた。長い間やつてゐる間に流石の大蛇も次第／＼に疲れ、はてはごた／＼とどうねりを打つてゐたがあをのけ様に倒れてしまつた。娘は時分はよしとかねて用意の針

千本を投げつけると、其の針は不思議や皆鱗の間へ立つてしまつたので、大蛇はのたうちまはり、山も崩れる様な大うなりを立て、死んでしまつた。娘は大喜びでその首を打ちおとし、それを土産に今頃はごうなつたことかと心配してゐた父の所へ無事に歸つて來た。大蛇の居た池ははだん／＼あせて、今は小さな池になつて居るそうだ。

#### 四六 山人

飛驒の山人におう人といふ者があつた。身の丈は七尺もある大男で、身には木の葉で綴り合した着物を着てゐた。或る獵師が山奥深くわけ入つて獸の多い所を探してゐた所、このおう人に出合つた。其のおう人は走ること馬の飛ぶ様に早いので、獵師は逃げやうもなく仕方なしに晝の用意にもつてゐた、自分の握り飯を出し、それを手にのせおう人の前に差出した。おう人は其の握り飯を取つて食ひ非常に喜んだ。山奥深く自然に生れ出たものであるから、かようなおいしいものを食べたのは初めてのことで、喜んだのも無理はない。暫くしておう人は獵師と離れて山奥深く入つて行つたが、少しの間に猪やむじな等澤山持つて來て獵師に與へた。屹度、先程握り飯を頂いた恩返しのためにも猪やむじな等澤山持つて來て獵師が澤山手に入つたことを喜び、勇んで我が家へ歸つた。それから毎日握り飯を澤山持つて行き、おう人と其の獵した獸とかへて歸つて來た。ところが不思議に思つた

のは隣の獵師である。自分は一生懸命働くのに毎日働き出す獲物はあの獵師よりもはるかに少い。どう云ふことだろうか。不思議なこともあればあるものだ、ひそかに様子を見てゐた。そうして或日のこと早く先へ行つて待つてゐた。そうするとそこへおう人がやつて来た。その獵師はびつくりして鬼とでも思つたのか鐵砲に玉をこめ、其のおう人めがけてズドンと一發うちはなした。玉はうまくおう人に命中して、おう人は逃げて行つたので獵師も急いで家に逃げ歸つた。初の獵師はこのことを聞いて、ああ可愛そうなことしたと深く山奥へ入つて探した。そうして峯から望み見た處谷底に斃れてゐる。不思議なことにはその側には他のおう人が介抱して居る。屹度あの介抱してゐるおう人は自分を仇と思ふにちがひない。そんなことを考へ出したら恐ろしくなつてじつとしてゐられないので、早速家へ逃げ歸つた。

✓ 四七 猿 丸

昔諸國行脚の一僧が飛驒の國へ来て深山に分け入り、とう／＼道にふみ迷ひ路端の大石に腰を下ろして思案にくれてゐた。旅僧は脚下を流れる谷川を見るときもなく眺めると、高さ七、八尺許りの瀧が目についた。それをじつと見てゐると、その瀧の裏から草摘みらしい母子の二人連が出て来た。「あつ瀧の中から」と不思議な事とは思つたが、困つてゐる旅

僧は助けの神と喜び、立ち上つてつか／＼と二人に近づき、「お尋ね申します。私は諸國を行脚してゐる旅僧でございますが、今朝來道に踏み迷ひましてあちらこちらさまよひ歩き、今は歩く勇氣もなくこゝに休息してゐた所でございます。人家のある所へ出ますには、何れへ行けばよいでせうか」と尋ねた。二人連の女は互に顔を見合せて、「人家のある所へ出ますには、前の山をお越しになつて二里ばかりおいでになれば牧戸と云ふ人家のある里に出られますが、まああの川中にある瀧を御覽下さい。あの瀧の水をくぐつて行きますと數丁で私共の里へ参ります。承れば大そうおつかれの由私共の宅まで御出下さい。そしてゆつくり御静養なさつて、また行脚にお出かけなつたら如何でございます」と云ふので、僧も大に喜び「それは辱けない。ではお言葉にあまへてお邪魔いたしませう」と二人の女に導かれて行くことになつた。瀧をくぐると、こは如何に、花咲き乱れた一面の野原ではないか。そして蝶は花から花へ舞ひ鳥は長閑に梢に唄ひ、風雅な家がそこゝにあつて見るからに心地よい樂園である。僧は驚きの眼をみはつてゐる。

「あれ御覽下さい。あの森の側に見えるのが私共の家で御座います」と、やがて二人の家に到着した。二人から仔細を聞いた主人はこの外喜び「それは／＼よくおいで下さいました。山中の離れ里のことで何一つ珍らしいものとはありませんが、此所は常春の里と申しまして四時花咲き乱れ、木の葉の散ることも雪の降ることもない里でございます。御

身体の御回復なさるまで何日なりと御ゆつくり御逗留下さいませ」と、下へもおかぬもてなし。やがて夕飯の膳部が運ばれた。都でも見たことのない見事な膳立、それに盛られたのは山海の珍味、僧は益々驚いてしまった。僧が「此の常春の里は何と云ふ長閑な楽しい地でありませう。こうした土地に何の心配もなく豊かにお暮しになる貴殿方を羨ましく存じます」と云へば「左様、まことに楽しい里であります。何不足なく暮してをります。幸私の家は御覽の通り親子三人暮しで、誰に氣をおく者もございません。お氣にめしたら何時までなりと御留まり下さい」「それは辱ない。お言葉にあまへて暫く御厄介に預りたうございます」と、こゝに足を留めることになつた。その中にこの常春の里の村祭の日が近づいた。此のお祭には毎年神様へ生贄として娘を供へる風習があつて、その生贄となる娘はくじに依て定めるのであつた。ところが今年はそのくじが此の家にあつた。父もそれを聞いた母親は氣も狂はんに驚き、娘の手をとつて泣き伏してしまつた。父も氣を強くして「村のためだ、神様への御奉公だ。昔からのきまりだごうも仕方がない。あきらめるより外はない」と言ふものゝ、可愛い、一人子の娘の身を思つては胸一ぱいになつて、涙の落ちるのをとめる事が出来なかつた。旅僧も慰める言葉さへない此の一家のなげきを見て、思はずも涙を流してゐたが、つくづく思ふ様、こんな悲みを毎年させる様な山神は恐らく正しき神ではあるまい。屹度之は怪しい物の仕業に違ひないと考へ、もとよ

り勇氣のある僧であつたから「御心配なさるな。娘御に代つて私が生贄となり神様の正体を見破りませう」と云つたので、一家の人々は僧の袖にすがつて喜んだ。愈々祭禮の當日となると僧は娘の身代りに山駕籠に乗り込んで、夕開せまる山道を數人の村人に護られて山神の祠へ向つたのであつた。祠につくと村人達は山駕籠を神殿の前に据へ「どうぞ首尾よく正体を見とゞけてお歸り下さい」と、小聲に別れを告げて山を下つて行つた。一人となつた僧は様子はどうかと耳をすますと、時々森の梢に怪鳥の鳴聲がするばかりで、月もなく星影もまばらに其の夜はしん／＼と更けて行つた。すると神殿の中で戸を開く音が聞え、やがてのつし／＼と足音が次第に近づいて来る様子、僧は息を殺して山駕籠に手のかゝるのを今か／＼と待ち構へてゐる。いよ／＼怪しい山神が山駕籠に手をかけひつくりかへそうとする時、がばつと飛び出した僧は抜く手も見せず山神めがけて切りつけた。「きやつ」と云ふ叫び聲と共に山神は後を見ず逃げ出したので「おのれ逃がしてなるものか」と、すぐさま追つかけ神殿の中でとう／＼山神を取り押へてしまつた。見れば山神とは眞赤な偽り、大猿ではないか。「につくい奴め、よくも山神など、年々生贄を供へさせ居つたな。今は思ひ知れ」と怒つて、ぐる／＼としばり上げてしまつた。そうして大なるりで常春の里へ歸つて來た。首尾や如何にと安い心もなく待ちこんでゐた一家の者は、無事な僧の姿を見て飛び立つばかりの喜びである。「之は猿丸と云つて人家に繋ぎ置き人の

翫弄する物である。かゝるものに久しく生贄を供へたのは極めて愚なことであつた」と、主人と共に大領のもとへ訴へ出で猿を殺そうとした處、猿は泣き叫ぶこと甚だしく如何にも憐れであつたから、村人たちも色々なだめた。僧は人々のなだめに従ひ、やがて杖をもつて猿を打ちすえ「につくき奴なれど今だけは許しつかはす程に、以後は必ずつゝしめ」と説ききかせて追ひ放つと、猿は一散に奥山さして逃げこんでしまつた。

僧の思ひ切つた働で可愛い娘の命をとりこめた主人夫婦は「此の上はどこまでも娘の婿になつていたゞきたい」と頼み、村人達からも「村の恩人です是非婿になつてやつて下さい。そうして長く此の村に留つて下さい」とすゝめられ、遂に此の家の婿となり名も式部と改めた。式部の家は次第に富み榮え里人にも敬はれ、妻とむつまじく暮し、その子孫も大に繁昌したと云ふ。

#### 四八 白真弓

瀧は白水シロミツお寺は御坊、お角力取りなら白真弓。

白川と云へば私共はすぐに白水の瀧や、白真弓や、平家の落人を思ひ出す。白川は白真弓の出生地として、私共にはあこがれの土地である。白川の木谷村に奥右工門と云ふ若い男があつた。村一番の力持ちで牛に荷物をつけて越中の方へ出て行く時など、細い山道で向

ふからも荷物をつけた牛の來るのに出會ふことが度々あつた。こんな時には奥右工門はきまつて、自分の牛の腹の下へ兩肩をつきこんだかと思ふと、荷をつけたまゝ牛をかつぎ上げて道の端によけて、向ふから來た牛を通してやるのであつた。「奥右工門の力には何時もなながら驚くな。江戸へ出てお角力さんになつたらさぞ出世をするであらうが」こんな噂が何時でも村人たちの間に交されるのであつた。一人前の若者になつてから世話する人があつて高山町へ出て來た。そうして大阪屋七右工門（今の森彦兵衛）の下男に雇はれることになつた。當時の大阪屋七右工門は酒屋だつたので、お酒をつくる頃になると酒米が山の様に積まれるのであつた。朝は必ず土間の掃除をしなければならぬ下男達たちに、苦の種は酒米であつた。けれども奥右工門が來てからは他の下男は大助りである。それは奥右工門が片手で安々と米一俵づゝつり上げて、片手でその下を掃く。何十俵あつても、平氣ですん／＼掃除をして、少しも苦しそうな様子がない。毎朝／＼かうして掃除するからである。其の頃郡代小野朝右工門が上野ヶ原で陣立をすることになつて、旗手を町内から募つた。大きな幟を持つて兵士たちと進退を共にするには大力がいる。ところがこの選にあづかつて出たのが奥右工門であつた。大男——六尺八寸——の奥右工門が、大きな幟を持つて軍隊の先頭に立つて進退する有様はまことに見事であつた。此の時からばつと奥右工門の怪力が町内の評判になつてしまつた。其の後人にすゝめられて江戸に出て相撲取浦



風林右工門の弟子となつて、名を白真弓肥太右工門と改め、間もなく幕内力士に加へられ前頭となつた。白真弓が最も得意としたのは突であつたが、大力の彼は突で往々相手を害したので突の手は一切禁せられてゐた。それで力のある割合に敵を負かすことは少なかつたと云ふことである。ところが或る時幕府からの命令で、外國人と相撲を取つて力競べをする事になつたが、突の手を禁せられてゐるので思ふ様に相手を負かすことが出来ずだん／＼攻め立てられて白真弓が負けそうになつてきた。この時審判の係をしてゐた武士が「突の手、許す」と呼ばれると、急に猛虎の様にたけり立ち見事に相手をつき倒ふして目出度く勝利を得たと言ひ傳へてゐる。話しは少し前にもどるが安政元年二月といふに、アメリカのペルリが軍艦を率ゐて浦賀に來り、幕府へ各種の珍らしい品を献上した。そこで幕府では一つは返禮、一つは彼等の食糧として米を贈ることになつたが、一つ日本人の大力を示してアメリカ人の心膽を寒からしめ様と云ふので、相撲取に運ばせたのであつた。白真弓も東の大關小柳常吉らと其の選に入つた。そして白真弓は背に四俵を背負ひ胸に二俵をかけ、左右の手に各一俵づゝをさげ、合せて八俵を持ち下駄をはいたまゝアメリカの軍艦さして運んで行つたので、流石のアメリカ人もびつくり仰天したと云ふことである。それもその筈其の頃の一俵は五斗入で目方は約二十貫程にあたるのである。アメリカ人が白真弓の大力に感心のあまり其のわけを尋ねると、笑つて「日本のおいしい米の御飯を食

べ、米からとつたおいしいお酒を飲むからだ」と、答へたと云ふことである。

#### 四九 孝池水

飛驒金山驛を發した萩原行の汽車は、中山七里の紅葉を探るお客と、下呂温泉の浴客とで満員に近い。俊太郎は伯父さんと一緒に今日高山へ遊びに行くため、此の列車に乗込んでゐるのだ。汽車は下原のダムを右手に見て走る。伯父は窓から對岸を指して、「おい俊太郎、あれあの向ふ岸に大きな松が二本見えるだろう」「はい見えます／＼。あれでせう」と俊太郎も川向ふを指した。「あれは御番所の松と云つてする分有名な松なのだ。あの松の附近に金森氏が番所を作つて此所を通る旅人の取調と、此所を通る荷物に税金をかけることを司つてゐた所なんだ」「それで御番所の松と云ふんですね」「そうだ、もう少し行くと鐵橋を渡るが窓からのぞいてごらん。益田川が岩に激し眞白な飛沫をあげて流れてゐる所があるから、そこを上釜、下釜の景と稱してゐるんだ」こんな説明を聞いてゐる中に汽車は轟々と、鐵橋にかゝつた。「あゝ伯父さん見えます、釜はあれでせう」汽車はひた走りに走つて焼石驛についた。汽車が停ると窓からのぞいてゐた俊太郎が驛の案内標を見つけて「伯父さん孝池水東五丁とありますが孝池水と云ふのはどういふ池なんです」と聞

いた。伯父は「孝池水の話か、話してあげやう。まだ高山線の開通しなかつた頃は川向ふの益田街道を徒歩で歩くか、自動車で汽車のある所まで走つたものだ。で其の頃は孝池水のすぐ附近を通るから池の様子がよくわかつたが、何年か前日本電力の瀬戸発電所が出来てから有名な孝池水も其の構内になつてしまつて昔の面影はない。汽車からも池畔に生ひ茂つてゐる松だけは見ることが出来るよ。孝子左近の遺蹟を探り、傳説のあとを尋ねやうとする者は此の驛で下車するのが好都合だから、案内標が立つてゐるのだ。ではいよく、これから孝池水の話に移ろう」伯父さんがあまり面白く語り出したので、近所の乗客も耳をそばだて、一心に聞き入つてゐる。伯父さんはそんな事にはそんな事になしに「孝池水の傳説は養老の瀧と並び傳ふべき一つの美談である。天正の昔のことだ。つまり秀吉公なごの勢のよかつた時代だ。江州六角家の浪人に門原某と云ふ者があつた。姉川の戦に主君に従つて戰場に臨み、敵の目をみはらせる様な數々の武勳をたてたが不幸遂に討死してしまつた。その内六角家も没落してしまつたのであとに残つた妻と一子左近は、今は近江にも居れず行先き定めぬさすらひの旅に出た。そして美濃路から此の飛驒へ入り、中山七里へさしかゝつたのは、木々も紅葉しそめた十月の初めであつた。

丁度保井戸近くまで來た時、母は夫なきあとの心勞と長の旅路の疲れとで急病が起り、今は一足も歩けぬ程に苦しみ出した。左近は杖とも頼む母の急病に途方に暮れ、藥籠の藥を

出して一心に介抱を始めたが、何を云ふにも見ず知らずの旅の空、殊にこんな山の中のこどとて醫者のあろう筈はなく、遂におい／＼泣き／＼すれてしまつたのだ」 「氣の毒だ。今も醫者はないんですか伯父さん」 「今は藥屋もある、醫者もある、日用品は何でもある。便利な所になつてゐるが、昔は不自由だつたらうな。所が丁度折よく通りかゝつたのが村の庄屋だつた。庄屋は左近から一通り話をきいて「こんな道中では介抱も出来ない。私の家の納屋が丁度あいてゐるから、そこでしばらく養生させるがよい。旅の疲れなら四五日もしたら直るだろう」と母を助けて我が家へ歸つた。そして裏の納屋に入れて静養させることになつた。左近の心からの介抱と庄屋の親切な世話も其の甲斐あらはれず、母の容体はだん／＼悪くなつて行つた。一刻も枕邊を離れず介抱に盡してゐる左近の姿は見るも氣の毒であつた。母の病氣はもはや回復する見込も立たなくなつてしまつた。其の時母は病みつかれて苦しい息のもとから、「左近や、毎日／＼お前の手あつて看護をうけて、わたしはほんとうに嬉しい。今一度全快してお前の世話もしてあげ、都に上つてお家の再興も計りたいが此の病状ではとても治ることは出来まい。父も私も共に琵琶湖の水で初湯を使つた身であるから今生の思ひ出に故郷の湖水が一杯飲みたいものだ」と云つた。

かうした母の言葉に孝心厚い左近は旅の仕度もそ／＼に母の介抱を近所の人々に托して出かけた。けはしい道をひた走りに走つて漸く琵琶湖へ着いた。左近は持つて來た瓢箪を

出して湖水を一杯つめた。「此の水を差上げたらさぞお母さんがお喜びになることであろう。一刻も早く差上げたいものだ」と、四十里にあまる山坂をひた走りに走つた疲れをやすめる暇もなく、直ちに歸途についた。病の床に悶へ苦しむ母を思へば、氣ばかりがあせる。左近は漸くの思ひで假の宿も間近き瀬戸の里まで来た時、顔色變へて走り来る庄屋にばつたりと出會つた。庄屋はおろ／＼聲で「左近さん／＼、まことにお氣の毒なことぢや、お母さんが、お前さんのことを口走りつゝ、とう／＼一時余り前におなくなりになつた」と告げた。「何に!!お母さんが……」左近は庄屋の前も忘れて、あまりの悲しさに「わつと」許り大地に泣きくずれてしまつた。其の拍子に瓢箪を取り落したので、其の口から苦心の水が流れ出して道下の凹地に溜りだした。小さな口から滾々として、流れても／＼水は盡きず、凹地は青々とした水を湛へた池となつてしまつた。この池は後、里人から孝池水と呼ばれ、大切に保護されたが如何なる大雨の時でも決して濁ることがなく、左近の盡した孝養を永久に物語つてゐるようだ。「伯父さん大雨が降つても濁らぬとは不思議だね」と俊太郎は伯父の顔を見て云つた。「全く不思議だな。瀬戸の發電所のすぐ近くに屏風岩といふ岩山があつて、その中腹に白い小さな旗の澤山立て、ある所が見える筈だからよく氣をつけて見なさい。そこは左近大明神として祀つたお宮のある所なのだ」

「中山七里は景色もよいし、面白い傳説にも富んでゐるんですね」「うむ、三原には椀貸

せ淵もあつて中々面白いよ。又話そう」此の時長く停車してゐた列車は勇ましい汽笛の音と共に下呂温泉さして走り始めた。

### 五〇 白米城

「御注進、御注進」聲も荒々しく息せききつて家臣が駆けつけたので、牛丸攝津守は直に引見し「して注進の趣は何ぢや」「里民共の語る所によれば、田中の城主廣瀬山城守が不意に當城へ押し寄せる様子にございます」「何に、山城守が攻めて參るとな」攝津守も驚いた。それは兵糧の備は十分あるが、水が大變乏しかつたからである。十分の兵備もどこのへないうちに、注進の通り山城守は澤山の手兵を率ゐて、一もみに攻め落さうと勢するぞくせまつた。攝津守は小勢なれども城兵をはげましく防ぎ戦つたので、敵も攻めあぐみ水の手をたち切つて兵糧攻め水攻めにするにしようとした。ところが二日たつても三日たつても城は中々落ちない。城中では惜んで使つた水が今は一滴もなくなつて、其の苦しきは一通りでない。其の時攝津守は「貯へある白米を全部二の丸に持ち出し、水にて馬を洗ふ眞似を致せ」と命じた。如何に防戦につとめてもやがては落城の悲運を見る城のこと、城兵たちは命せられるまゝに白米で馬を洗ひ始めた。はるかに之を眺めた山城守は、水攻めも駄目とさとり城の圍をといて退却し始めたので、攝津守は大喜びで云つた。「白米で

馬を洗はせたは敵を欺く爲であつたが、欺かれたとも知らず山城奴退却とはさてく面白  
い事になつたぞ」。これから此のお城を白米城と云ふ様になつた。

五一 太子 櫻

昔聖徳太子と申上げる大變佛教を信じなされたお方があつた。お父君用明天皇が御病氣に  
おかゝり遊ばされると非常に御心痛になり、其の御惱御平癒祈願のために三体の御自像を  
彫刻なされた。そして一体は法隆寺に、一体は四天王寺にお納めになり、残る一体は宮中  
に安置してあつた。推古天皇の御代、皇命によつて各國に佛殿を建立することになり其の  
用材を天生谷から採ることになつた。其の命を奉じて飛驒に來たのが鞍部多須奈であつた。  
多須奈は立派な森林を發見したので、大喜びで従へて來た數十人の飛驒工に採らせること  
になつた。所が何といふ不思議であらう、工たちの振りあげた大きな斧が、一度大木に打  
ちつけられると、むく／＼と眞赤な血潮が切り口からふき出し始めた。どの木もく／＼。  
「はて、變な事だぞ」とあくる日は違つた林へ入つて伐り始めると、あたり一面に濃霧が  
立ちこめてしまつて一寸先も分らなくなつてしまつた。尙も伐りつゞけてゐると雷鳴もの  
すごく、はては豪雨降りしきつて到底仕事することも出來ない様になつてしまつた。  
あまりの事に驚いた多須奈は、早速都に上つて天皇に事の由を申上げた。天皇も其の異變

にお驚きになり、宮中に安置してあつた聖徳太子の尊像を給はり、「此は法隆寺、四天王  
寺に安置のものと共に日本三体の尊像である。この像を安置して伐採を致せ。必ずや妖怪  
變化は退散するであらう」との御詔があつたので、再び天生谷に歸り其の地に安置して伐  
採を始めた。此の前にはあれ程不思議のつゞいた森林も、今は何の變事も起らず、無事仕  
事を完了することが出來た。此の尊像は、後久しく天生谷にあつたが、平清盛が勢力を得  
て都を福原に御遷し申した頃の事である。悪疫が流行して其の爲に斃れる人が多かつた時  
清盛は諸國の尊像を内裏に集めて祈願した。時に飛驒の太守は飛驒守平景綱であつたが、  
往昔の傳説をき、早速此の尊像を携へて都に上り獻納した。そのため今まで流行してゐた  
悪疫も、いつとはなしに少くなつてしまつた。平家が福原の都を捨て、屋島に走つた後、  
此の尊像は他の平家の重寶と共に、經盛の妻益代姫に守られて、鎌倉に送られたが、益代  
姫の子小四郎輝經が故あつて飛驒に流された時、母の携へ來た重寶と共に尊像を奉じて高  
原郷に來た。そして常蓮寺に安置したものだ云はれてゐる。所が不思議はそればかりで  
はない。寛永年中に故あつて尊像を越中の國八尾町聞名寺へ移したところが、其の年から  
三年間飢饉が打ち續き、あまつさへ笠ヶ岳に黒雲が覆ふて妖怪しきりに横行し、時には天  
空より石をふらせる事さへあつたので、領主金森侯も「隣國は皆豊作であるのに此の國だ  
け不作とは不審だ」とて、農民に聞かれた。農民の申上げるには「常蓮寺に傳はります聖

徳太子の靈像を越中の國開名寺へ移し奉つたために、此の始末になつたこと、存じます」  
 とあつたので、寛永五年六月早速使者を開名寺へつかはし、引取方の交渉をさせなされるこ  
 とになつた。六月二十六日の夜更に戸外へ出た一人の百姓が、ふと常蓮寺境内にある櫻の  
 樹上に赫々たる光明を放つ太子の像をはるかに拜したので、近所の者をたゞき起してその  
 由を告げた。皆の者が出て見ると、成る程尊像があり、と拜せられたので、皆は「聖徳  
 太子様の再び常蓮寺へ還御したまふ表示であろう」と喜んでゐると、翌二十四日に金森侯  
 の使者が果して靈像に供奉して歸つて來た。百姓共は其の日境内へ群集し悦んで晝夜踊り  
 ぬいた。今でも二十四日の縁日には右の踊が行はれてゐる。そして靈像のおどどまりにな  
 つた櫻は、其後益々成長し御影櫻と云つて昔の靈驗を永久に物語つてゐる。

## 五二 歌之助塚

「又今夜も甚作は歌つてゐるなあ。何と云ふよい聲だらう」晝をあざむく様な月夜、仲天  
 にかゝつた月はあまり廣くもない益田川沿岸の田や畑や村をくまなく照してゐる。月に照  
 らされた益田川の水の面をすべつて、對岸少ヶ野から聲自慢の甚作の歌ひ聲が聞えてくる  
 のであつた。甚作の聲を聞くと、塚田村の人々は云ひ合せた様にかう云ふのであつた。甚  
 作はいつも月夜の晩に限つて、月に向つて夜の更けるのも忘れて無心にたゞ歌ふのであつ

た。聲は静かな山里の空氣をふるはして、遠く／＼ひろがつてゆく。そして聞く者を引き  
 つけずにはおかなかつた。その中に誰云ふともなく「甚作が自慢らしく歌ふから、誰か塚  
 田村からも出て歌の競争したら面白からう」と云ひ出した。村の人々は此の村にも聲の  
 よい男が居て甚作に負けない様に歌つて呉れたら、塚田村としても面目がたつと思つた。  
 ところが或る晩のこと、塚田村の小高い丘の上から、不意に美しい聲で歌ひ出した者があ  
 る。それは甚作の聲に優るとも劣ることのない美しい聲である。其の聲の主は誰であらう  
 塚田村の彦六と云ふ若者であつた。彦六の聲を聞いた甚作は、これは大敵が現れたと許り  
 聲を限りに歌ひつゞけた。それから村の人々は、二人が益田川をはさんで兩岸から聲はり  
 上げて自慢のしやいをし、われ劣らじと歌ひ競ふのを時々きいた。

翌年の春になつて山里の塚田村にも、少ヶ野村にも春の女神は訪れて來た。村では皆、今  
 年の田植は二人の歌競争で面白からうと噂してゐた。だん／＼と時は流れて田植の期節と  
 なつた。案の通り甚作と彦六は、益田川を隔て、毎日／＼田植歌を競ひ、互に負けじ劣ら  
 じと聲張り上げて歌つた。歌つた／＼田植の期間中歌つた。そのせいでもあらうか、田植  
 がすむと甚作は拍子ぬけした様に病氣にかゝつてしまつた。彦六も田植のすんだ日から、  
 身体具合が悪いと云つて床に伏す様になつた。そして不思議にも二人は相前後して此の  
 世を去つたのであつた。村の人たちは「二人は精をつくして歌つた爲に、身体をこわして

死んだ」と氣の毒に思ひ、川の西と東に相對して兩人の塚を建て、やつた。その塚は今でも残つてゐて昔を物語つてゐる。村の人たちは今も此の塚を歌之助塚と呼び、月夜の晩には塚の中から澄みきつた田植歌がきこえて來ると云ひ傳へてゐる。

五三　がた／＼橋

金右工門の家の前には谷川が流れてゐるので板橋がかけてあつた。その板橋を渡つてだら／＼坂を上つて峠を越すと、お隣りの村へ出るのである。それで晝は金右工門の前の道を車をひいた百姓も、馬をひいた百姓も、隣り村へゆく荷を背負つた商人も通るのであつた。ところが或る晩のこと、金右工門の家では一家の者が台所へ集つて夜業をしてゐると、から／＼、ごと／＼と橋を渡る音が聞えはじめた。お隣りの村へ行く人か金右工門の家へ來る人以外に渡らぬ橋を、から／＼、音をさせて渡るのだから、金右工門たちはすぐ不思議に思つた。「誰だろうな。こんな眞暗な晩に橋を渡るとは」と誰か云つた。しかし足音はそれつきり家の前を通るでもなく靜つてしまつた。しばらくするとひそ／＼話聲が聞えて、何人かが隣り村の方へ行く様子である。「何か急用でも出來たと見えるな。此の暗さでは峠ごしは困るだらう」と云ひながら、金右工門が門口をあけて外を見たが、誰一人も通つて行く姿は見えなかつた。翌晩も氣をつけてゐると、がた／＼、ごろ／＼音を

させて橋を渡る音がしたかと思ふと、しばらくたつてひそ／＼話しながら金右工門の前の道を通るものがある。それから云ふものは毎晩無氣味な音をたて、は橋を渡り、いつもひそ／＼話しては峠の方へ上つて行くのであつた。どんな人間が通るのかと戸を細目にあけて一生懸命に見てゐても、話し聲だけは聞えるが姿が見えない。或る晩雨が降り出した。その時やはり橋を渡る音が聞えたかと思ふと、間もなくしく／＼泣きながら峠の方へ上つて行く音がした。雨が降ると屹度しく／＼泣いて通るのであつた。金右工門も氣味が悪くなつて來たので、一日町へ行つて、占者をたづねて占つてもらふことにした。すると占者は「貴殿の前の道はお隣り村から更に越中の立山までつゞいてゐます。立山にはいろ／＼おそろしい地獄がありますので、貴殿の家の前を通るのは立山の地獄へおちてゆく亡者の群です」と占つて呉れた。日頃元氣な金右工門も此の氣味の悪い占を聞き、氣の沈んだ顔で家へ歸つた。そして家内の者にも占者の話をきかせ、橋からはなれた所に家を建てかへてしまつた。尙ほその亡者の冥福を祈るために、町からお坊さんを招いて盛大な供養をいたし、自分の家のあつた近所には經塚をつくつて追福を祈つた。それから毎夜／＼板橋を渡つた亡者たちの足音が、はたと止んでもう聞えない様になつてしまつた。今でも金右工門がつくつた經塚は残つてゐる。

## 五四 蛤 石

「此の二つの石は俗に蛤石と申しまして、昔から不思議な石として恐れられて居た由、百姓共は申して居ります。夜更けに及び人が静まりますると、石の一方より白氣を吹き、二石が相應じてうなり聲を發するとか申しでゐます」 「うむ、それは不思議な……」所は小鷹利村高野、蛤城の天守平。金森長近公は飛驒平定のため入國し、昨日までの戦で蛤城を占領し、今しも家臣の者から報告を受けつゝ、天守近くにある蛤の形をした米俵大の雌雄二つの石を、じつと馬上から見入つてゐる。「何はともあれ面白い石じや。早く高山城まで運ぶ様手配を致せ」 「百姓共の申します事が眞であつて、御主君様にたゞりでもありましては大變で御座います。高山城へ持參のことは是非とも思ひ止りを願ひたう御座います」 「いや、此の戦國の時代に朝夕戦をくりかへす吾等、百姓共の迷信に恐れてゐては大事をなしとげることは出来ぬ」飛驒平定の意氣にもえた長近公は、愉快げに雲一つない秋空を見上げてからくく笑つた。あくる朝數十人の人夫を備ひ入れられ、いよく蛤石は高山城に運ばれることになつた。「こりや中々重いぞ。普通の石の重さではない」「なる程重いな」 「しかし俵大の石、大したことはあるまい」かうした話が人夫の間に交されてゐるのをきいた。上役の武士は「何にしろ不思議な石、よく氣をつけて運ぶがよ

いぞ」と特に注意を與へた。蛤石は人夫のかけ聲も勇ましく、二個共天守臺から引き出された。だん／＼車が高山町に近づくにつれて、俵程の石何程の重さがあるものかど見くびつた人夫共も、石の重くなるのを感じ出した。それから段々重くなつて、やがて櫻野の邊まで來た頃には重くて／＼車が少しも進まぬ様になつてしまつた。「こりやいかん、人夫を増せ」上役の武士の聲に忽ち人夫は百數十人に増加した。けれ共石はいくら引つぱつてもびくともしない。「何、まだ駄目か。もつと人夫を増せ」上役の下知に、又數十人の人夫は増された。しかし石はびくともしない。遂には千數百人の人夫になつたが、石はどう／＼動かす果てはぶう／＼と無氣味な唸り聲さへたて始めた。この有様にいよくおそれをなした上役の武士は、「之は如何にも不思議なことじや。一同の者、主君長近公の下知を聞く程に、しばらく休息致し居れ」一散に長近公のもとにかけつけ、事の次第を仔細に語りその指揮を求めた。「うむ」と深く考へこんでゐた長近公、何事か思ひあたるらしく「百姓共の申し條を聞き入れず、石を運ばんとせしは我が誤りであつた。その不思議の石は早速もとの天守に送り返せ」と命じたので、いよく人夫共は又蛤城さして送り返すことになつた。所が不思議／＼、さき程まであれ程重く、びくともしなかつた石が、かる／＼と數十人の人夫でもとの地へ送り返すことが出来たと云ふ。そのことがあつてから數十年後、飛驒一圓にわたつてひでりつゞきで、宮川なども涙ほどの水しかない有様になつ

たことがあつた。そして晝どなく夜どなく雨乞がつゞき、夜になるとあちこちの峯で火をたいて雨乞をする様子は、見ても物すごい程であつた。此の時一人の百姓が「これだけ一心こめた雨乞も何のきゝめもない。今はあの不思議の力を持つ蛤石を動かし宮川の淵に沈めて雨乞するより外にあるまい」と云ひ出した。一同のものは「それはよいことに氣がついた。何しろ金森侯の力ですら自由にならなかつたあの石、どんな不思議をあらはすかも知れない。ものはためし、一つやつて見やう」と、どうく村人たちによつて、一石が城趾の下を流れる宮川の淵へ沈められた。この蛤石が淵の底深く沈んだと思ふ頃、南の空にむくくの大入道雲が現れはじめた。それが段々大きく、段々黒さをまして、一天黒雲で被ひつくされてしまつた。そしてバラ／＼大粒の雨は降り出した。一同の者は感きわまつて思はず手を合せて黒雲を拜んだ。

### 五五 嫁ヶ淵

高山町から富山の方へ出る街道に富山通ひの旅人を相手に宿屋をしてゐる、天木なにがしと云ふ人があつた。昨年ふとした病氣がもつて妻が死んだので、七十あまりのお母さんと今年三歳の長男とを相手にして、さびしい生活をしてゐた。或る春の夕方、一人の巡禮姿の女が此の宿を尋ねて、「私は國々の寺々をめぐる巡禮でございしますが、次の宿場

まではまだ遠い様でございすから、今宵お泊め下さることは出来すまいか」と一夜の宿を求めたので、早速一室に案内して泊めることにした。不思議なことには、巡禮の泊つた夜中からはげしい雨降りになつた。翌朝起きて見ると車軸を流す様な猛雨が降りつゞいてゐる。漸く起き出た巡禮は「今朝出發と思ひましたが、此の猛雨では、とても私の様な弱い者は歩けそうにもありません。御迷惑でせうがもう一晩お泊め下さい」「いやお氣の毒なことです。此の雨では御出發は思ひもありません。心おきなく雨の晴れるまで御滞在なさい」「御親切なお言葉、何卒よろしく願ひ申します。」と喜んで滞在することになつた。雨は翌日になつても止み相にもなく降りつゞいた。翌日も又降りつゞいた。宿の近くを流れる神通川は氾濫して堤は切れる、道はこはれる大騒動。巡禮は別に毎日／＼の猛雨を氣にする様子もなく「毎日かうして御厄介になつてゐるのも心苦しいことですから無調法者ではありませんが、勝手元の手傳なりとさせていたゞき度うございす。」と主人の斷るのを聞かす、よく氣をきかせて働いて呉れる。今日も主人が水害の道ぶしんに村人たちと出かけた後、お母さんは巡禮に向ひ「お國はいづれでございすか。若いおからだで諸國を御巡禮なさるとは何か仔細のあることと存じます」と云へば、「何れの國の者と申す程でもございせん。江州長濱在の百姓の娘でございすますが、縁は奇なもの都の呉服問屋の若様に所望されて、自分の身分も考へず都へ参りましたが、昨年の秋主人は今年四



つになる女子と私をを残して他界してしまひました。あまりのあわれさに無情を感じ諸國をかうして巡り歩き、亡き夫のあとを弔つて居ます。お家の坊ちやんを見るにつけても、都に残して参りました娘の事が思ひ出されまして、悲みに堪えません」 「御覽の様に、家の息子も昨年嫁に死別れ、老ぼれの私と長男を相手に毎日働いて居て呉れます。失禮な申し分だが、貴女、私の息子の嫁御になつてもらふことは出来ないものでせうな」 「國元の両親も已に死にまして誰一人頼る者のない私、御主人様さへ御承知下さいますならば仰に従ひませう」この返事に、お母さんは思ひがけぬよい嫁を見つけたと大喜び、俵の歸るを待ちかねて嫁の一件を話せば、息子も別に不平も云はず嫁に迎へることになつた。翌る日からは朝まだきに起きて働き、夜もよく仕事にはげむので、お母さんも息子もよい嫁をもらつたものだと思んでゐた。その中にお母さんは年のせいでもあろうか、別に悪い所とは無いが病の床に伏す様になつた。山間の不便な村里のこと、お母さんに進める食物とて別に珍味もないが、神通川から鮎や鱒を釣つて来て進めるのが、息子の老母に對する何よりの孝養であつた。始めの中は副業の畑仕事のひま／＼に川に出かけては魚を釣つて来てゐたが、旅人の出入も多くなり、畑の仕事が忙しくなつてからは嫁が代つて釣に出かける様になつた。不意のお客があつても、嫁が釣竿を持つて川へ行つたかと思へば、鮎も鱒も釣り上げて歸つてくる。始めの程は氣にもとめなかつた主人も不思議に思ひ出し、

或る日嫁の出かけた後を見失はぬ様につけて行つた。六七丁程はなれた淵へと行くので、どんなにして魚を釣るのか見てやらうと黍畑にかくれて居ると、それとも知らぬ嫁は淵の傍なる岩かごに立ちザンブと許り身をおごらした。見れば忽ち蛇身と變じ、淵をさぐつて一尾の大きな鱒を捕へて上りかけた。此の様子に主人はおどろきの餘り、思はず「アツ」ど大聲をあげたので、嫁も今はこれまでと、鱒を岩になげつけて自分はそのまま、淵の底深く沈んでしまつた。その事があつてから此の淵を嫁が淵と呼ぶ様になり、今でも手のあとと魚のあとのある石が残つてゐる。その宿屋の血すぢは今もつゞいてゐるが黍をつくらんと災難がおこると云ふので、自分の家は勿論親類でも黍をつくらぬとつたへてゐる。

## 五六 白鷺の湯

小坂晝出て萩原こして、下呂に宿るか湯の島に

下呂は湯の島夫婦のいで湯、鷺と薬師の仲のよさ

向ふの湯の町から川面をすべつて、三味の音と共にこんな下呂小唄が流れて來た。こゝは湯の島水明館の一室、思ひ存分温泉にひたつて快い湯づかれを覺えた昌吉は、妻や子供を相手に今夕食の膳に向つてゐたが、町からのさんざめきにふと箸をとめ、女中に向つて「女中さん、あんたは此の土地の生れかね」「はい左様で御座います」「それでは、下

呂の事はくわしからうね」「はい、多少の事は存じてをります」「下呂の温泉の名は度々聞いてゐたが、来て見れば随分陽氣な所だね」「はい、皆様がそんなにおつしやいます」「下呂は湯の島夫婦のいで湯、鷲と薬師の仲のよさ、………うむ夫婦のいで湯つて云ふのは、どこにあるんだね」「それは當地に白鷲の湯と薬師湯とが御座いますので、二つの事を云つたものです」「あゝそうか、………成程。白鷲の湯と薬師湯。うむ中々面白そうな名だが、何かその名の起つた面白い傳説でもあるんかね」「はい、色々面白いお話があるのでございます」「ちと聞かせて貰ひ度いものだ。おい正夫や春子もあとで女中さんから湯のお話を聞かうね」「お父さん、それは面白いでせう」夕食のお膳も片ついてから、「今夜はお客様も少く暇がありますから」と、女中が鷲の湯の傳説を語りに来た。「當地の湯はすゐん昔から湧き出してゐた様で御座います。何でも村上天皇様の御代とか申してゐます。あの湯ヶ峰の頂上附近に温泉の湧き出したのが、下呂温泉のそも／＼の始めだと云はれてゐます」女中は河をへだて、そばだつ靈峯を指しながら話をつゞけた。「それから三百年もたつとばつたり湧きやんでしまつたので、何か變つた事でも起る前兆じやないかと、大變心配してゐたそうです。ところが何年かたつ中に、里人も温泉のことを全く忘れたものゝ様に語るものさへなくなつてゐた所、ある日此の地に住む一人の百姓が川沿の道を通つてゐますと、はた／＼と羽ばたきの音も高く一羽の鳥が川

原へ舞ひ下りて來ました。「はてな」とよく見てゐると、それは大きな白鷲で、川原の水溜へすつくと立つたまゝ動かない。百姓は珍らしく思ひ、小石を拾つてぼつかり抛つたが動こうともしません。よく見ると片脚が傷ついてゐる鷲でありました。「お父さん。どうしたんでせう、その足は………」「まあお待ちなさい。女中さんのお話の中にわかつて來るだらうからね」「見事な白鷲、これは珍らしいと見てゐますと、やがて嬉しげに一聲強くないて空中高く舞ひ上り、さも軽るげに二三度大きく輪をかけたかと思ふと、附近の大杉の梢に翼を休めたそうでございます。百姓は不思議に思ひ、川原に下りて何氣なく白鷲の脚をひたした水溜へ一足入れると、狂氣の様に「温泉だッ！」と叫んだそうです。そして折から通りかゝたお百姓に一部始終を語り、白鷲のあとを追つて大杉の下まで駆けつけますと、白鷲の姿は見えず根元には燦として輝く薬師の尊像が一体横たはつてゐたので、再び驚いた百姓は夢の様な心地で、尊像を抱き上げたさうです。そして大杉の根元に一字の堂を建て、靈像を安置することになつたのが、今残つてゐる温泉寺薬師だと云はれてゐます。土地の人々は薬師如來が川原に湧き出す湯をお知らせ下さつたにちがひないと語り合つたと申します。其の因縁で當地には薬師湯、鷲の湯と云ふ二つの共同浴場が出来てゐるのでございます」「やあ、汽車／＼」春子が大聲で、轟々と近づいて來る夜汽車を見てかう叫んだ。女中は熱心にかたりつゞける。「其の後里人の努力で日本三名泉の一

とまでになつたそうですが、幾度か益田川の洪水で荒され、一時は絶滅の状態にまでなつてゐたのでございます。ところが年を追ふて延びて来る高山線は、平和な夢を山郷に見てゐた人々の心を刺戟し始めたわけです。そこでかうしては居られない、下呂發展の如何は一にかゝつて此の温泉にある。天恵ゆたかな此の靈泉を徒に地下に埋没させておくのは残念だ。そんな大きな犠牲を拂つても發掘し、昔にまさる名泉としたいと目覺めた人達は、一致團結涙ぐましい努力をつゞけて、今日の盛大を見るに至つたのです」と話を結んだ。さつきの三味の音は相變らず聞えてくる。

「飛驒は湯どころ平湯に蒲田、下呂の湯の島濁り河」陽氣な音に家族のものは、たゞうつとりとして聞き入つた。

### 五七 お禮の轡

今から二百五十年程昔の話である。

益田郡の竹原と云ふ所に今井彌左衛門と云ふ人が住んでゐた。此の人の先祖は木曾義仲の家臣であつたが故あつて浪人し、竹原に来てとう／＼武士をすてた人だと云はれてゐる。彌左衛門は流石に武士の血を受けたとゞけあつて、大膽で武術の大變好きな人だつたと云ふ。或る朝下女のお八重が朝水を汲みに外へ出ると、どこからともなく大きな狼が出て来て、

お八重の足もとにすわつて何かしきりに頼む様をした。お八重は驚いて「旦那様大變でございます」と家の中へ駆けこんだ。「何だ、朝から騒々しい」と、彌左衛門はお八重を見ると、眞つ青になつてたゞふる／＼ふるつて居る。漸くお八重からわけをきいた彌左衛門は外へ出て見ると、成程大きな狼がまだへ苦しんでゐる。彌左衛門は早くも其の様子から察して、多分他の獸を食ひ其の骨片を咽にたてて苦しんで居るのであらうと考へ、早速持つて居た手拭で腕を包み「今から汝の咽を治療してやるから我に危害を加ふるなよ」といひつゝ、狼の口の中へ手を入れてしらべて見ると、案の通り大きな骨片が咽にさゝつてゐたので、これを取り除いてやつた。狼は嬉し氣に一旦地にひざますきお禮をいふ様に頭をさげたかと思ふと、間もなく振りかへり振りかへり山の方をさして立ち去つた。

あとで彌左衛門一家は、この狼についていろ／＼噂し合つた。こんな事があつてもう半月もたち、狼の事なんか忘れかけて居る時の事であつた。彌左衛門の家では夕飯をすまして、ゐろり端で四方山の話に花を咲かせてゐる時、表にあつてじやらく／＼と聞きなれない物音がする。何事だろうかと下男の久助が出て見ると一匹の狼が立つて居るので、久助は大聲をあげて「旦那様、又狼が参りました。早くお出下さい」と叫んだ。やがて彌左衛門が出て見ると、狼はうれしげに足元へよつて來た。見れば此の間助けてやつた狼である。狼は口にくわへてゐた轡を彌左衛門の前に据えたかと思ふと、地にひざまづいて頭をたれ丁度

御禮でも言つて居る様である。彌左衛門は狼が此の頃の謝禮に來たのであろうと察し「あれ許りのことにお禮に來るには及ばなかつたに。人のはひをかげば數里を遠しとせず襲ひ來る汝にしては、眞に感ず可き心掛のものじや」と頭をなで、やると、其の心が通じたものか程なく狼はやみの中へ姿をかくしてしまつた。其の後村中へ聞き合せたが、轡を失つた者は一人もないので、彌左衛門は不思議に思ひ家の寶物にした。そして家の紋所を轡の紋に改めたと言はれてゐる。それから此の狼はうらの竹林の中に起臥してゐたが、彌左衛門一家は勿論村の人々に危害を加へる様なことはなかつた。しかし村の人たちは夜彌左衛門の家へ行くことを大變恐れた。狼は五六年程も竹林の中に暮して居たが、とう／＼死んでしまつたので、懇に埋葬してやり、墓石まで立て、やつた。

五八 月 ケ 瀬

今日も五郎兵衛は不愉快な顔して、斧を肩に山へ登つて行つた。あとに残つた妻女も、一人娘の信夫をつれて畑仕事にと出かけて行つた。五郎兵衛一家は奥飛驒の小鳥川に沿ふ餘部の里に住む、極く貧しい水呑み百姓であつた。來る日も／＼ほの暗い中から山へ分け入つてせつせと仕事をして、暮しは少しもよくならない。殊に五郎兵衛をして益々陰鬱にしたのは、一人娘信夫のことであつた。彼女は生れつき見るに堪へない様な醜い女で、も

う二十五をすぎたと言ふのに、誰一人婿にならうと云ふ者もないので、あれを思ひ之を考へ此の頃では仕事に張り合ひがなかつた。夕飯もすみ、娘のねた後で、五郎兵衛夫婦はろりばたでひそ／＼と語る。「困つたものだ、あの娘には」「早く婿を探さぬと、私共のゆく末も心細くてなりません」「さうだ。おれも毎日／＼山で木を切りながら、それを思つては天の神様によい婿殿をお授け下さる様御祈りしてゐるが、何のしるしもない」「全く困りました」こんなさゝやきが戸をもれて娘の寢所まできこへた。年ころになるにつれて自分の醜さを氣にする様になつた信夫は、一年一夜のたのしい／＼鎮守の祭りの夜、村の若い男女は云ふに及ばず、老人まで踊つて夜を更かすのにどうしても顔を出さない。孟蘭盆になると盆踊があつて、若い男女は五日も六日も心ゆくまでおどりぬいて、片田舎には似合はぬ盛大な催をする事になつてゐるが、それでも信夫は顔を出さない。かうして我と我が身を呪つてゐる信夫は、今又かうした老父母の話し聲を耳にしては、小さな胸はかきむしられる様な思ひに満されてしまつた。そしてその夜は泣いて／＼泣き明してしまつた。花は散り青葉茂れる夏も夢の間に過ぎて、いつしか野分が吹き渡る時が訪れ、孟蘭盆と村の祭りといふ村人にとつては歡樂の時が來た。どの男女もひとり其の胸のときめくのを辛じて抑へつけて待つてゐる此頃を、五郎兵衛一家は暗い影におほはれて暮してゐた。そしてとう／＼孟蘭盆の日は來た。満月が皎々と光を放つて下界を照してゐる。

今しも家をひそかにさまよひ出た信夫は、小鳥川に架つてゐる名ばかりの橋の上まで来て、碧潭に碎けて流れる満月の影を見下ろして、天の無情を呪ひ我が身の不幸をかこつてゐた。無心に月影を宿して流れる水面を見つめてゐた信夫は、急に「こうして生きながら苦しみをなめるよりは、一層死んだ方がよい。天國へ行つて樂園を求めた方がよい」といふ様な氣で一杯になつてしまつた。もう死ぬ覺悟をきめて再び月を仰ぎ見た信夫は、急に喉の渴きを覚え始めた。そしてその渴きが段々はげしくなつて、つひには耐へられなくなつたので川へ降りて水を掬つてがぶつと飲み干した。その時兩手で掬ひ上げた水の中へ、皎々たる月影が映つてゐた。信夫はその月影もろとも飲みほしてしまつたのである。喉の渴きの薄らぐと共に、信夫の胸の中に満ちあふれてゐた自殺と云ふ氣持も亦段々薄らいでゆくのを、自分から感ずることが出来た。やがて川岸から橋の上へもどつた信夫は川面を見た。そして月影のないのに氣づき、天をふり仰いだ、天には相變らず月は皎々と照らしてゐた。しかし水面には月の影は見る事が出来なかつた。

この事があつてから此の村の人々は、再び川面に映る美しい満月の影を眺める事が出来なくなつてしまつた。かくて月日は矢の様に流れて行つた。不思議にも醜女信夫の腹は段々ふくらんで来て、やがて玉の様な赤ん坊を産みおとした。五郎兵衛は信夫が名も知れぬ人の子を生んだのを恥しく思ひ、遂に我家から追ひ出した。信夫は父の命するまゝにいと

しの我子をふりすて、餘部の山深く姿をかくし再び現れなかつた。生れた赤ん坊は名を登美とつけられ、生みの母の乳房さへ知らず祖父母の手に育てられ、日にくすくすと育つて立派な娘となつた。丁度その頃、都から、天子様の命令で都に建てる寺の木材をとるため、此の山中へ来た多須那といふ大工さんに見こまれ、とう／＼その妻となつた。登美は夫多須那の用件も終つたので、夫に従つて、噂にきいた花の都へ上つた。都へ来て見れば吾が夫は天子様のお抱へ大工で、立派な邸に住み、安樂な生活をしてゐる人であつた。登美の喜びは一方でない。此の登美と多須那との間に生れた子供は、烏佛師といつて佛像を作ることが殊に巧みで、父多須那と同様天子様のお抱へ大工として、立派な腕前を振つたといはれてゐる。信夫の佇すんだ橋を月無橋、登美の生れた村を天生と名づけ、昔は月無村ともいつた。そして信夫の月影を呑んだあたりを月ヶ瀬と呼んだが、今では村の名となつてゐる。

### 五九 高坂猫

今から百八十九年程も昔のことである。

萩原町に高坂屋彦左工門といふ大金持の酒屋があつた。高坂屋には四五年前から熊といふ名の猫を飼つてゐた。彦左衛門はじめ一家の人たちは、熊よく／＼と大變にかわいがつて育

てゝゐた。熊も大そうかしこい猫で、よく家の人たちのいふことを聞き分けるので、殊の外皆にかわいがられた。ところが六歳の頃附近の人たちが「高坂屋さんごこの猫が化けるさうじやが見ましたか」「いや見ましたよ。此の間もお宮の境内で一生懸命おごつてゐましたよ」「えらい所を見ましたな。それはどんな姿でおごつてゐましたか」「それがおかしいですよ。手拭で頬かむりをして、集つてゐる他の小猫共を相手におごり出したんで、私もびつくりしましたよ」「一体猫がおどるなんて、どうしたんでせうか。氣でも狂つたのでせうか」「いや昔から怪猫の物語りが多い様ですが、猫が相當な年になると神通力を得るのだといひますな。播州姫路の赤壁大明神なども有名な怪猫の傳説がある様に聞いてゐます」「何れにしる近頃珍らしい事ですな」「いや全くですよ。少々氣味の悪い事です」「こんな噂をする様になつた。その噂が彦左工門の耳に入らぬ筈はなく、下男から此の噂を聞いた日から、一生懸命猫のふるまひを注意して居つた。しかし何も變つた所はないし、近所の人は何を見たのであらうかと、近所の人たちを疑ひはじめた。ところがそれから何日かたつた或る夕方のこと、便所へ行かうと台所のそばまで彦左工門が来た時、熊が勝手元にかけてあつた手拭を、爪で引き落し口にくはへたかと思ふと、一散に裏口からかけ出すのを見つけた。「さては怪しいぞ。何を致すか見届けてやろう」と彦左工門は熊の後をつけてゆくと、ごん／＼鎮守諏訪の森をさしてかけて行くので、いよ

／＼怪しいぞと、こつそり来て見れば、これは又どうした事か。世間の噂の通り近所の小猫が十數匹集つてゐる。熊はやがて頬かむりして自ら音頭をとりながら、小猫と松坂踊を始めたので益々驚いた。之ではごんなおそろしいことを引きおこすかも知れないから、折を見て殺してしまはうと決心した。それからといふものは毎日／＼熊を殺す機會をねらつて居たところ、ある天氣のよい日軒下に日向ぼっこしながら心持よげに眠つて居るのを見つけたので、彦左工門は折こそよければ家に傳はる無銘の一刀を持ち出し「此の怪猫め、思ひ知つたか」とばかり一太刀あびせかけると、不思議／＼見る間に三倍以上に變じ、彦左工門めがけてとびかゝつた。しかし彦左工門は武藝のたしなみがあつたので、二太刀目に怪猫の腦天を斬りさげて即死させてしまつた。彦左工門は刀に猫斬丸といふ名をつけて諏訪神社に奉納し、怪猫は松ヶ瀬といふ所へ埋めた。藎に包んで運ばせたが、藎の外へ怪猫の頭と尾とがはみ出して居たと傳へてゐる。ところが其の頃から彦左工門の家に不幸がつゞき、名高い酒造家も次第／＼に衰へ、つひには零落してしまつた。村の人々は皆猫の祟りであらうと噂したといふ。

### 六〇 比丘尼屋敷

昔馬瀬村に次郎兵衛といつて、近郷に其の名を知らぬ者のない大酒屋があつた。或る朝一

升入の瓢箪を持つて酒一斗を買ひに来た小僧があつた。小僧の差出す小さい瓢箪に驚いた番頭の安吉は怪しみながら、「おい小僧さん、一斗はおろか一升も入らぬせ。ごこの小僧さんか知らぬが、たわけた事を言ふもんじやないせ」 「入るか入らぬか一度入れて見てからいふてくれ」小僧年こそ若けれ中々まけては居らぬ。「おつと小僧さん、若し一斗のお酒が入つた時は十日間毎朝此の瓢箪へ一ぱいづゝ酒を進せる。が若し入らなかつたらどうして呉れる」番頭は小僧の顔を、じろく見ながら笑つて言つた。「御心配には及びません。若し萬が一にも入らなかつたら、此の馬瀬川の水をあなたの眼前で全部呑み乾し、それを直にお酒の小便にして出して見せませう」 「今いつた事を忘れるでないぞ」と番頭はお酒を入れ始めた。一升、二升……あら不思議く一斗のお酒は一滴も餘さず入つてしまつた。番頭は青くなつてふるふるへ出した。小僧は別にほころでもなく、「番頭さん、そう青くならなくてもいい。毎朝お酒は一斗宛買ひに来るが、決してたゞ貰はうとは思はないから安心してもらひたい。たゞ一つわたしの願もきいてもらひたい」 「願ひとは何かいつておくれ。此の安吉で出来ることなら何でも聞いてあげやう」 「願ひといふのは外ではありません。私が一升の瓢箪で一斗のお酒を買ひに来る、不思議にお思ひなさるであろうが、私の身の上をあまりせんぎしないで下さい」小僧は代金を支拂ひ瓢箪を持つて酒屋を立ち出でると、矢の様に走り去つてしまつた。かうして次の日も、次の日

も買ひに来る。番頭はいよく怪しく思ひ、遂に一部始終を主人次郎兵衛に告げた。主人はあまり心にもかけぬらしく、「それは神様のお使ひであらう。粗末にしない様にするがよい」といひつけた。かうして五六日はすぎた。ふと不思議な小僧に興味をおぼえた次郎兵衛は、番頭安吉に「まだ買ひに来るか」と尋ねると、相かわらず買ひに来るとの返事。翌日は次郎兵衛自ら店に出て小僧に酒を賣つて見ると、番頭のいふことに少しの間違ひもない。此の不思議の謎を解くには小僧の行く先をつきとめねばならぬと、小僧の走り行く後を見えつかくれつ追ひかけた。そんな事とは知る由もない小僧は、ひた走りに次郎兵衛の家より程遠からぬ湯の淵まで来ると、岸の岩に立つて何やら口で唱へてゐたが、ざんぶと許り水煙をあげて水底深く沈んでしまつた。さては妖怪變化であつたか、明日は必ずその正体を現はして呉れんと待ちかまへてゐた。翌日次郎兵衛は、今や飛びこまんとする小僧の襟を引つつかみ、「おい小僧まつた」とどなつた。襟をつかまれた小僧は身をもがきながら、「私は龍宮の乙姫様のお使です。毎朝かうして神様にお供へするお酒を買ひに来たのですが、今貴殿にかうした所を見つかつては、乙姫様に合せる顔がありません」と、おいおい泣き出した。次郎兵衛も事の意外に驚いて、「それは氣の毒であつた。何なら私も共に行つて乙姫様にわけを話して詫びてあげようが、しかし人間でも龍宮へ行かれるか」「行かれますとも、さあ私と一緒に」と次郎兵衛の手をとつてざんぶと淵に飛びこんでし

まつた。小僧は波を分け波を分けして進む。次郎兵衛は小僧のあとからおくれじと進む中に、とうとう龍宮に着いた。乙姫様は不機嫌と思ひの外御機嫌よく非常な御接待である。すつかり面くらつた次郎兵衛はあれよこれよと三日三晩の歡待を受け、盡きぬ名残を残して四日目に歸ることになつた。乙姫様は大層別れを惜しみ、せめてもの記念にと一つの寶箱を取り出し、次郎兵衛に申される様「この寶箱は聞耳の箱といつて不思議な箱で、耳にあてると如何なる鳥、けだもの虫類の話すことでも、すべて人間の言葉同様きゝとることの出来る寶箱である。此の箱を若し開けば直ちに死す。如何なる事があつても決して開いてはならぬ」次郎兵衛大いに喜びおいとま申し、前の小僧に案内せられて湯の淵迄來て岸に上つた。折から岸の柳の木の子に一羽の鳥がとまりしきりにないてゐる。次郎兵衛はこゝぞと許り箱を耳にあてると、鳥の曰く「汝龍宮に行きてより今日にて九三年の年月をすぐ。今宅では汝死したるものとして三年の經をあげつゝあり」とあつた。

次郎兵衛の驚き一方ならず、急ぎ歸れば果して鳥の言葉の通りであつた。今の今まで死んだものと信じ切つてゐた家人たちの喜びは一方でない。次郎兵衛も夢の様な三年の三日間の物語をなし、それから前にも増して家業にはげんだ。ところが次郎兵衛の一人娘おみつは、父が毎朝くゞ拜む床の間の箱が不思議でくゞたまらない。何時か中を見たいものだと考へてゐる中、たまぐゞ父が何日か商用で旅行に出かけた。折こそ來れど喜んだ娘は、母

の眼をぬすんでひそかに寶箱を開いて見た。さて箱の中には何物が入つてゐたであらうか。中には見るもかわいらしい一匹の人魚が入つてゐたのである。何ともいひ様のないよいにほひは、おみつの味覺をしきりにそゝり、たへられなくなつた。おみつは前後の考もなく遂に、その人魚をたべてしまつた。父次郎兵衛が旅先で急に悶へ出し、苦しみに苦しんで息を引き取つたとの知らせが、間もなく次郎兵衛の留守宅へもたらされた。つゞいて母も此の世を去つた。人魚を食つた報ひでおみつは長壽を保つた。あまりの長壽におみつは父母を懐ふこと深く、遂に比丘尼となつて日本諸國を巡り、なき父母の菩提を弔つたが、後萩原花池の地に草庵を結んで一生を終つた。死するに當つて黄金と寶を地中に埋め、目標として杉の枝を折つて立てた。これが後雌杉雄杉の大木となつたが、何時の頃か京都御本山建立の時その用材として伐られてしまつたといふ。

### 六一 河童の片腕

河合村のお百姓長平は近年にない澤山の胡瓜を作つた。毎日胡瓜畑を見廻る度に長平の顔はにこ／＼してゐた。それは長平の骨折り甲斐があらはれて、見事な苗がぐんぐん日増しに成長して、澤山の胡瓜がなりさうであつたからである。澤山の花が咲いてどれも／＼實がなつて行くので大喜び、はち切れ相な見事な胡瓜を毎朝ざるに山の様にとつて來て、家



の者を喜ばせてゐた。間もなく朝胡瓜をもぎに行つた長平が、不思議なことに氣がついた。それは今朝に限つて眞直な丸々どよく太つた胡瓜が一本もなく、皆まがつたやせた胡瓜許りなつて居ることであつた。「是は變だぞ」と思つたが、別に人が畑に入つた様子もないのでそのまゝにしてゐた。翌朝行つて見たが、やはり見事な胡瓜は一本もなく、かうして胡瓜の收穫は一朝く減るのであつた。たしかに瓜盗人の仕業に相違ない。見つけ次第ひつ捕へて呉れ様と一生懸命注意をして居たが、別に盗人らしい人影も見えない。全く不思議なことだと思つてゐた。ところがある朝長平が夜明け前に起きて胡瓜畑を見廻ると、二歳位の大きさの、赫黒い裸体の動物が畑で動いてゐるのが見える。不思議に思つた長平は木蔭に身をひそめて様子をうかがふと、それとも知らず其の怪物は胡瓜をちぎつては、さも甘さうにむしや／＼喰つてゐる。なほも見て居るとそれからそれへどうまさうな胡瓜だけを、喰ふは喰ふは恐ろしい程喰ふので、長平もたへかね、恐しさを忘れて飛び出し、いきなり側の棒切をおつ取り撲り倒してしまつた。そして自分の帯でもつて怪物を後手に縛り上げ、ひい／＼泣くのを家までひきずつて来て、露路に太い麻繩で縛り付けておいた。これを見た一家は大騒ぎとなり、隣、近所へも知れ渡り、やがては村中の評判となつたので、見物人がどし／＼押しかけて來た。やがて日も暮れ方となつた頃、台所で立ち働いてゐた下女が、たはむれに有り合せの水杓を取つてほか／＼と撲つた。水杓の中にあつた水

がびしやりと怪物にかゝると、水を得た怪物は俄かに怪力を出し暴れ出した。そして丈夫な麻繩は切れなかつたが自分の左手がもげると其のまゝ後を見ずに、一目散に大川さして逃げ失せてしまつた。翌朝長平が起きて胡瓜畑の見廻りに出かけ様とする時、昨日の怪物がしほ／＼とやつて來て、長平の前に手をついて「私は近所の淵に住む河童でございますが、昨日まで毎日／＼貴殿の大切な胡瓜畑を荒して申譯ありませんでした。今日限り悪い事はすつかりやめてしまひますから、どうぞお許し下さい。そして昨夕逃げる時ちぎれて残した左の腕を、是非おかへし下さい」と、色々斷るので、長平も不憫に思つて「今日かぎり悪い事をせぬと云ふなら許してあげやう。河童はよく人間をさらつて殺すと聞くが、これも以後つゝしむなら腕を返してやろう」と云へば、決して／＼此の村内では悪事をしないと堅く誓つたので、心よく左手を返してやつた。河童は幾度も／＼嬉しさうに長平を伏し拜み、あつくお禮を述べて立ち去つた。其の翌朝のこと、長平がやはり畑を見廻りに出やうとして露路におりてふと掛鉤を見ると、鮮しい川魚が五六尾つりさげてある。不思議に思つた長平は家内の者に聞いて見たが、誰一人知つて居る者がなし。翌朝も、又其の翌朝も、同じ掛鉤に同じ様に川魚が下げてあるので、是はきつと先日の河童が片腕をもらつたお禮に持つて來るのであらういふことにきまつた。こうして十日たち、二十日たち一月とたつたけれども、やはり毎朝川魚が下げてある。三月、五月、一年たつても、相か

はらず下げてある。雨が降る日でも吹雪の日でも、やはりつり下げてある。ところが年がだん／＼たつに従つて掛鉤が朽ちて用をなさぬ様になつたので、長平は永久的のものに仕様と、鉄製の鉤をつくつて木の掛鉤と取り替へてしまつた。翌朝も長平が川魚が下つてゐるにちがひないと起きて見れば、案に相違して川魚が見あたらない。もうそれから此事がなくなつて、長平の家では川魚が食べられなくなつてしまつた。

六二 人 柱

「あらゆる吾等の苦心もすべては水の泡。事ここに至つては策も盡き、力も盡きはてた」投げ出す様に云つたのは久兵衛であつた。人々は途方にくれてゐる時、藤兵衛は決心の色を面に浮べて「如何に吾々が思案してみたところで詮ないこと、今は人柱をたて、再び工事に着手する外はあるまい」と云ひだした。佐吉は「人柱を立てるも容易な事ではないが、此の村々の人たちの難儀をこのまゝに見すて、はおかれぬ」と言葉を添へた。長次郎は、「事は斷行にある。一郷をあづかる吾々が此の際命を惜んでは居られぬ」と藤兵衛の意見に強く同意した。議は人柱を立てることに一決したのであつた。これは今から凡そ二百年前、下荒城郷をあづかる村の重役佐兵衛、權十、藤兵衛、久兵衛、佐吉、長次郎の六人が、八幡様の社殿に參籠して、水害の善後策を協議した時のことである。下荒城一帯の灌漑は

井の口の堰たゞ一つによるともいへる位で、數百人の命はこれによつて支へられてゐるといつてもよい。ところが強い雨が降ると、荒城谷の溪流が一時にどつどつと荒城川に落ちて來るので、堰の破壊されることは度々であつた。しかし其の修築は極めて難工事で、村代々の重役は常にこれに苦しんだのであつた。安保の水害によつて井の口の堰は破壊せられ下荒城郷の人々は、堰の修築を何よりも大切な事として先づ之に着手した。そうしてそれが漸く出來上らうとするある夜、豪雨降りしきつて又もや堰は跡方もなく押流され、數百人の辛苦は一夜にして水の泡と消えてしまつた。六人の協議が人柱を立てることに一決したのは此の時であつた。しかし誰を立てようかといふことになつて、話が行きなやんだ。六人の重役はそれ／＼死を決した。藤兵衛は「すべては神の思召にまかせる外はない。一同これから井の口に行き各自の氏名を記せる紙片を水中に投じ、その紙片が最初にあの激流に呑まれた者が人柱に立つことにしては如何に」と云ひ出た。一座の者は勿論異議を唱へなかつた。六人は紙片に自分の氏名を記すと、打ちそろつて井の口の堰あとに向つて出かけた。今は一生の大事と、それ／＼一心に神に祈つて同時に紙片を中流に投げ入れた。六人はまじろぎもせず紙の行方を見つめてゐたが、六枚の紙片は後になり先になりつゝ段々押流されて行つて、渦き流れる激流まで來るや、藤兵衛の紙片がだん／＼巻きこまれ、やがて底深く影をかくしてしまつた。此の時、藤兵衛はかたちを正し「神の思召にかなつ

て人柱に立つこと、身の面目であり家の名譽である。後事はすべて皆様に、よき様に取計らつていただきたい」と一禮して家に歸つた。さて一家の者を集めて事の次第を物語り自分は一室にこもつて斷食齋戒の用意に取かゝつた。藤兵衛が人柱に立つとの噂は忽ち村から村へ傳つていつた。村々の感激は一通りではない。或は藤兵衛を惜む涙となり、或は感謝の念となり、或は堰修築期成の願ともなつた。此の頃鶴巢村に藤十郎といふ年まだ十七歳のまことに心掛のよい若者があつた。我が村の名主藤兵衛が人柱に立つとの噂を聞いて思ふやう「藤兵衛殿なきあとに我が村から出て、藤兵衛殿程のはたらきをする人がなく、従つて井の口の堰も急速には出来上らうとは思はれぬ。さりとて今日の場合人柱に代る者がなくては、自ら工事にあたりなさる事も出来ぬわけ、吾いまだ年若けれども一命をさゝげて人柱に立ち、下荒城郷の人々の爲に盡さう」とかたく思ひ定めた。そして名主藤兵衛が家に至り「おそれ多い事ながら今度の人柱には何卒私を立たせていただきたい。名主殿なきあとは井の口の堰修築は思ひも寄りませぬ」と願ひ出た。藤兵衛はおごそかに「その志はうれしいけれども、神の思召にかなつた此の度の人柱、これを他人にゆするべき事か。まして吾は年老ひたれど、そちは年若くして將來多き身体、村の人々と力を合せて働くこそ村人への報恩であらう」とさとした。けれども藤十郎の決心は固い「名主殿の決心ももとよりひるがへし難い事とは思ひますが、自分が代らうと決心した一念も今は動かすこと

が出来ません。何卒この藤十郎を人柱に立たせ下さる様に」と理をつくし至誠をこめて、ひたすらお許し下さる様にと願つた。始めは中々聞きいれなかつた名主藤兵衛も、遂に美はしい藤十郎のまごゝろに動かされて「そちのかうした清くうるはしい心こそ神も受納下さるであらう」と藤十郎の願を許した。許された藤十郎の喜は大變なものだつた。四月三十日から一週間齋戒沐浴して、いよく人柱に立つことになつた。この世から神に等しい若者は、朝とく起出でて衣服を改め、父母を始め親しき人々に永のいとまを告げ、定め時刻になると藤十郎は駕籠に乗つて村の重役たちにまもられ井の口に着いた。駕籠をおりた藤十郎は改めて八百萬の神々に最後の禮拜をとげ、またなきあとの形見にと髪を切つて両親に送つた。再び駕籠に乗つた藤十郎は堰の中程まで運ばれた。此の時駕籠の前で神官がのりを高く讀上げた。それが終ると群衆は涙と共に藤十郎を見送つた。駕籠は静かに水底深く沈んで行く。人は聲を吞んで語る者は一人もない。重苦しい沈黙がつゞいた。今は全く駕籠のかげすらなく、河の水は何事も知らぬかの様に渦き流れてゐる。尊き人柱は立つた。漸く我にかへつた群衆は一命をかけて、この工事を完成しなければならぬと誓つた。藤十郎の至誠にさめた村人の決心は鐵石よりも固く、いよく工事が開始されると六人の重役は不眠不休で工事の指圖にあつた。無我夢中になつて工事を急いだ甲斐あつて、さしもの難工事も程なく成就の日をむかへることが出来た。

それ以来井の口の堰には永代の深き水を湛へ、下荒城郷の村々は永遠に恵まれた土地となつた。やがて藤十郎の霊は氏神の森に合祀され命日には今尚ほ追善供養が行はれてゐる。人の力か神の力か神人一如の美は、數百年一度も脅かされたことのない下荒城郷の秋の實りである。

六三 〽 柚 が 池

乗鞍岳の麓、日和田と云ふ在所の山の中に、柚が池と云ふ紺碧の水を湛えて見るから物すごい池がある。此の池の中には永久におそろしい物語が秘められてゐる。何百年か前のことである。日和田村に豪華な生活をしてゐた原助と云ふ長者があつた。土藏も幾棟か立ち並んでゐれば、下男下女も數十人居る大金持で、誰一人うらやまぬ人はなかつた。

原助の家の數多い下女の中に氣だても大變やさしく、仕事をさせると眞面目で人一倍の仕事をやるおちんと云ふ女があつた。年はまだ二十才をこした許りの女だつたが、大變料理をすることが上手で、一口食べただけで「これはおちんの料理だな」と誰でも食ひ分けられるのであつた。其の上田舎には珍らしい美人だつたが、不思議にも誰一人としておちんの生れた所を知つてゐる者はなかつた。或る日原助が野風呂を焚かせ入浴してゐると、一天俄かに曇つてどうく大夕立になつた。すると勝手に夕食の仕度をしてゐたおちんは

これは大變とすぐ飛び出して風呂桶に原助を入れたまゝやすくと軒下へ運びこんでしまつたので、原助始め一同の者は其の大力に舌を卷いたと云ふことである。おちんをお嫁にほしいと申込んで来る人はたくさん有つたが、どうしたものかうんといはない。或時は隣村の長者の息子から申込があつたけれども、うんといはない。お城のお殿様の所からさへ申込があつたが、それでも、うんといはなかつた。ところが隣村の小三郎さんといふ柚が、おちんさんの村の山へ来て仕事をすることになつた。何日かするうちに友だちの柚からおちんの話聞いた小三郎は、大膽にもお嫁さんになつて下さいと申込んだ。すると誰が何と云つてもうんと云はなかつたおちんは、快く小三郎の所へお嫁に行く約束をしてしまつた。おちんが箆笥やつらを持つて小三郎の所へお嫁に行つたのは、それから間もないことであつたが、おちんが箆笥やつらを町から買つて来るのを見た人は一人もないので皆不思議に思つてゐた。今日も小三郎は友だちの柚と一緒に山へ入つて仕事をして居た。もうお晝になつたので小三郎は友だちの柚を誘つていつもの谷間へ下りて御飯を食べはじめた。夏の日には山のつや／＼しい木の葉を照らし、山風はこゝろよく二人の頬をなでて通る。谷間の池から流れ出して来る谷川の水も、すき通る様にすみ切つて流れてゐる。小鳥も枝から枝へと飛びかはして聲高に夏の喜びをうたひつゞけて居る。二人はもううつとりとして谷間の木蔭に世間話を語りつゞけて居た。一しきり話しつゞけてのち、二人は思ひ出した

様にそれ／＼自分の仕事場さして出かけた。仕事に精出してゐた小三郎は大變咽が渴き出したので水を飲まうといつもの食事場へやつて来た。ところがお晝の時空辨當の「メンバ」を谷川の淵に浮べておいたのに、今来て見ると何時の間にか一尺餘もある様な見事な岩魚が二匹其中へ入つて泳いでゐるではないか。小三郎はそれを見つけると、咽の渴を忘れて岩魚を捕へ柚小屋に持ちこんで、とう／＼塩焼にして一匹食べてしまつた。その味のよいこと、嗅のよいこと何とも云ひ様が無い。一匹は友だちの柚にやろうと残して居たのに、とう／＼たへられなくなつて食べてしまつた。不思議／＼見る／＼小三郎は咽の渴くのを覚えはじめた。咽の渴くまゝに「メンバ」に水を汲んで一杯又一杯と呑んだが、益々甚だしくなる許りである。遂にはもう堪へられぬ様になつて、谷川の流れに口をつけて谷水を飲み出したが、渴は益々はげしくもうどうしても堪へられなくなつてしまつた。小三郎さんはもうこれ迄の命とあきらめて、友だちの柚の山から下りて来るのをまぢかねて、苦しい息の下から一部始終の物語りをなし、「おれの命ももう是迄、色々とお世話になつたが、おれが人間としてお話しするのは、これが最後だ。早くお前は此の小屋を片付けて内へ歸つて呉れ。若しぐ／＼して居るとお前まで食べたくなるから、どうか早く歸つて呉れ。さうしてお母さんにも、おちんにも御機嫌よう暮す様に傳へてもらひたい」といひ終つたかと思ふと、小三郎の身体は蛇体になり、きら／＼光る鱗さへ出来てゐる。そして

尾の先には劍を生じ、その劍で地にぐるり／＼と池を掘り初めた。友だちの柚は眞青になつてころがる様に山から逃げ下りた。そして麓へ来た時山の上から地震の様な物すごい地ひびきが聞えて来た。小三郎が山で大蛇になつてしまつた日、小三郎の家ではおちんがお母さん一人を残して畑へ仕事に出たきり、再び歸つて来なくなつてしまつた。柚から一部始終の物語りを聞いたお母さんは、どうしても柚の言葉を信することが出来ず、人々の止るめのも聞かないで只一人小三郎のゐる山をさして出かけて行つた。お母さんが柚小屋のあつた所まで来て見ると、其の邊の山は崩れて何時の間にか、一つの大きな／＼池が出来て青黒い物すごい水がまん／＼とたまつてゐるのであつた。お母さんはよもやと思つた事が眞實だつたので、悲しさのあまり「小三郎や、小三郎や」と呼んで見たが、その答は池水をすべつてあたりの林に響く木霊のみであつた。しかしお母さんはどうしても小三郎の事をあきらめず、「小三郎や、小三郎や、ごんな恐ろしい大蛇の姿でも構はぬから、どうか一目あつておくれ」と再び叫んだ。すると今までごろんと青黒く湛えてゐた池の水がむく／＼と渦を巻き初めたかと思ふと、物すごい唸り聲が聞え初めた。そして紫の煙が一筋むら／＼と立ちのぼるとその中から、兩眼ぎら／＼と光る恐ろしい大蛇が頭をもたげた。「お、小三郎、なさけない姿になりはてたな」此の言葉を名残とし、大蛇の姿が池にかくれると同時に、お母さんはざんぶと許り池の中へ飛びこんでしまつた。小三郎の沈んだ池

は今尚ほ紺碧の水を湛えてゐる。そして今でも夕暮時など此の池のあたりに立つてゐると池の底から小三郎の山で歌つた袖唄が聞えてくるといふ。

六四 里 自 慢

此所は中學校の寄宿舎、土曜の夕食後氣心の合つた者が六七人一室に集つて、四方山の話に花を咲かせた。そして最後は各自の里の自慢話に入つた。年長者の直井は「諸君、此の頃は一般の人々も大變郷土的に目覺めて來て、石器いぢりや古墳踏査などが盛に行はれ、小學校の生徒でさへ何處の畑には矢の根石があるの、ごこの畑で雷斧を拾つたのと話してゐる。今夜は幸土曜日でもあるし、會合したのを機會に各自の郷里にある傳説でも話してみたらどうだ」と云ひ出した。皆の者も大賛成で「それがいゝぞ、早速始め様ぢやないか」「おい直井君、君が座長になつて話を進行させて呉給へ」と、口々に騒ぎだつた。傳説と來たら三度の御飯より大好きな直井は「では僕が進行係を務めさせてもらひ諸君の郷里の傳説の發表會を開きます。順は僕に一任して呉れ。おい佐藤君、まづ君から始めてくれ給へ」佐藤猛君は郷里小坂町の話を始めた。「諸君が萩原方面へ自動車でゆく時必ず渡る朝六橋について話して見やう。昔からどんな闇夜でも朝六橋の附近は薄明るく、丁度夜明前の様に見えるので朝六橋と名付けられたと云ふが、それは何でも其の附近に大昔得難い寶玉を

持つてゐる男があつて、人手に渡るのを心配して地中に埋めてしまつた。その玉が今でも光を放つので薄明りがさすのだと云ふことだ。所がだ、ある時大阪の大金持が夢の告に「飛驒の國小坂の朝六橋畔に得難い寶玉が埋まつてゐるから早く掘り取れ」と白髮の翁から告げられたそうさ。それで早速番頭を遣はしてそれとなく探させたのだ。此の話を聞いた矢ヶ野の富豪善兵衛は番頭をからかふ考でこつそり偽せ玉を埋めて置いた。色々手を盡して探し廻つた番頭は、善兵衛の埋めた偽せ玉を發見して天へも昇る心持で大阪へ持ち歸つた。大阪の大金持は夢の告げに違はず寶玉を發見出來たので大喜びであつた。何日かたつて善兵衛は埋めた偽玉は實はほん物で土藏に残しておいた玉が偽せ玉であることを發見したが、もう遅い」「天罰つてやつたな」「そうさ、天罰で善兵衛の家はそれから段々家運が衰へ始めて遂に零落して其の終さへわからぬ。しかし善兵衛の家のあつたと云ふあとは今でも残つてゐる」直井はにこ／＼しながら「佐藤君ありがたう、朝六橋は何時も通るのにそんな面白い傳説があるとは知らなかつた。今度は山田君に頼もう」

山田勝吉君は口を開いた。「僕の家は萩原にある關係で南飛驒の傳説を話してみやう。諏訪の一目蛇と云つて萩原町の鎮守諏訪神社には昔から一目の蛇がゐる時々之を見かける者がある」と云ふことだ。何でも金森侯が飛驒を平定されてから諏訪城を築くことを計畫し、佐藤六郎左工門を工事の總奉行に任命した。所が諏訪神社の祠が邪魔になるので他へ移轉

することに決し、工事を始めやうとする。一匹の小蛇が蟠つてゐて動かない。追つてもさつぱり動かうともしないので六郎左工門は憤慨して梅の枝を折つて蛇を打つた。それでも小蛇は動かない。あまり強く打ちすぎたので、とうとう一瞬をつぶしてしまつた。さうだ。その後六郎左工門は大阪陣に参加して戦死したので、萩原の人々は「あの蛇の祟りだ」と云ひ合つた。それから一目の蛇が棲む様になり、面白いことには諏訪神社の境内には梅の木が成長しないと云はれてゐることだ。「そうすると、その小蛇は神様のお使ひなんだな。おい山田君、久津八幡の水を呼んだ鯉の話もして呉れぬか」「賛成——」一同は手をたいた。「ではついでに久津八幡の話もさせてもらふとしよう。久津八幡の沿革は抜きにして、本殿は藤原式の古建築で其の墓股の彫刻に「鳴いた鶯」があり拜殿の屋根妻には「水を呼ぶ鯉」があつて共に左甚五郎の作として有名なものなんだ。特に其の鯉はびつと跳ね上げた尾鰭、ひたと胸に引きつけた胸鰭、どこを見ても今にも水中へ躍り込まんばかりの潑刺たる姿をしてゐて流石は左甚五郎の作品だけあるとうなづかれる。ある冬の寒い夜であつた。不意に益田川の水が増し滔々と洪水の様に社前に打ち寄せて来た。鯉の目から異様の光が放たれいつまでもく照り輝いてゐた。そして其の後益田川に洪水の出る度に社前の川岸が荒されるので、それ以来水を呼ぶ鯉として有名になつたわけだ。村人たちは「何とかして此の鯉の水を呼ぶことを防がねばならぬ」と云ひ出し、寄るさきはると其の噂

で持ちきつてゐた。其の時物識り獵人と云ふあだ名をとつてゐた伊兵衛と云ふ爺さんが齊戒沐浴すること七日、手馴れた弓に矢をつがへて飄と射た矢は過またず、鯉の口先二寸許りの所にグサとささり、不思議にも忽ち鯉の眼光が衰へてしまつた。それ以来大水のため川岸が荒されることがなくなつたと云ふことだ。其の後此の古い矢を彫り添へたので、今では「矢のたつた鯉」として有名なものになつたわけだ。「中々面白い話だな。今でも屋根妻にあるんだな」「昨年の秋拜殿が修繕されたので「矢のたつた鯉」は社寶として保存することになつたと聞いてゐる」「所で山田君、僕の伯父が下呂へ入湯に行つた時、湯之島館特製の栃煎餅を土産に持つて来てくれたが、これにも大變哀れな物語があると云ふが、君知つてゐるか」「うん栃煎餅か、知つてゐる。其の哀れな物語は栃には直接関係はないらしいんだ。佐藤君は小坂の生れだから君が話したらどうだ」「あゝあの物語りなら僕の方が詳しいから僕が話さう」と又佐藤君が語り出した。

「昔一人の旅人が小坂村のあたりで道に迷ひ畑に働いてゐた百姓に久々野の方へ行く道を尋ねると、百姓はつひ、からかつて見る氣になり、すぐ前の洞をさして此の洞をすん／＼上ると山越しに久々野へ行けると教へたので、旅人が大變喜んで道なき道を辿つて登つて行つた。いくら行つても人家らしい所もなく、何時の間にか深い林の中に迷ひ込んでしまつた。腹は減る、今辿つて来た道の方角も判らず、困り果てた旅人は絶望の末、とある栃

の木の下で覺悟の自殺をしてしまった。その後年を経るに従ひ栃の木は魂あるものゝ様に恐ろしい程成長して、幾抱へもある大木となり、實も豊にみゆる様になつた。けれども不思議なのはその栃の實に芽が無く、どう苦心しても發芽しないので芽無栃と云つて大評判になつた。此のお伽噺の様な栃の木は、何百年かたつとどうく枯れてしまつて、其の跡に栗の木が生えた。すると又どうしたところかその栗の葉が皆二葉になつてゐたそうだ。栃の木にからまるかうした傳説があり、又栃は山國の特産であるので、栃を原料に郷土味の深い煎餅を作りあげたわけなのだ。「なる程是も面白い傳説だな。しかし今夜の活躍者は佐藤君と山田君だけで、吉城の方が振はん。どうだい、齋藤君上寶の傳説でも話しては」と直井君に請求されて齋藤君はぼつ／＼語り出した。

「上寶でも双六谷は色々な凄惨な傳説を幾つも持つてゐる。黒淵の牛、碁盤石、材木岩、等と話せば盡きないが、大分長くなつてあきが來かけてゐる時だから手短かに話してみやう。双六谷の黒淵と云へば高山町まで聞えてゐる凄惨な淵で、見ただけでも身ぶるいをする程だよ。此の淵には背中に白の班のあるとても大きな黒牛が住んでゐて、どうかすると頭を現はすことがある。それを村人が見つけた年は必ず大旱魃になつて、二十日たつても一月たつても雨と云ふものを見られぬ様になつてしまふ。それでその年は雨乞ひをしなければならぬが、その方法は雪洞に蠟燭をともして黒淵へ流すとやがて渦の中に巻きこまれてしまひ、

水の中から光がさす時は雨乞ひを聞き届けられたしるしだそうなの。この主は煙を非常にきらふと昔から傳へられてゐる」此の時舎官の先生が巡回に來られた。「諸君、何だね、えらい面白そうだな」「はい、今晚は土曜日のので僕等が集つて生れ里の傳説を話し合つてゐる所なのです。先生も一つお話し願へませんか」先生は坐りながら云はれた。「僕の出生地は奥州ですから飛驒とは餘程趣の違つた傳説があるが、折角齋藤君が話してゐたやうだから又よい機會を見て話すとて、今晚は齋藤君の話に拜聴しやう」「齋藤君、光榮だぜ、さあ續きをやりたまへ」「淵の話はあれで終つたのだが。双六谷の奥の方にはとても大きい人間が住んでゐるそうで、時によると一疊敷もある様な大下駄が流れて來ると云ふことだ。又こんな話もある。或る時村人が二人双六谷へ釣に入り一心に釣つてゐたが、何の氣なしに相手の男の顔を見ると妖怪の顔なので喫驚して「あつ」と聲をあげると相手の男も此の男の顔を見て喫驚し、大聲をあげた。そして釣竿を打ち捨ててどん／＼走り出したので、相手の男も走り出した。金木戸まで來てあどを振り返ると、後から走つてくる男は妖怪ではなく先に連れだつて行つた友人ではないか、二人はこれから二度と双六谷へ釣に行かなかつたと云ふことだ。まだ幾らもあるんだが、もう十時すぎたから又話そう」「あゝ面白かつた。此の次は都竹君も、石田君も話せよ。坂下地方にも面白いのがあるつて云ふぢやないか」と直井君が閉會を宣したので一同は各自の室へ歸つた。



若あつたさ

何れの人か、命を奪うた...

何故異性に魅力を感じたか...

此水肉のはるこしよ...

あゝ流水の出よ...

たゞのぬれ、瞬時の世糸！後悔い

るものも、ゆるい水...

一度はや... 便所へ行かぬ

かり云つて死ス人モアル...

モハナイデモ、ナシ河...

欲 望ヲ満チシ、アルミ...

死セシムコリハ、マシ...

(女ニカハル、若人)

君ト同ジリ人ヲ探シ...

方法、デカウレタ肉体的

欲 望ヲ満チシ、アルミ...

死セシムコリハ、マシ...

(女ニカハル、若人)

君ト同ジリ人ヲ探シ...

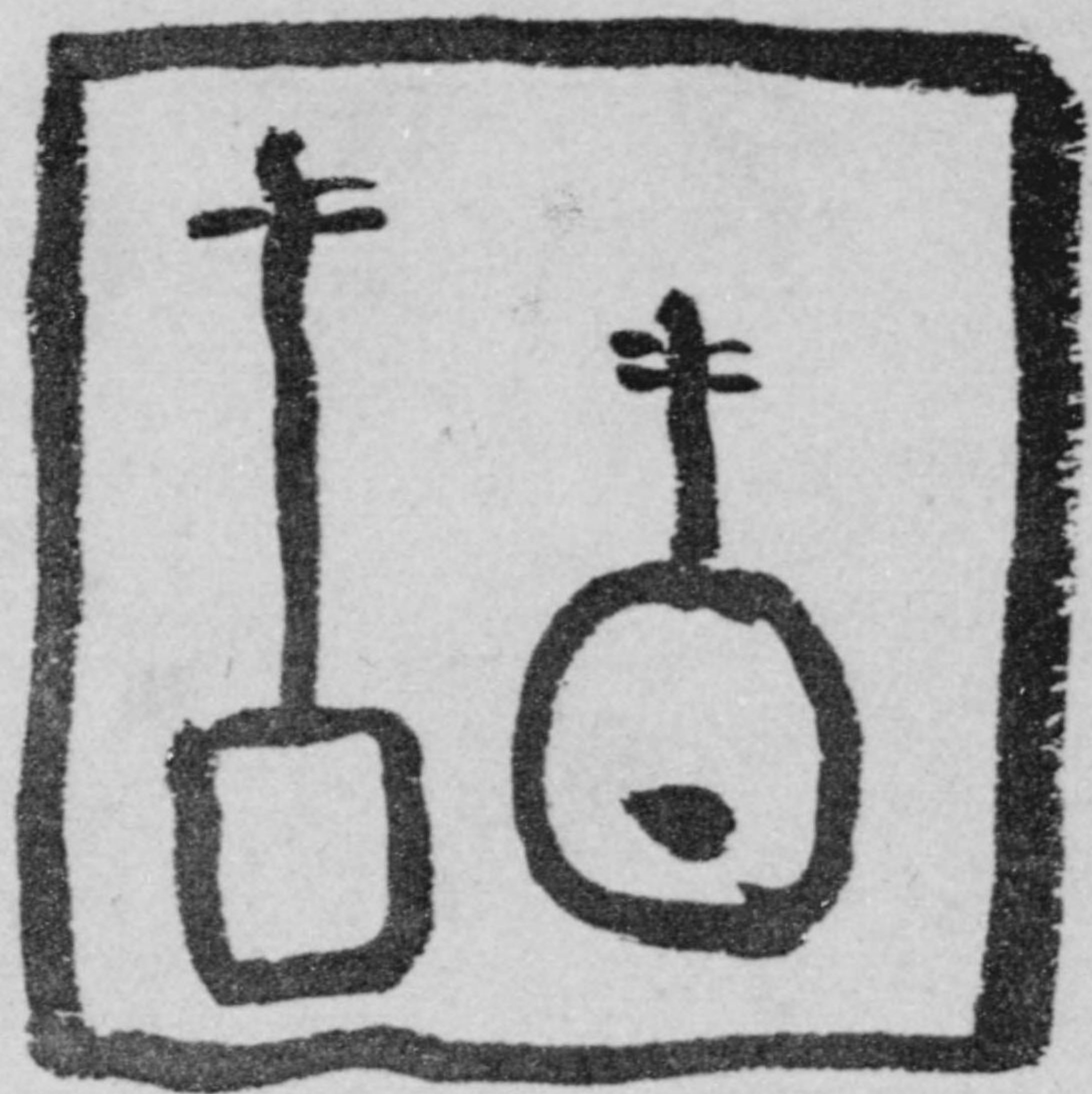
方法、デカウレタ肉体的

欲 望ヲ満チシ、アルミ...

死セシムコリハ、マシ...

-5 168 35 915" data-label="Text">

(女ニカハル、若人)



飛驒の民謡



### 飛驒高山盆踊

山下節朗編曲

♪ 遠くをく

イノリ マ スー ゴー エ  
かほの を をー ぜー の

ハチマン サ マ エ オ ドリ  
むんむの う え も ち どり

ナ ナー ナー ヨ ハー フ ラ スー ヨ ニ  
こー すー と ヤー の か あー ち が

### 高山町の民謡

#### 高山盆踊音頭

- 一、飛驒の高山お城の御番 勤めかねたよ加賀の衆が
- 二、高い山でも登れば下る 妾しやあなたに片登り。
- 三、祈りかけましょ八幡様へ 踊り七夜は降らぬよに
- 四、音頭どりめが橋から落ちて 橋の下でも音頭どる

湯之島音頭	温泉小唄	下呂町小唄	大名田町の民謡	丹生川村の民謡	清見村の民謡	上枝村の民謡	大八賀の民謡	神代踊の歌詞	宮村の民謡	古大臣	酒場うた	長唄	はやりうた
.....	.....	.....	.....	.....	..... (牧ヶ洞、福寄)	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
八四	八三	八二	七九	七六	七一	六三	五〇	四三	四一	三七	三三	三三	三二